

2013 年度

東洋大学審査学位論文

現代青年における友人関係の特徴に関する社会心理学的研究

社会学研究科社会心理学専攻博士後期課程

3年 4550060001 本田 周二

目次

目次	1
序論	4
第1部 友人関係に関する先行研究の整理と本論文の枠組み	6
第1章 社会調査や社会学から見た友人関係	8
第1節 日本と他の国における友人関係の比較	8
第2節 友人関係におけるネガティブな側面	10
第3節 友人関係におけるメディアの役割	12
第4節 友人の数	13
第5節 社会学の視点から見た友人関係	14
第6節 第1章のまとめ	15
第2章 心理学の研究から見た友人関係	16
第1節 友人関係の定義	16
第2節 対人魅力	18
第3節 対人関係の諸理論	19
第4節 友人関係の機能	21
第5節 友人関係とパーソナリティ, 精神的健康との関連	22
第6節 現代青年の友人関係の特徴	24
第7節 現代青年の友人関係に関する研究の問題点	27
第8節 第2章のまとめ	28
第3章 友人関係における動機づけと自己決定理論	29
第4章 本論文の構成	34
第1節 本論文の目的	34

第2節	友人関係における動機づけと友人つき合いの多さ, 精神的健康	36
第3節	友人関係における動機づけとコミュニケーション	38
第2部	現代青年における友人関係の特徴に関する実証的検討	42
第5章	現代青年の友人や友人の数に対するイメージについての基礎的検討	43
第1節	友人に対するイメージ, 友人とつき合う動機に関する調査(研究1)	43
第2節	友人数の多さに対する対人イメージに関する調査(研究2)	47
第3節	友人数の多さが対人印象に与える影響(1) —好意度の観点から—(研究3)	51
第4節	友人数の多さが対人印象に与える影響(2) —他者の行動推測の観点から—(研究4)	55
第5節	第5章のまとめ	62
第6章	友人関係における動機づけと友人つき合いの多さ, 精神的健康との関連	63
第1節	友人関係における動機づけと友人の数, 友人関係満足感との関連(研究5)	63
第2節	友人関係における動機づけと自尊感情, 生活満足感との関連(研究6)	68
第3節	第6章のまとめ	74
第7章	友人関係における動機づけと友人とのコミュニケーションとの関連	75
第1節	友人関係における動機づけと, 対面および携帯コミュニケーションとの関連 —親密さの程度の高い友人に着目して—(研究7)	75
第2節	友人関係における動機づけと, 対人葛藤時の対処方略との関連 —親密さの程度の高い友人に着目して—(研究8)	83
第3節	友人関係における動機づけと, コミュニケーションとの関連 —親密さの程度の低い友人に着目して—(研究9)	90
第4節	第7章のまとめ	99

第3部 全体的総括	100
第8章 本実証的研究の知見の要約, 本論文の意義	103
第1節 本実証的研究のまとめ	103
第1項 現代青年の友人や友人の数に対するイメージについて	103
第2項 友人関係における動機づけと 友人つき合いの多さ, 精神的健康との関連	105
第3項 友人関係における動機づけと友人とのコミュニケーションの関連	106
第4項 本研究において見られた性差について	107
第2節 友人関係研究と他領域との連携の可能性	111
第9章 本論文の問題点と今後の課題	113
第1節 年代について	113
第2節 研究方法について	114
第3節 友人関係における動機づけの発達的な変化について	114
第4節 友人関係におけるコミュニケーションについて	115
第5節 オンライン上の友人について	115
本論文に含まれている研究の発表先一覧	118
引用文献	119
謝辞	132

序 論

人は、生まれてから様々な対人関係の中で成長し、日々の生活を営んでいくものであるが、その中でも友人関係が重要な関係性の一つとして認識されていることに異論はないであろう。友人関係は子どもから大人までどの世代においても存在しているが、とりわけ、同世代の集団生活が中心となる児童期や青年期において意識されることが多い。誰しもが友人から多大なる恩恵を受け、その一方で、友人との関係に悩み苦しんだ経験を持っているのではないだろうか。友人からのサポートによりつらい状況から立ち直ることができた話や友人とのトラブルがきっかけで事件に発展したものまで、テレビドラマやニュースで取り上げられるものは枚挙にいとまがない。友人関係や友情に関するテーマは、哲学者や文学者にとっても魅力的なテーマであり、友人とは何か、友人との良好な関係を築くためにはどのようにしたらよいかについて、繰り返し記述されてきた（たとえば、大塚, 1997；中務, 2004）。このように、哲学からドラマまでという非常に幅広い分野で扱われるというのが友人関係の特徴であると言える。

本論文では、現代青年の友人関係について心理学の観点から検討を行う。友人関係に関する研究は、心理学の領域においても数多く行われてきており、様々な知見が蓄積されてきている。特に、日本の友人関係研究においては、ここ 20 数年ほど「青年の友人との付き合い方の変容」に焦点が当てられてきた。走れメロスのような無二の友情物語ではなく、現代青年は友人に非常に気をつけているという現象が至る所で見られるようになり、それが社会問題としても取り上げられるようになってきている。このような「青年の友人との付き合い方の変容」は、現代にとって特有の現象なのであるだろうか、また、青年の友人との付き合い方は本当に変容しているのだろうか、その心理学的な背景はどのようなものであろうか、これらの点に関して、本研究では、現代にとって特有の現象ではなく、人がなぜ友人とつき合うのかという友人関係における交際動機（友人関係における動機づけ）には様々なものがあり、その動機づけの違いによって説明が可能であるという立場を取る。

その上で、友人とのコミュニケーションや精神的健康との関連を検討することで、現代青年の友人関係の特徴を包括的に把握することを試みる。本研究の成果によって、友人関係を扱う際の視野が広がり、より現実に即した友人関係を捉えることが可能となり、そのことが、現代青年における友人関係にまつわる諸問題に対して新たな示唆を提供することができると考えられる。

第 1 部 友人関係に関する先行研究の整理と本論文の枠組み

まず、これまでの社会調査の結果や社会学の知見から日本における友人関係の特徴について把握する（第1章）。友人関係は身近なテーマであるため、多岐にわたる領域において扱われてきている。日本と他の国において友人関係の特徴の違いは見られるのか、友人関係の重要性は強調されることが多いが、反対に留意すべき側面はあるのか、メディアの発達により友人関係にもたらした変化はあるのかなどについて、社会調査や社会学の結果を中心にみていくこととする。

その後、心理学領域における友人関係に関する研究について概観する（第2章）。ここでは、友人関係に関する定義を整理するところから始める。そして、友人関係に関わる理論や友人関係の機能について先行研究をみていくことで現代青年の友人関係の特徴を明らかにした上で、これまでの研究における問題点を見出していく。第3章では友人関係における多様な動機づけに関連する自己決定理論を取り上げ、第4章において、本論文の目的と本論文において検討するいくつかの変数（精神的健康、対面、携帯でのコミュニケーション、対人葛藤）に関する先行研究についてみていく。

第1章 社会調査や社会学から見た友人関係

本章では、これまでに行われてきた様々な社会調査の結果や社会学の知見を概観することによって日本における友人関係の特徴を捉えることを試みる。友人関係についてたずねている社会調査は多岐にわたり、それらをいくつかの観点から整理することによって、現代青年の友人関係の特徴を把握する。具体的には、世界青年意識調査（内閣府, 2004, 2009）、青少年の社会的適応能力と非行に関する調査（内閣府, 2001）、非行原因に関する総合的研究調査（内閣府, 2010a）、若者の意識に関する調査（内閣府, 2010b）、子ども生活実態基本調査（Benesse 教育研究開発センター, 2010）、情報化社会と青少年に関する意識調査（内閣府, 2002, 2007）、高校生の友人関係と生活意識（日本青少年研究所, 2006）の結果を見ていく。同時に、青年の友人とのつきあい方の変容に関して、社会学の知見から明らかにしていく。

第1節 日本と他の国における友人関係の比較

様々な対人関係の中で、友人関係が人々にどのように認識されているのかを明らかにするために、世界青年意識調査の結果に着目する。世界青年意識調査とは、内閣府が1972年以来5年ごとに実施している調査である。調査対象者は、日本、アメリカ、ドイツ、スウェーデン、韓国など様々な国の18歳～24歳までの青少年であり、調査内容は、家族関係や学校関係、友人関係、人生観などについて回答を求めるものである（なお、調査対象国は、実施回により異なる）。本調査の結果を検討することにより、日本において友人関係がどのように位置づけられているのかを明らかにすることができると考えられる。

世界青年意識調査はこれまでに8回実施されており、その中で第7回（内閣府, 2004）と第8回（内閣府, 2009）の結果を示す。「どのような時に充実感を感じるか」という質問に対して、ほとんどの国において「友達や仲間といるとき」という回答が1位となっており、多くの国の青年にとって友人や仲間と一緒にいることは、充実感をもたらしていることが示されている（Table 1.1）。次に、「悩みや心配ごとがあった場合に、誰に相談するか」という質問に対して、日本は、他の国に比べて悩みや心配ごとがあった場合に「近所や学校の友だち」をあげる割合が多い（Table 1.2）。なお、この質問項目に対する回答の年次推移を見ても、日本は、「近所や学校の友だち」をあげる割合が一貫して高かった。また、学校に通うことの意義についてたずねた項目（複数回答）に関して、日本は、「友だちとの友情を育む（65.7%）」と考えているものが他の国と比べて多く、逆に、「職業的スキルを身につける

(30.6%)」「一般的・基礎的な知識を身につける (55.9%)」と考えているものが他の国と比べて少ないことが明らかとなっている。これらを考えると、日本の青年にとって、友人は他の関係に比べて重要な関係であり、特に学校生活において友人関係が当人の精神的健康に強く関連している可能性はとて高いと考えられる。

Table 1.1 充実感を感じる時 (複数回答)

(%)

	1位	2位	3位	4位	5位
日本	友人や仲間といる時 72.5	スポーツや趣味に 打ち込んでいる時 50.9	仕事に 打ち込んでいる時 30.6	親しい異性といる時 27.9	家族といる時 27.4
韓国	友人や仲間といる時 52.7	仕事に 打ち込んでいる時 43.2	スポーツや趣味に 打ち込んでいる時 32.6	勉強に 打ち込んでいる時 31.3	家族といる時 28.1
アメリカ	家族といる時 74.1	友人や仲間といる時 71.3	社会のために役立つこ とをしている時 44.6	仕事に 打ち込んでいる時 43.4	親しい異性といる時 41
スウェーデン	友人や仲間といる時 84.5	家族といる時 63.2	親しい異性といる時 55.5	スポーツや趣味に 打ち込んでいる時 48.6	他人にわずらわされ ず、一人でいる時 42.4
ドイツ	友人や仲間といる時 70.2	親しい異性といる時 42.0	家族といる時 41.4	スポーツや趣味に 打ち込んでいる時 36.9	仕事に 打ち込んでいる時 36.4

第7回世界青年意識調査(内閣府, 2004)をもとに作成

Table 1.2 悩みや心配ごとの相談相手（複数回答）

（%）

	1位	2位	3位	4位	5位
日本	近所や学校の友だち 59.5	母 43.6	恋人 21.8	父 20.3	きょうだい 18.2
韓国	近所や学校の友だち 65.1	母 34.0	きょうだい 21.6	恋人 16.9	父 16.1
アメリカ	母 57.9	父 34.4	恋人 32.6	近所や学校の友だち 32.3	きょうだい 30.5
スウェーデン	母 60.3	近所や学校の友だち 52.3	きょうだい 38.9	恋人 36.8	父 35.3
ドイツ	母 63.4	父 40.4	恋人 30.6	近所や学校の友だち 29.1	きょうだい 21.2

第7回世界青年意識調査(内閣府, 2004)をもとに作成

また、親友の定義の違いについて日本青少年研究所（2006）が調査を実施している。ここでは、日本、アメリカ、中国、韓国の4か国を対象に、親友の定義についてたずねている。その結果、日本においては、「何でも打ち明けられる人」「ふざけられる人」「自分の意見を率直に言える人」「頼りになる人」などが親友の定義として選択されていた。一方、「考えが同じ人」「趣味が同じ人」「性格が似ている人」「やさしくしてくれる人」など、他の国においては多く選択されていた項目についてはあまり選択されていなかった。また、アメリカでは「儀礼的な付き合いをする人」が他の国と比べて多く選択されていた。このように、親友の定義は国によって多様であることが明らかとなっている。

第2節 友人関係におけるネガティブな側面

前節において、日本の青年における友人関係の重要性が明らかとなり、友人関係が当人にとって非常に有益な関係性であると捉えられていること、親友の定義は国によって異なることが示された。しかし、友人とのつき合いにおいては、必ずしも良い面のみとは限らない。本節では、青少年の社会的適応能力と非行に関する調査（内閣府, 2001）、非行原因に関する総合的研究調査（内閣府, 2010a）、若者の意識に関する調査（内閣府, 2010b）、子ども生活実態基本調査（Benesse 教育研究開発センター, 2010）という4つの社会調査に着目する。

まずは、それぞれの調査の目的について簡潔に述べる。青少年の社会的適応能力と非行に関する調査（内閣府, 2001）と非行原因に関する総合的研究調査（内閣府, 2010a）は、どちらも青少年の健全育成と非行対策のための基礎的な資料を得るために行われているものであり、一般少年と非行少年を対象に、対人関係や非行経験、対人適応能力などについてたずねるものである。若者の意識に関する調査（内閣府, 2010b）は、ひきこもりに対する地域支援ネットワークの形成促進を目的とし、学校や就労、家庭の状況などについてたずねるものである。子ども生活実態基本調査（Benesse 教育研究開発センター, 2010）は、小学生～高校生の生活に関する実態や意識を捉えることを目的として、対人関係や生活習慣、将来展望などについてたずねるものである。これらの調査はそれぞれ別の目的で実施されているが、すべての調査において友人関係に関する項目が含まれている。

青少年の社会的適応能力と非行に関する調査（内閣府, 2001）によると、「他者とのいざこざや他者からの批判を避けるために、人とはなるべく表面的につき合うようにしている」という項目に対して、全体の4割弱が「あてはまる」「ややあてはまる」に回答をしていた。また、友だちが自分をどのような人間だと思っているか気になるという項目に対して、全体の7割程度が「あてはまる」「ややあてはまる」に回答をしていた。次に、非行原因に関する総合的研究調査（内閣府, 2010a）において、4割～5割ほどの回答者が、今つき合っている友だちにできればつき合いたくない人が存在していることを明らかにしている。そして、子ども生活実態基本調査（Benesse 教育研究開発センター, 2010）において、友だちとのつき合いに関して、「仲間はずれにならないように話を合わせる」といったつき合い方を4割～5割ほどの回答者が行っていること、そして、2割程度ではあるが、友だちとのやりとりで傷つくことが多いと回答しているものが存在していた。他にも、若者の意識に関する調査（内閣府, 2010b）によると、ひきこもり群に属している人は、一般群に属している人よりも学校生活において、「友だちにいじめられた」経験が多く、「友だちとよく話した」「親友がいた」経験が少ないこと、また、悩みを相談する相手として「友人・知人」を選ぶ割合が少ないことが明らかとなっている。

これらの結果を見ると、友人は当人にとって重要であることは間違いないが、すべてにおいてプラスの働きをする関係性ではなく、重要であるがゆえに、友人とのやりとりに気を使っていることがわかる。

第3節 友人関係におけるメディアの役割

第1節、第2節では、現代青年において友人関係が重要な役割を持っていること、そして、必ずしもすべての友人関係が当人にとって望ましいものとは限らないことを複数の社会調査の結果から示してきた。本節では、現代青年のメディア利用という側面から友人関係との関わりについて考える。

平成22年通信利用動向調査(総務省, 2011)によると, 10代後半の携帯電話利用率は81.6%にも及び, 携帯電話を所有している20代の9割以上が携帯メールを使用していることが明らかとなっている(Miyata, Boase, Wellman, & Ikeda, 2003)。また, 青少年のインターネット利用環境実態調査(内閣府, 2011)によって, 高校生の95.6%が携帯電話を所有していること, そして, 携帯電話を所有している人の中で98.7%が携帯電話でメールを利用していることが明らかにされている。このように, 現代青年が他者とコミュニケーションを行う際に, 対面でのコミュニケーションのみではなく, 携帯電話を介したコミュニケーションも日常的に行なっているのである。

それでは, 現代青年は友人とのつき合いにおいて携帯電話をどのような位置づけで認識しているのだろうか。この点に関して, 情報化社会と青少年に関する意識調査(内閣府, 2002, 2007)から見ていく。この調査は, 携帯電話やインターネットなどのメディア利用に関する青少年の意識などを把握することで, 今後の青少年育成施策の推進のための基礎的な資料を得ることを目的として行われている。まずは, 携帯電話の利用状況であるが, 中学生, 高校生の3割以上が一日20回以上のメール発信を行なっており(内閣府, 2007), 親しい友人とのコミュニケーションの際に, 対面での会話だけでなく, 3割程度の人が携帯電話での会話やメールを行なっていた(内閣府, 2002)。次に, 携帯電話の利用動機に関して, 6割以上が「友だちとの関係を良くできるから」と回答しており, 4割以上が「今までの友だち関係をより強くするのに役立つ」「友だちを身近に感じることができる」と回答していた(内閣府, 2002)。また, 7割~8割の人が携帯電話の利用によって, 友人とのコミュニケーションが以前よりも広がったと回答していた(内閣府, 2007)。

これらの結果を見ると, 現代青年にとって, 携帯電話は, 友人との距離をより近くし, つき合いを広げ, 親密さを促進するための有益なツールであると位置づけていることがわかる。

第4節 友人の数

前節において述べたように、携帯電話やインターネットの普及に伴い、他者とのコミュニケーションはこれまでよりも気軽に、そして広範囲に行えるようになってきている。このような変化は、人がこれまでよりも多くのコストをかけずに他者とのコミュニケーションを行えることを意味している。それでは、現代青年は、現実にどのくらいの友人と日々コミュニケーションをとっているのだろうか。本節では、友人の数（友人つき合いの数）に着目してこの問題を検討する。

この点に関して、青少年の社会的適応能力と非行に関する調査（内閣府, 2001）、子ども生活実態基本調査（Benesse 教育研究開発センター, 2010）、情報化社会と青少年に関する意識調査（内閣府, 2002, 2007）、青少年の生活と意識に関する基本調査（内閣府, 2001）の結果を見る。青少年の社会的適応能力と非行に関する調査（内閣府, 2001）では、親しい友人の数をたずねており、10人以上を選択している割合が3割～5割程度であった。そして、親しい友人の種類を聞くと「同じ学年・年齢の人」というのが1位であった。続いて、子ども生活実態基本調査（Benesse 教育研究開発センター, 2010）では、「悩み事を相談できる友だち」の数についてたずねており、4人以上という回答が小学生、中学生、高校生では4割程度であった。そして、情報化社会と青少年に関する意識調査（内閣府, 2002）では、「友だち」「親友と呼べる人」「会ったことのあるメル友」「会ったことのないメル友」という4つの種類に分けて、それぞれの数についてたずねていた。結果、「友だち」の数について、「6～10人」が最も多かった。また、「親友と呼べる人」については、「2～3人」と4, 5割の人が回答していた。一方、「会ったことのあるメル友」「会ったことのないメル友」の数に関しては、8割以上が「0人」と回答していた。最後に、青少年の生活と意識に関する基本調査（内閣府, 2001）の結果を見る。この調査は、青少年の健全育成に関する総合的な施策の樹立のための基礎資料を得ることを目的として、学校や家庭、友人との関わりにおける青少年の生活実態、価値観および満足感などをたずねている。その結果、友だちの数に関して、18歳～21歳の人たちは、「4～5人」が31.7%と最も多く、次いで、「6～9人」が21.4%であった。

これらの調査を見ると、他者とのコミュニケーションが比較的容易に行うことができるようになったにもかかわらず、親しい友人の数はそこまで多くないと言えるのではないだろうか。しかし、今回、取り上げた調査は、2000年代前半の調査が多く、現在よりも携帯電話やインターネットの普及が進んでいない時期であったために、友人の数があまり多く

あげられなかった可能性がある。たとえば、オリコン（2010）によると、大学生の親友や友達と呼べる人の平均人数は 44.8 人であった。また、これらの調査の多くは、親しい友人の数についてたずねており、第 2 節で取り上げたような、あまりつき合いたくない友人などは友人の数としてあがってこなかった可能性もあると考えられる。

第 5 節 社会学の視点から見た友人関係

前節までは、これまでに行われてきた様々な社会調査の結果を概観することによって日本における現代青年の友人関係の特徴を明らかにしてきた。本節では、社会学の知見から現代青年の友人関係の特徴について見ていく。社会調査の結果から、友人関係にはポジティブな側面だけではなく、ネガティブな側面があり、気を遣いながら友人とのコミュニケーションをとっていることが明らかとなっている。それでは、社会学においては現代青年の友人関係はどのように捉えられているのであろうか。

土井（2008）は、現代若者が仲間との関係が一時的にでも揺らぐことを極端に恐れているため、自分だけがその場で浮いてしまうのではないかという不安を打ち消すために、その場の空気を読んでノリを合わせ、友人に嫌われないようにしていると主張しており、このような関係性を「優しい関係」としてあらわしている。また、春日（2009）は、いくつかの知見を踏まえ、友人関係における「やさしさ」が、相手に同情したり相手の気持ちを察して一体感を持つという意味合いから、互いに立ち入らないような注意深さが必要で、互いの関係が滑らかに維持されるという意味合いに変化していることについて記述している。これは、友人関係が希薄化しているという立場をとるものである。

一方、福重（2006）は、現代青年の特徴を「多様性」として捉え、友人の捉え方やつき合い方が「分散」していることを指摘しており、友人関係が希薄化したのではなく、「友人」の категорияが拡大し、従来は「友人」と呼びえなかったような関係であっても「友人」の категорияに含まれるようになったのではないかと主張している。また、松田（2000）は、携帯電話にかかってきた番号を見て出る、出ないを決めるという「番通選択」とい現象を踏まえ、希薄化した友人関係ではなく、選択的な友人関係を形成していると述べている。そして、この傾向は若者に特有の現象ではなく、時代の経過に伴う都市化といったより広い文脈で論じるべきであると主張している。

このように社会学の中では、友人関係が希薄化しているという立場、友人関係を捉える視点が広がったという立場、選択的な友人関係を形成しているという立場など、様々な視

点から友人関係の特徴について言及している。

第 6 節 第 1 章のまとめ

本章では、これまでに行われてきた様々な社会調査の結果や社会学の知見を中心に概観することによって日本における現代青年の友人関係の特徴を捉えることを試みた。その結果、(1) 日本においては、他の国よりも友人関係を重要な対人関係であると捉えていること、(2) 親友の定義は国によって異なること、(3) 友人関係にはポジティブな側面だけではなく、ネガティブな側面があり、気を使いながら友人とのコミュニケーションをとっていること、(4) 友人とのコミュニケーションにおいて、携帯電話は、お互いの距離を縮め、つき合いを広げ、親密さを促進するための有益なツールであると位置づけていること、(5) つき合っている友人の数は 10 人程度であること、(6) 社会学の立場からは、友人関係が希薄化しているという立場、友人関係を捉える視点が広がったという立場、選択的な友人関係を形成しているという立場など、様々な視点から言及がなされていることが明らかとなった。第 2 章では、心理学の領域で行われてきた研究を概観することで、現代青年の友人関係の特徴を把握することを試みる。

第2章 心理学の研究から見た友人関係

前章では、様々な社会調査の結果を概観することによって、日本における友人関係の特徴についてまとめてきた。本章では、心理学の領域において行われてきた友人関係に関する研究を概観することによって友人関係（中でも、日本における友人関係）の特徴を捉えることを試みる。まずは、友人関係の研究において問題点として指摘されることの多い、友人関係の定義およびそれに関連する親密さの測定について見ていく。

第1節 友人関係の定義

これまで友人関係の研究は、人が生活をしていく上で重要な対人関係の一つとして、いくつもの検討がなされてきた。特に、青年期においては、友人関係の重要性が高いとされており、多くの検討がなされている（e.g., Bagwell, Bender, Andreassi, Kinoshita, Montarello, & Mukker, 2005）。Figure 2.1 は、2012年11月時点における日本の友人関係に関する研究を取り上げ、研究対象者の分類を行ったものである¹。これを見てもわかるように、日本の友人関係研究においては、青年期前期から後期にあたる中学生から大学生までを対象とした研究が大部分を占めている。

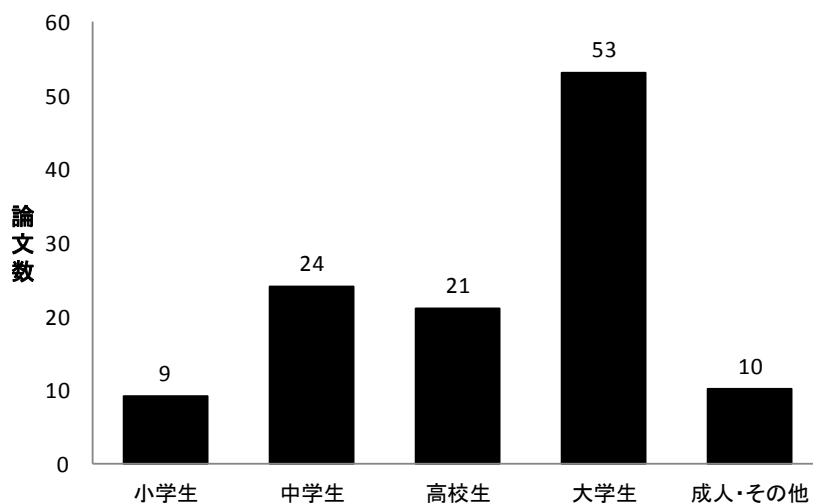


Figure 2.1 研究対象者分類

¹論文の検索は、Ciniiにより行った。タイトルに「友人」を含み、雑誌は心理学の研究に関連するものに限定をし、検索を行った。対象となった雑誌は、心理学研究、社会心理学研究、パーソナリティ研究、実験社会心理学研究、教育心理学研究、発達心理学研究、青年心理学研究の7誌であった。なお、「友だち」や「親友」を含んだ研究も検索したが、全般的な傾向としては「友人」を含んだ論文が多かった。

友人関係を対象とした研究は国内外問わずに多く行われてきているが、友人に対する定義の不一致によりこれまでに多くの批判を受けてきた (Roberto & Kimboko, 1989)。以下では、先行研究において扱われてきた友人関係の定義、そしてそれに関連する親密さの測定についていくつか見ていく。

海外の研究における友人関係の定義は、「家族以外の自発的で親密な他者」(Heyl & Schmitt, 2007) といったように、「親密さ」が定義の中に含まれているものと、「互いが助け、共有し合う関係」(Berndt, 2002), 「助け, 快適さ, 感情的共有, ちょうど良い楽しさの源」(Caldwell & Peplau, 1982), 「平等, 相互関与, 相互好意, 自己開示, 様々な種類のサポートの供給に特徴づけられた自発的, 個人的な関係」(Fehr, 2008) といったように、「互惠性」が定義の中心に置かれているものがある。

親密さに関して, Adams, Blieszner, & DeVries (2000) は, 認知的 (自己開示, 社交性, 援助, 活動の共有), 感情的 (忠義/コミットメント, 信頼, 共有された価値や興味, 受容, 共感, 好意的評価/尊敬), 行動的な側面 (親和性), 構造的特性 (結束, 均質性), プロセスの代理評価 (proxy measures of process) (つき合いの長さ, 接触頻度, 接触時間) という 5 つの要素から捉えており, 5 つの要素の組み合わせにより親密さの程度を測定している。他にも, Berscheid, Snyder, & Omoto (1989) は, 頻度, 多様性, 強さという 3 つの組み合わせによって親密さを測定している。

日本の研究においても, それぞれの研究において友人関係を定義した上で, 親密さを測定することで友人関係を捉えている。たとえば, 山中 (1994) は, 「顔や名前を知っている程度の同性の友だち」(親密さレベル 1), 「会えば話をする程度の同性の友だち」(親密さレベル 2), 「ある程度親しい同性の友だち」(親密さレベル 3), 「最も親しい同性の友だち」(親密さレベル 4) というように友だちの中で 4 段階に親密さを分けている。小池・吉田 (2007) では, 山中 (1994) を元に, 「顔や名前を知っている程度の同性の友だち」(親密さレベル 1) を「顔見知り」, 「ある程度親しい同性の友だち」(親密さレベル 3), 「最も親しい同性の友だち」(親密さレベル 4) を「友人」と定義している。高木 (1992) は, 「親友もしくはそれに近いと思われる同性同年代の友人」(関係の親密さ High 条件), 「あまり好意をもっていない同性同年代の知人」(関係の親密さ Low 条件) として区別をし, 関係の親密さが低い相手は, 「知人」というラベルがつけられており, 友人とは区別されている。下斗米 (2000) は, 「大学に入学以来知り合った人の中からあなたと一緒に居合わせる機会がある同性の人を, 具体的に, 1 名思い浮かべてください。」という教示をもとに, イニシャルを記入させ,

その上で、「想定頂いた方は、あなたにとって、『親友』と呼べるほど親密な人でしょうか、『友だち』つき合いをする位、あるいは『顔見知り』程度の間柄という方がふさわしいでしょうか」という質問文を提示し、親友、友だち、顔見知りの3段階に振り分けている。他にも「どの程度親しいですか」という教示のもと、友人との親密さを測定する研究も見られる（たとえば、加藤, 2007）。宮本（2007）は、日本人の場合、「友人」が意味する対人関係の範囲が広く（携帯電話のメモリーに登録されているだけでもその相手を友人と判断する）、友人と言っても質的に異なる友人関係が混在している可能性があることを述べている。これは、比較的浅い交わりであってもその相手を友人と呼ぶ傾向があることを示唆している。

このように、友人関係に関する定義は多岐にわたっており、親密さを多面的な側面から捉える立場と、親密さを包括的に当人の主観によって捉える立場があることがわかる。本論文においては、現代青年の友人関係の特徴を包括的に把握することを目標としているために、多様な友人関係を捉えることが重要となる。そこで、日本の先行研究に準拠し、親密さの程度を回答者自身の主観的な判断により弁別させて検討を行うこととする。次節においては、対人魅力の観点から友人関係を見ていく。

第2節 対人魅力

友人関係は、恋愛関係や家族関係などの関係性とともに関係性として位置づけられてきており、そのような親密な対人関係は、心理学において、対人魅力の分野の中で研究が行われてきた。対人魅力は、感情（様々な事物や想像上のイメージについて生じる快・不快の程度）、認知（他者について持つ様々な知識や情報）、行動（観察可能な他者に対する行動）の三つの成分によって構成されている（奥田, 1997）。対人魅力を高める要因として、環境要因（物理的な近さ）、単純接触（顔を合わせる回数が多い）、身体的特徴（顔立ちや容姿の魅力の程度が高い）、類似性（意見や価値観、態度が似ていること）、自己開示（自分の情報を相手に伝達すること）について検討が行われてきた（中村, 2006）。

対人魅力に及ぼす類似性の影響については、Byrne（1961）が類似性魅力仮説に関する一連の研究を行っている。Byrne（1961）は、人は、自分と態度が類似していない他者よりも態度が類似している他者のことを魅力的であると評価する傾向があることを実験的な検討で明らかにしている。そして、類似性は、相手とのコミュニケーションの中で生じるポジティブ感情の表出を促進することが明らかとなっており（Izard, 1960）、対人魅力における

類似性の効果は、能力や経済的な地位においても見られている (Byrne, Clire, & Worchel, 1966)。また, Popp, Laursen, Kerr, Stattin, & Burk (2008) は, 学生が自分のアルコール摂取のレベルと同程度の人物を友人として選択していることを明らかにしている。態度以外にも, パーソナリティの類似が, お互いの魅力に与える影響についても検討がなされてきた。Reader & English (1947) は, 支配性や優位性など様々な特性を用いて, 友人ペアと知り合いペアとの比較によってそれらの類似性が異なるかどうかを検討している。その結果, 知り合いペアと比較して友人ペアの方が, パーソナリティが類似していることが明らかとなっている。これは, パーソナリティが類似していることで, お互いが相手を好意的に評価して, その結果, 親密になるというプロセスを表していると考えられる。

一方, 谷口・大坊 (2002) では, 同性友人関係を対象として, 親和動機や人とのつき合い方などを用いて, その類似性と友人に対する魅力との関わりを検討している。その結果, パーソナリティの類似性が友人に対する魅力に影響を与えることはあまり見られなかった。むしろ, パーソナリティの類似性よりも, 友人に対して社会的望ましさを感じていることが友人に対する魅力に影響を持っていた。これは, パーソナリティに関しては, 似ていることよりも望ましいパーソナリティを持っていることの方がその人に対する魅力を高めることを意味している。ここで言う, 社会的に望ましいとされるパーソナリティとはどのようなものであろうか。Anderson (1968) は, 大学生を対象に 555 個の性格特性を表す形容詞について好ましさの評定を行わせた。その結果, 「正直な」「思いやりのある」「誠実な」といった言葉が, 上位に挙げられていた。つまり, 自分自身が誠実さや思いやりを持った人物であると周りの他者から認識されることが, 友人関係において重要になると考えられる。

第 3 節 対人関係の諸理論

対人関係を説明するための理論はこれまでに数多く提唱されてきており, その中には, 友人関係に適用することができる理論がいくつも存在する。本節においては, これまでの友人関係に関連する理論をいくつか取り上げ, その中でも本研究に関連する理論について述べる。

まず, 認知的斉合性理論が挙げられる。本理論は, 観察可能な変数のみに焦点を当て, 末梢過程を重視し, 客観的に社会的行動を研究してきた刺激 - 反応説, 新行動主義の観点に対して, 態度・観念・期待のような中枢過程に重きをおいて社会的行動を理解しようとする立場である。本理論においては, 互いに相容れない不整合な認知は不快な心理的状态

を喚起し、心理的に快適な斉合的状态の回復ないし達成を目指す心理的機制が作用するという一般的命題に基づき、その実証が試みられてきた（古畑・岡, 1994）。

次に、対人関係の形成から崩壊までの過程を説明する有力な理論として、社会的交換理論がある。この理論の中核となる考え方は、人は自分の行動から得られる報酬と、それによって失うコストを計算し、利益、すなわち報酬とコストの差を最大にするよう行動するということである（奥田, 1996）。

社会的交換理論に関連した理論やモデルとして、衡平理論や投資モデルが挙げられる。衡平理論には、以下の4つの特徴がある（Hatfield & Rapson, 2011）。

(1) 人は快楽を最大限に、苦痛を最小限にするように動機づけられている。

(2) 社会環境は公正かつ衡平にふるまうための関心を人々に抱かせる。集団や組織は一般的に衡平・公正に対してふるまった人に対して賞賛を送り、そうでない人に対して罰を与える。

(3) 自分自身の人生に満足し、他者からの愛情を十分に得ていると感じているとき、人は最も快適である。しかしながら仮に、人々がもらい過ぎていた場合、人は憐れさや罪、恥の感覚を感じ、少なすぎた場合、怒りや悲しみ、憤りを感じる。

(4) 衡平な関係でない人々はそれに伴って感じるストレスを減らそうと、様々な方法を試みる。たとえば、心理的、行動的バランスの調整をするか、その関係を解消する。

また、投資モデルは、人やものに対する心理的結びつきの状態を、基本となる3要因（満足度のレベル、投資量、代替選択肢の可能性）によって理解しようとするものである（Rusbult, Agnew, & Arriaga, 2011）。投資モデルによると、人はある二者関係から成果を得るときにその関係に満足し、関係に満足するときに関係を続けよう判断する。関係からの成果は個人の評価基準と照らし合わされて満足が生じるが、他にもっと良い関係があれば関係を続けようとする気持ちが弱まる（相澤, 2003）。

一方、Clark & Mills（2011）は、関係性を交換的關係と共同的關係に分け、その質的な区分によって、友人関係には衡平性が成立しないことを見いだしている。交換的關係とは、ベネフィット（ある関係における一人のメンバーが別のメンバーに与えることを選択する、有益もしくは価値がある何か）を受け取ることで、相応のベネフィットを返報する義務（負債）を負うこととなる関係であり、そのような関係の場合、人は、他者にベネフィットを与えることの見返りにどれくらい受け取れるのか、受け取ったベネフィットのためにどれくらいの負債を負うのかについて関心を持つ。このような関係は、ビジネス関係や、知り

合い、見知らぬ人との関係に当てはまる。一方、共同的关系とは、相手の安寧のために、無条件にベネフィットが与えられる、つまり、提供者あるいは受容者が、受容者は返す義務があると感じることなく、ベネフィットが与えられるような関係のことである。このような関係は、友人関係や恋愛関係、家族関係などのことを指している (Clark & Mills, 2011)。この質的な区分に加えて、共同关系的な強さ (時間や努力、お金に関して人が他者のためにどれくらい責任を持てるのかの度合い) という量的な次元を加えることで、親友 (best friend) やたまに顔を合わせる程度の友人 (casual friend) というように友人を区別している。

他にも、近年では、所属欲求理論 (人は他者との社会的関係を形成・維持しようと動機づけられており、それは感情・認知・行動に影響を与える (Baumeister, 2011)) や、自尊心を、人々が関係的に価値があり、社会的に他者から受け入れられていると知覚している程度に関する主観的な計測器であると捉え、対人関係を説明しているソシオメーター理論 (Leary, 2011)、アタッチメント (自分にとって重要な人間との間に形成される情緒的絆、認知的表象) に着目し、社会的関係やパーソナリティプロセス、人間の心理の精神力学的本質について検討している成人のアタッチメント理論 (Shaver & Mikulincer, 2012) など様々な理論が存在し、対人関係に関する知見が蓄積されている。

第4節 友人関係の機能

本節では、友人関係の持つ機能について論じていく。これまでに、友人関係がいかなる機能を有しているのかという点について様々な議論がなされてきた。友人関係は、青年期において特に重要な役割を担っていると考えられるが、児童期 (たとえば、永田, 1989) や老年期 (たとえば、丹野, 2010) においても、重要な役割を果たしている。

永田 (1989) は、友人関係や仲間集団に期待される機能として、(1) 自己の思い通りにならない世界の存在を知ること、(2) 自己と異なる立場の存在を知ること、(3) 自他の一致しうる解決を自分から模索する結果、これまでにない新しい視点を知ること、(4) 対立を経験した後のより深い他者との相互作用を知ること、という4点を挙げている。根本 (2006) は、子どもにおける友だちの意義として、(1) 承認欲求や所属欲求、安全欲求の充足、(2) 体験の拡大 (知識や関心の対象の拡大、行動レパートリーの拡大)、(3) 知的、情意、社会的能力、身体的技能の向上、(4) 自己価値感 (自己肯定感や自尊感情) の獲得、という4点を挙げている。また、斉藤 (1986) は、(1) 他者理解・共感の発達、(2) 社会的カテゴリーの理解、(3) 社会的規則の理解、(4) コミュニケーション能力の向上、(5)

自己統制能力の向上、という 5 つを示している。他にも、仲間との相互作用が、子どもの社会的コンピテンスに影響を与える (Cirino & Beck, 1991) というように、友人関係は児童期における子どもの成長の基盤となり、発達を促進すると言える。

老年期の友人関係に関して、60 歳以上においては、友人との適切な関係を形成することが、心豊かな老後生活を送る上で重要である (丹野, 2010) といった指摘や、高齢者において、友人関係は日常生活での交流 (趣味や会話を楽しむ) といった他の対人関係には見られない役割を果たしている (前田, 1992) という指摘がなされている。

それでは、青年期における友人関係にはどのような意義や機能があるのでしょうか。Coleman (1980) は、急激な身体的成長による、社会や自分自身への認識の高まりや、親からの心理的離乳に伴い生じる自分自身への不確実感、自己疑惑の補完のために、自分と似た境遇の者 (友人) を求める相互依存的関係が発生すると述べている。また、松井 (1990) は、青年期の友人関係が社会化に果たす機能として、「安定化機能 (緊張や不安、孤独などの否定的感情を緩和・解消してくれる存在としての友人)」、「社会的スキルの学習機能 (他者との適切な関係の取り方を学習させてくれる存在としての友人)」、「モデル機能 (自己の行動や自己認知のモデルとしての友人)」という 3 つを挙げている。他にも、青年期において、親密な友人関係を形成することは、青年の適切な発達を促すことが明らかにされている。たとえば、Walterman (1993) は、親密な友人関係は、青年期の発達課題である自我同一性獲得に重要であることを指摘しており、岩永 (1991) は、友人の存在は自己概念に大きな影響を与える (岩永, 1991) と述べている。また、親密な友人関係は、自立へのプロセスにおいて共感と精神的安定をもたらす糧である (遠矢, 1996)、親しい友人を持つことで孤独感を低減する (藤原・石田, 2010)、自尊感情に影響を与える (鈴木, 2002) というように精神的健康を促す機能を有していることが明らかにされている。

以上のように、友人関係は、様々な世代において、適切な発達や精神的健康を促進する機能を有していると言えるだろう。

第 5 節 友人関係とパーソナリティ、精神的健康との関連

前節では、友人関係の機能について述べた。本節では、これまでの友人関係に関する先行研究についてパーソナリティと精神的健康との関連を中心に見ていく。

まずは、友人関係とパーソナリティとの関連に関して述べる。これまでに様々なパーソナリティと友人との付き合い方との関連が検討されてきている (たとえば、長谷川, 2007 ;

岡田, 2012)。小塩 (1998) は、友人とのつき合い方と自己愛傾向、自尊感情との関連を検討し、友人との広く浅いつき合い方が自己愛傾向の中の注目・賞賛欲求と強い正の関連を見出している。八城 (2010) は、友人とのつき合い方とセルフ・モニタリング傾向との関連を検討し、セルフ・モニタリング傾向の高い人は、低い人に比べて相手の気持ちやグループの雰囲気を感じながら友人とのコミュニケーションを行っていることを明らかにしている。福森・小川 (2006) は、不快情動回避心性と友人とのつき合い方との関連を検討し、不快情動回避心性の高さが、友人を優先するようなつき合い方を促進すること、そして、不快情動回避心性の高さが自己の傷つき予測を高め、その結果、友人との間に壁を作るようなふれあい回避的なつき合い方を促進することを明らかにしている。また、Joiner, Alfano, & Metalsky (1992) は、抑うつや再確認行動とコミュニケーションとの関連を検討している。再確認行動とは、他者が本当に自分のことを大切に思っているかどうかを恋人や友人といった重要他者に対して繰り返し確認する行動のことである (長谷川・浦・前田, 2009)。Joiner et al. (1992) は、縦断的研究により、抑うつ、再確認行動、自尊心と相手に対する評価との関連を検討し、抑うつ傾向が高く、自尊心が低く、再確認行動を多くとる人は、相手から拒絶される程度が高いことを見出している。

このように、前節において見られたような青年の適切な発達や精神的健康を促進するような友人とは別に、日本における現代青年の特徴の一つとして考えられている表面的な友人関係 (岡田, 1999) とパーソナリティとの関連に着目した研究がいくつも蓄積されている。そのような友人関係においては、友人と積極的なコミュニケーションを取ることができずに、結果的に相手から拒否されるため、精神的健康が阻害されるものと考えられる。

また、友人関係と精神的健康との関連を検討している研究も多く行われている。吉武 (2010) は、日常生活におけるポジティブなイベントと生活満足度との関連を検討し、友だちとおしゃべりや学業課題の達成を多く経験することが生活満足度を高めることを明らかにしている。小林 (2012) は、親しい他者 (友人・親) との間での自己・他者評価が本人の社会的適応に与える影響について検討を行い、自己評価ではなく、他者からのポジティブな評価が本人の社会的適応を高めることを示している。他にも、友人との間で生じたネガティブなイベントをネガティブに捉える程度が強いほど抑うつとの関連が強い (田中, 2006)、友人と互いに気を使うことなく親密につき合いをすることが自尊感情を高める (小塩, 1998) といった知見も見出されている。

そして、友人関係をソーシャルサポート源として捉え、精神的健康との関連を検討して

いる研究も多い。ソーシャルサポートとは、周囲の人からの支持的・援助的な行動のことであり、友人からのサポートが多く得られている場合、サポートが少ない場合と比べて不健康な状態になりにくい（福岡・橋本, 1995）。そして、ソーシャルサポートの中でも知覚されたサポート（必要な時にサポートが得られるという利用可能性の知覚あるいは将来の予期）が精神的健康と関連していることがこれまでの研究で明らかになっている。福岡（2010）は、日常のストレス状況を体験した場合に周囲の人々との間で行われる支持的な相互作用に着目し、友人からのソーシャルサポート受容が適応の一指標としての気分状態に及ぼす影響を検討している。その結果、日常ストレス状況で、多くの大学生は親しい友人からのソーシャルサポートを受けており、その量はストレス度が高まるほど多くなる傾向にあること、ストレス状況体験時により多くのソーシャルサポートを受容することができれば、気分状態が改善されることを明らかにしている。また、福岡（2007）は、大学生を対象とした調査において、ソーシャルサポートと抑うつ、自己充實的達成動機、精神的健康との関連について検討した。分析の結果、友人のソーシャルサポート（知覚されたサポート）が自己充實的達成動機を促進し、それが大学や学業への意欲低下を抑制し、精神的な不健康をも抑制することを明らかにした。このように、表面的な友人関係ではなく、親密な友人関係を持ち、友人との積極的なコミュニケーションを取ることは、ソーシャルサポート源にもなり、本人の精神的健康を促進することが示されてきている。

第6節 現代青年の友人関係の特徴

前節では、友人関係に関連するパーソナリティや精神的健康との関連について見てきた。本節では、日本における現代青年の友人関係の特徴についてまとめていく。これまでに、現代青年が友人とどのようにつき合っているのかについて、いくつも研究が行われている。それらの研究は、友人とのつき合い方における個人差に着目している。例えば、友人関係に望むもの（小塩, 1999；和田, 1993）や、友人とのつき合い方（長沼・落合, 1998；岡田, 1999；岡田, 2005；落合・佐藤, 1996）といった研究により、2つの現代青年の友人とのつき合い方の特徴を明らかにしてきた（Table 2.1）。

1つ目は、友人関係は定義（第1節）からしても、その多くが親密で重要な関係であるとされており、個人の精神的健康を促進し（丹野, 2007）、情緒的な拠り所となる（柴橋, 2004）関係であり、友人と親密で深い関係を築くことが望ましいとするものである。この特徴は、友人関係研究の中でも主流の考え方であり、友人関係の決定要因を明らかにした研究

(Knapp & Harwood, 1977) や友人関係がどのように進展していくのかについて調査したものの(山中, 1994) というような友人関係の形成, 発展に関連する研究がいくつも行われてきている。また, 前節においても述べたように, 友人関係をソーシャル・サポートとして捉え, 友人関係の重要性を明らかにしている研究 (e.g., 中村・浦, 2000; 嶋, 1991) もこの立場に属すると考えられる。

2 つ目は, 20 年ほど前から言われてきたもので, 現代の青年は, 友人との積極的な関わりを拒否し, 当たり障りのない会話に終始し, 本音を見せない付き合い方を好むというものである。たとえば, 岡田 (1999,2011) は, 現代青年の友人関係の特徴を, 「関係回避 (友人とのコミュニケーションを出来るだけ回避して, 自分の中にこもってしまう)」「内面関係 (お互いの気持ちを正直にぶつけあって, 気持ちを共有することで親密さを表現していくような深い関わりを友人との間で求める)」「気遣い・群れ (お互いのプライベートな情報を共有し合うようなことをなるべく避けて, 互いに傷つけ合わないように非常に表面的に友人とのコミュニケーションをとる)」という三つのパターンによって整理をしている。また, 落合・佐藤 (1996) は, 自分が関わろうとする相手の範囲と人との関わり方に関する姿勢という 2 軸によって青年期における友達との付き合い方を捉えており, そこでは, 浅く広く関わるという付き合い方を見出している。

他にも, 友人関係を状況によって切り替えているという主張も見られる。たとえば, 松尾・大西・安藤・坂元 (2006) は, 現代の青年は, 今いる友人の中から状況や目的に応じて遊んだりつき合う相手を選ぶという選択的友人関係志向に注目し, 検討を行っている。また, 大谷 (2007) は, これまでの友人関係の深さ, 広さとは独立した, 状況に応じて自己やつき合う相手を切り替える傾向 (状況に応じた切替) に注目し, 友人関係を捉え直している。その結果, 「状況に応じた切替」という次元を加えることで友人関係から心理的ストレス反応への予測力が向上することを明らかにしている。

ここで, 社会学の知見 (第 1 章第 5 節) と合わせて現代青年の友人関係について考える。社会学の立場からは, 友人関係が希薄化しているという立場, 友人関係を捉える視点が広がったという立場, 選択的な友人関係を形成しているという立場など, 様々な視点から言及されていた。このうち, 友人関係の希薄化, 選択的な友人関係という点については, 心理学において見いだされてきた知見と一致する。また, 友人を捉える視点が広がったという立場に関しても, 友人が意味する対人関係の範囲が広い (宮本, 2007) という知見と一致しているものと考えられる。現代青年においても親密な友人関係に関する研究が蓄積され

ていることを考えると友人関係が希薄化しているという観点よりも、友人を捉える範囲が広がったという観点が妥当であると思われる。そして、友人を捉える範囲が広がったことは、友人とのつき合い方も広がることを意味すると考えられる。そこで、本論文においては、友人とのつき合い方には様々なものがあるという前提に立ち、現代青年の友人関係における特徴を包括的に明らかにすることを試みる (Figure 2.2)。

Table 2.1 友人関係における個人差を測定する尺度

著者	尺度名	カテゴリ
和田 (1993)	友人関係に望むもの	「協力」「情報」「類似」「自己向上」「感受性」「共行動」「真正さ」「自己開示」「尊敬」「相互依存」
落合・佐藤 (1996)	友達とのつきあい方に関する尺度	「防衛的」「積極的相互理解」「自己自信」「全方位的」「被愛願望」「同調」
長沼・落合 (1998)	友達とのつきあい方に関する尺度	「友達とのつきあいの深さ」「相手との心理的接近の仕方」
岡田 (1999)	友人関係尺度	「自己閉鎖」「自己防衛」「友人へのやさしさ」「群れ」
小塩 (1999)	友人への要求尺度	「理解・評価欲求」「関与欲求」「過剰関与回避欲求」
吉岡 (2001)	友人関係測定尺度	「自己開示・信頼」「深い関与・関心」「共通」「親密」「切磋琢磨」
岡田 (2005)	友人関係への動機づけ尺度	「外的」「取り入れ」「同一化」「内発」
松尾ら (2006)	友人関係志向性尺度	「選択的友人関係志向」「全面的友人関係志向」

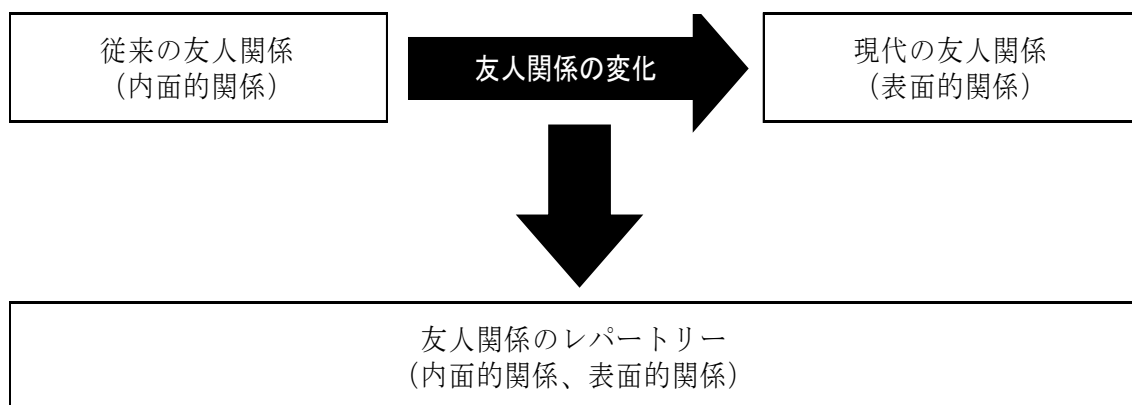


Figure 2.2 本研究における友人関係の捉え方

第7節 現代青年の友人関係に関する研究の問題点

これまで、友人関係に関する先行研究について見てきた。上述のように、友人関係の研究は非常に多く行われてきており、様々な知見が蓄積されてきている。本節においては、これまでの現代青年の友人関係に関する研究における問題点を整理する。

1点目は、第1節において述べたように、友人関係の定義に関して研究者間での統一がとれていない点である。また、海外においては、多様な友人の用語 (acquaintance, neighbor, close friend, best friend, confidant) が研究において使用されているが (Roberto & Kimboko, 1989)、日本においては、親友や友人という用語を用いて研究が行われ、親密であることを前提とした関係性として友人を捉えているものが多い。しかし、第6節で述べたように、社会学や心理学の知見において、友人の範囲が広がっていることが指摘されているにも関わらず、友人関係の定義にはその点が反映されていない。

2点目は、定義の問題とも関連するが、友人関係におけるネガティブな側面に関する研究が少ない点である。友人とは、個人の内的適応を促進し (丹野, 2007)、学習活動に影響を与え (岡田, 2008)、情緒的な拠り所となる (柴橋, 2004)、サポートティブな他者である (谷口・浦, 2005) と考えられているために、友人とのつき合いがもたらすプラスの側面に関する検討が多く行われてきた。

しかし、友人との間において生じる妬み (澤田・新井, 2002)、親しい友人からのいじめ (三島, 2003, 2008; 須藤, 2011) や、非行経験のある友人の存在が中学生の非行行為に影響を及ぼすこと (小保方・無藤, 2005)、友人との関係がアルコール使用を促進し、その結果、学習動機づけを低下させるという研究 (Manyu, Irene, Timothy, & Jeewon, 2013)、そして、第5節において述べた、友人との積極的な関わりを拒否する本音を見せないつき合い方 (岡田, 1999) を考えると、友人とのつき合いがもたらすマイナスの側面も十分想定できる。谷口・橋本・田中 (2006) は、親しい関係の間において、対人葛藤 (相手が自分に対して嫌な態度や行動を示す状況)、対人過失 (自分の方に非があり相手に迷惑や不快な思いをさせてしまう状況)、対人摩耗 (対人関係がうまくいくようにあえて自分の意に沿わない行動をしたり相手に対する期待外れを黙って受け入れるような状況) などの様々なストレスが存在し、中でも友人の間では対人摩耗が最も多いと述べている。この対人摩耗は、友人との積極的な関わりを拒否し、互いを傷つけないようにするつき合い方 (岡田, 2011) に対応していると考えられる。このように考えると、現代青年の友人関係の特徴を包括的に捉える上では、友人とのつき合いがもたらすプラスの側面だけではなく、マイナスの側面にも着目を

することが重要になると考えられる。

第 8 節 第 2 章のまとめ

本章では、これまでに行われてきた様々な友人関係に関連する研究を概観することで、現代青年の友人関係の特徴を捉えること、そして、これまでの研究の問題点について明らかにすることを試みた。その結果、(1) 本論文においては、多様な友人関係を捉えるために親密さの異なる友人関係を扱っていくこと、(2) 友人関係は、青年期における適切な発達や精神的健康を促進する機能を有していること、(3) 周りから誠実さや思いやりを持った人物であると認識されることが友人関係において重要であること、(4) これまでの友人関係に関する研究では、友人と親密で深い関係を築くことが重要であるとする考え方と、表面的なつき合い方や場面による切り替えを行っているをしているとする考え方が見出されてきており、それらのパーソナリティや精神的健康との関連が明らかにされていること、(5) 現代青年においては、友人の範囲が広がっている可能性があるにも関わらず、友人の定義にはその点が反映されていないこと、(6) 友人関係のプラスの側面を強調した研究に比べると、友人関係のマイナスの側面を強調した研究はあまり見られていないことが示された。第 3 章では、多様な友人のつき合い方を捉えるために有用であると考えられる友人関係における動機づけとその理論的背景である自己決定理論について述べる。

第3章 友人関係における動機づけと自己決定性理論

第1章、第2章においては、これまでの社会調査や社会学、心理学の領域において検討されてきた友人関係に関連する文献をもとに友人関係に関する知見の整理を行った。その結果、友人関係には親密で深い関係を築くつき合い方と深いかかわりを避けるような表面的なつき合い方があること、そして、この点は、友人関係の範囲が広がったことと関連があること、また、友人とのつき合いがもたらすプラスの側面だけではなく、マイナスの側面にも着目することが重要であることが示された。

これらを踏まえ、本論文では、友人関係における多様なつき合い方には、友人関係における様々な動機づけ（中でも、内発的動機づけ、外発的動機づけ）が関係しており、多様な動機づけという観点に着目することが現代青年の友人関係の特徴を包括的に捉えるために有益であるという立場をとる。そこで、本章では、内発的動機づけと外発的動機づけについて述べる。

前章において、現代青年の友人関係には、親密で深い関係を築くつき合い方と深いかかわりを避けるような表面的なつき合い方があり、この点は、現代青年における友人の範囲が広がりに関連があることが指摘されている。このような、友人とのつき合い方の違いは、友人関係を形成、維持する動機の違いによって説明が可能であろう。人は楽しいからという理由以外にも、一緒にいることで何かしらのサポートを得ることができるのではないかと打算的に考えても友人との関係を維持することがある。また、友人がいないことに対する不安からも友人を求める可能性がある。この点は、友人関係が外的な報酬や罰、他者からの働きかけによって維持されることがある（岡田, 2005）という研究や、青年は親や教師からの受容を得ることといった外発的な動機によっても友人関係を追求することがある（Ojanen, Sijtsema, Hawley., & Little, 2010）という指摘からも示唆される。岡田（2005）は、動機づけの観点から友人関係を捉え、友人関係における動機づけ尺度を作成している。この尺度は、動機づけ理論の1つである自己決定理論（Ryan & Deci, 2000）に基づき作成された尺度である。

自己決定理論とは、内発的動機づけに関する理論を発展させたものであり、自律性への欲求（自身の行動を自ら決定し、行動の起源でありたいという欲求）、有能さへの欲求（活動を通して自身の能力を高めたいという欲求）、関係性への欲求（他者との間に温かいつながりを持ちたいという欲求）という三つの欲求が仮定されている（櫻井, 2009）。自己決定

理論には、認知的評価理論、有機的統合理論、因果構成理論、基本的心理欲求理論、目標内容理論という五つのミニ理論が存在する（山口，2012）。岡田（2005）は、友人関係に対する自律的動機づけを、「自分自身の選択や意思によって、目的的に友人との関係を形成、維持しようとする動機づけ」として定義しており、これは、自己決定性理論の中でも、有機的統合理論において提唱された視点を参考にしながら、尺度を作成しているものと考えられる。

有機的統合理論は、外発的動機づけを自律性の程度によって、最も他律的なものから、最も自律的なものまで四つに分け、段階的に捉える理論である。これまでの考え方では、外発的動機づけと内発的動機づけは、相反する動機づけ状態として捉えられていたが、自己決定理論の下位理論の一つである有機的統合理論では、内在化（自己の外部にあった価値や規範を自身の中に取り込み、自己と統合していくことであり、自律性とほぼ同義）のプロセスを想定することにより、外発的動機づけと内発的動機づけを段階的に捉えることを可能としている。最も他律的なのが「外的調整」に基づく動機づけであり、何らかの外的報酬を得ることや外的な罰を避けることが目的となっており、外的な要因や他者からの働きかけによって行動が開始される。次にやや他律的なのが「取り入れによる調整」に基づく外発的動機づけであり、これは部分的に内在化がなされており、明らかな外的統制がなくても行動が開始される。しかし、行動の目的は恥や不安を低減し、自己価値を守ることと動機づけられている。次にやや自律的であるのが「同一化による調整」に基づく外発的動機づけであり、行動の価値を自己と同一化し、個人的な重要性を感じて肯定的な態度で自発的に行動が開始される。この段階から自律的動機づけとして捉えることが可能である。4つ目は、「統合による調整」に基づく外発的動機づけであり、内在化の最も高い段階である。ここでは、個人の価値観と一致している状態であり、違和感なく行動が開始される（櫻井，2009）。有機的統合理論に基づく研究としては、速水・田畑・吉田（1996）が、中学生、高校生を対象とし、新規教科の導入が学習動機づけに与える影響および成績との関連について検討している。また、岡田・中谷（2006）が、大学生を対象に学習動機づけと課題への興味との関連について検討している。このように、学習の領域において検討がなされてきている。

有機的統合理論を参考し、対人関係へ応用したものが、友人関係における動機づけ尺度であり、本尺度は、自己決定性の程度により外的な報酬や他者からの働きかけによって行動が開始される「外的」、不安や義務の感覚から、あるいは自己価値を維持したいために行

動する「取り入れ」、個人的に重要であるからといった理由で自発的に行動がなされる「同一化」、興味や楽しさなどのポジティブな感情によって動機づけられる「内発」の4つの下位尺度から構成されている (Figure 3.1)。本尺度の、外的、取り入れ、同一化は有機的統合理論の外的調整、取り入れによる調整、同一化による調整に対応しており、内発は、内発的動機づけである内発的調整に対応している。

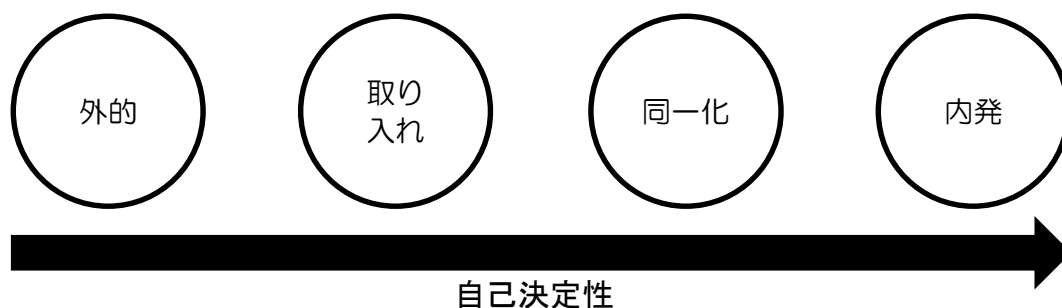


Figure 3.1 友人関係における動機づけ尺度の概念

ここで、友人関係における動機づけと現代青年における友人関係のつき合い方との関連について考える。自己決定理論の観点からすると、自律的に友人と積極的な相互作用を行うことが適応的な結果を導くと考えられる (岡田, 2005)。4つの下位尺度のうち、「内発」や「同一化」に関連する友人関係とは、従来から多く扱われてきた親密さなどに基づく友人関係であると考えられる。そして、「取り入れ」や「外的」に関連する友人関係は、深いかかわりを避けるような表面的な友人関係や、相手からの評価を気にするために、過度に気配りを行うような友人関係に対応していると考えられる (Figure 3.2)。友人関係における動機づけに関しては、自己決定性の高い動機づけである「内発」や「同一化」が、友人への向社会的行動を促進すること (岡田, 2005)、中学生において「内発」が笑い話などの自己開示を促進し、「同一化」や「外発」が深く傷ついた出来事などの内面的な自己開示を促進し、学校享受感に影響を与えること (岡田, 2006) や、動機づけの高さが学習時に友人へ援助を求めることや相互学習を促進すること (岡田, 2008)、自己決定性の高い動機づけは、友人関係の初期において相手への親和傾向を促進する可能性があること (岡田・中山, 2011) などが明らかにされてきている。

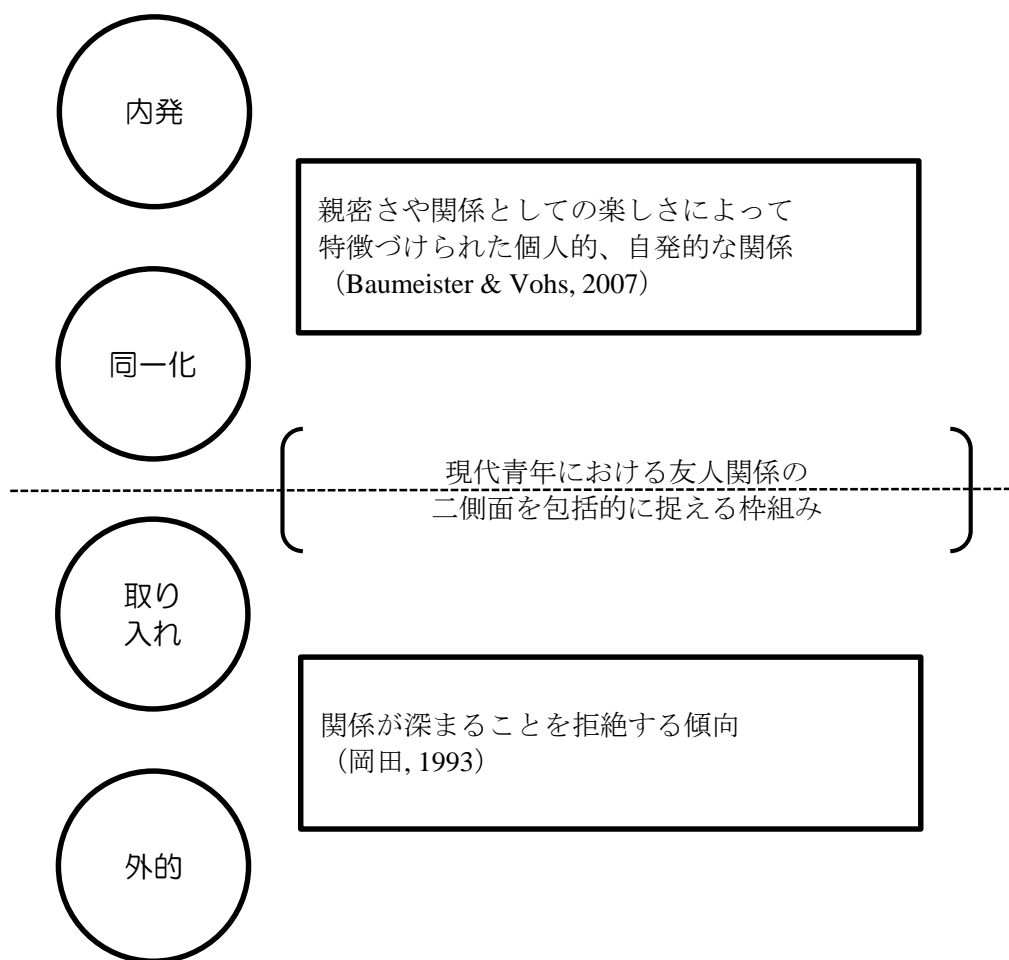


Figure 3.2 友人関係における動機づけと友人関係の特徴との関連

このように、友人関係における動機づけに関しては、自己開示や学校享受感、学習時における援助要請、相互学習との関連が検討されてきた。そして、自己決定理論で予測されている通り、自己決定性の高い動機づけが友人との積極的なコミュニケーションを促し、その結果、友人関係における適応に影響を与えることが明らかにされてきた。これらは、主に友人関係において自己決定性の高い動機づけに着目して検討を行ってきたと言えるだろう。しかし、友人との表面的なつき合い方や過度の気配りが必要なつき合い方という点を考えると、自己決定性の低い動機づけ（外発的動機づけ）である「取り入れ」や「外的」にも着目する必要があるだろう。動機づけの違いが友人とのコミュニケーションにおいてどのような影響を与えているのかについて明らかにすることは、現代青年における友人関係の特徴を包括的に捉える上で重要であると考えられる。

そこで、本論文においては、内発的動機づけだけでなく外発的動機づけについても焦

点を当てる。その上で、動機づけと友人つき合いの多さ、友人関係満足感、自尊感情、学校適応感、友人とのコミュニケーション（対面および携帯電話を介したコミュニケーション、対人葛藤場面における対人葛藤方略）との関連について検討する。第 4 章では、本論文の目的と本研究において扱う変数について述べる。

第4章 本論文の構成

第1節 本論文の目的

第1章～第3章において、これまでの社会調査や友人関係研究、友人関係における動機づけについて概観してきた。これまでの友人関係研究では、現代青年の友人関係の二つの側面（親密で深いかかわりを求める友人関係、表面的で浅いかかわりを求める友人関係）について、友人関係の変化として捉え、別個に検討を行ってきた。しかし、社会学や心理学の知見をまとめると、現代青年は友人に対するとらえ方が広がっている可能性が示された。この点を考慮に入れると、友人関係の変化として捉えるということは、現代青年の友人関係を適切に捉える上では必ずしも有益ではなかったと考えられる。本論文では、この問題を解決する視点として友人関係に対する動機づけに着目した。友人関係における多様な動機づけという視点でこれまでの研究を捉えなおすと、従来の友人関係研究は、内発的な動機づけに焦点を当てて研究が行われてきたことがわかる。しかし、現代青年の友人関係を包括的に明らかにしていくためには、外発的な動機づけにも焦点を当てることが重要であろう。

また、本研究においては、親密さの異なる友人関係を扱うこととする。これまでの友人関係に関する研究では、親密さの程度の高い友人関係を対象に検討が行われてきた（e.g., Caldwell & Peplau, 1982; Knapp & Harwood, 1977）。その中で、親密さの程度の低い友人関係は、親密さの程度の高い友人との比較対象として扱われてきており（e.g., 宮崎・池上, 2011; Reader & English, 1947）、そこでの結果にはほとんど着目されてこなかったと言える。しかし、表面的な友人関係という現代青年の特徴や、友人の数の平均は150人程度である（Hill & Dunbar, 2003）といった知見、そして友人に対するとらえ方の広がりを見ると、現代青年において、本人が友人であると認識している相手すべてと親密な関係を築いているとは想定しづらい。むしろそこまで親しくない相手とコミュニケーションをとることも十分に考えられる。だが、友人関係の研究において、そのような相手とどのようなコミュニケーションをとっているのかについての心理学的な検討は、友人との親密度により自己開示量が異なることを明らかにした研究（武田・前田・徳岡・石田, 2012）などがある程度で、あまり行われていない。

以上の2点を踏まえ、本論文では、友人関係における動機づけという視点を用いることで、これまでにほとんど扱われてこなかった、友人関係における外発的な動機づけ、そし

て、親密さの程度の異なる友人についても検討を行う。この点が本論文の特色であると言えるだろう。そして、いくつかの実証的研究により、3つの問いについて明らかにしていくこととする。その問いとは、「動機づけの違いによって友人つき合いの多さ（友人の数）、友人関係満足感に影響が見られるのか」「動機づけの違いによって精神的健康に影響が見られるのか」「動機づけの違いによって友人とのコミュニケーションに影響が見られるのか」である。この3つの側面から、現代青年における友人関係の特徴を包括的に捉えることを目標とする（Figure 4.1）。

なお、上記の3つの問いについて検討する前に、現代青年が友人に対してどのようなイメージを持っているのか、友人つき合いが多い人に対してどのようなイメージを持っているのかについて確認する。社会学や心理学の知見において、現代青年の友人の捉え方が広がっている可能性が指摘されている。しかし、これまでの友人関係における研究において、友人の定義にその指摘は反映されていない。そこで、本論文においては、まず、現代青年の友人の捉え方、友人とつき合う動機、そして、友人つき合いの多さに対するイメージについて確認する。その上で、友人関係における動機づけと他の変数との関連について検討することで、現代青年における友人関係の特徴を明らかにしていく。

第2部 現代青年における友人関係の特徴に関する実証的検討

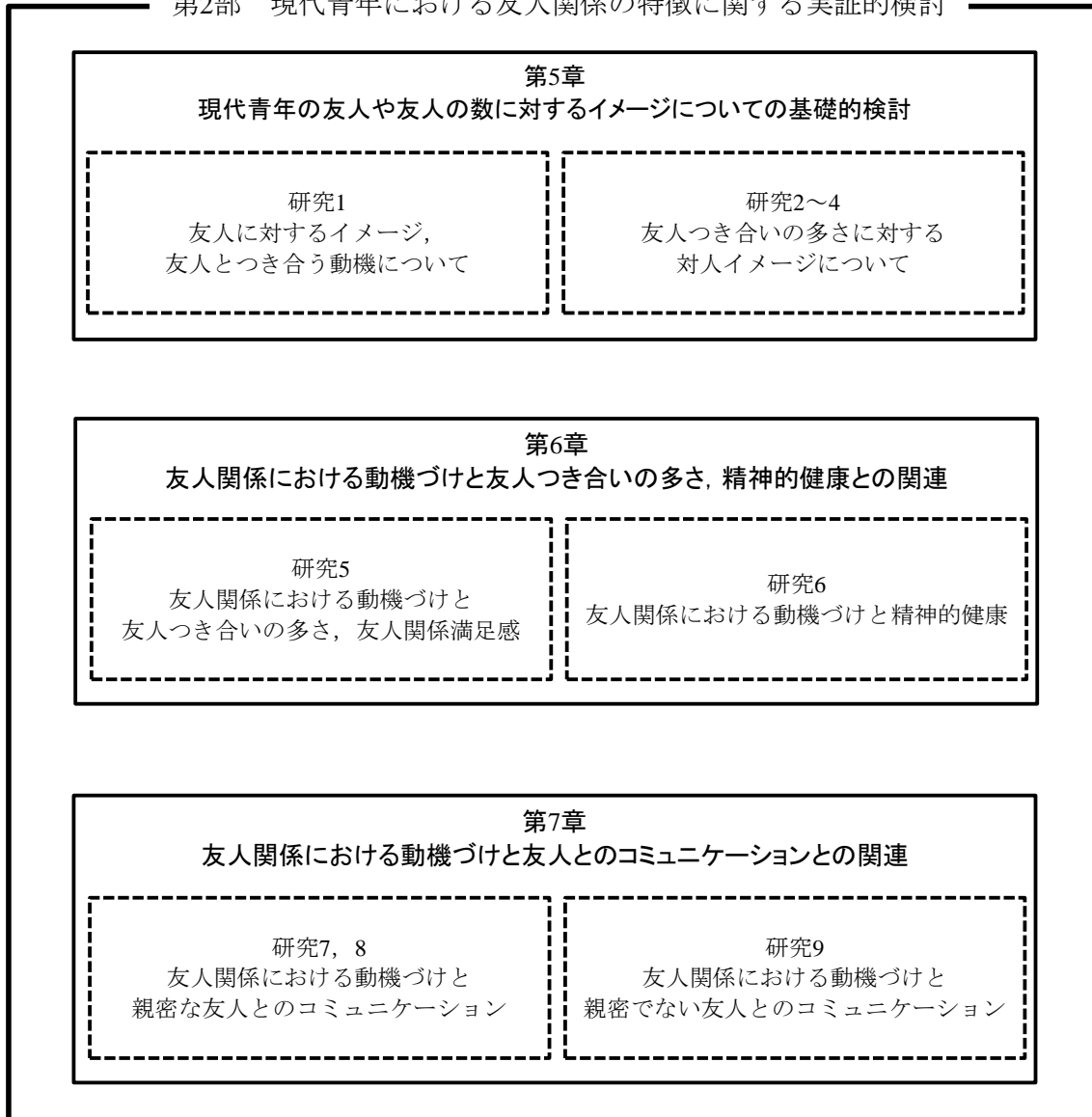


Figure 4.1 実証的検討部分の構成

第2節 友人関係における動機づけと友人つき合いの多さ, 精神的健康

本節では, 友人つき合いの多さや友人関係満足感, 精神的健康に関する先行研究について見ていく。まず, 友人つき合いの多さに影響を与える要因についてであるが, 石田 (2003) は, 友人関係の形成過程におけるシャイネスの影響について縦断的な検討を行っている。その結果, 性別によってシャイネスの影響が異なることが明らかとなった。男性においてのみシャイネスの低い人よりも高い人の方が友人ネットワークが小さく, 一方, 女性においてはシャイネスの高低による友人ネットワークの違いは認められなかった。また, Selfhout,

Burk, Branje, Denissen, Aken, & Meeus (2010) は、友人ネットワークと Big Five との関連を検討し、外向性が友人選択の数を促進することを明らかにしている。他にも、鈴木・藤生・田上 (1999) が、親しい友人数と自己効力感、気遣いスキル、かかわりスキルとの関連を検討し、友人獲得に対する自己効力感と親しい友人数との間に正の相関が見られることを明らかにしている。

次に、友人付き合いの多さが与える影響について見ていく (e.g., Giles, Glonek, Luszcz, & Andrews, 2005)。たとえば、内田・遠藤・柴内 (2012) は、人間関係スタイルと幸福感を検討する中で、付き合いの数と人生満足感についてたずねている。その結果、携帯電話に登録している連絡件数と人生満足感の間には正の相関が見られることが明らかとなっている。他にも、宮本 (2012) は、友人ネットワークサイズ (友人数, 親友数, 携帯電話友人数など) と社会的自尊心との関連を検討し、友人数や携帯電話友人数が社会的自尊心との間に正の相関が見られることを明らかにしている。また、近年のソーシャルネットワーキングサービス (Social Networking Service: SNS) の台頭により、オンライン上での友人の数に焦点を当てた検討がなされるようになってきた。たとえば、Dunbar (2011) は、SNS における友人の数が、平均して 150 人程度であることを示している。一方、Buote, Wood, & Pratt (2009) の研究では、オフラインとオンラインの友人の違いについて検討を行い、オンラインの友人よりもオフラインの友人が多いこと、そして、アタッチメントスタイルによって友人の数が異なることが報告されていた。他にも、Facebook²上の友人の数が多いたことが、当人の主観的ウェルビーイングを促進させること (Kim & Lee, 2011)、Facebook の友人数の多さが社会的適応を促進していたこと (Kalpidou, Dan., & Jessica, 2011) などが明らかにされてきている。これらを考えると、友人の数は多い方が当人にとって望ましく、そして、SNS などを用いることで、これまでよりも友人の数を増やすことができる可能性は高いと言える。

そして、友人関係満足感についてであるが、友人関係満足感に影響を与える要因についての研究はこれまでに数多く行われてきた (e.g., Buote, et al., 2009; Deci, La Guardia, Moller, Scheiner., & Ryan, 2006; Veniegas & Peplau, 1997)。Veniegas & Peplau (1997) は、同性友人関係における力関係と満足感について検討を行い、力関係が不均衡な友人よりも均衡している友人との満足感が高いことを明らかにしている。また、Buote et al. (2009) は、アタッチメントスタイルと友人関係満足感との関連を検討し、安定型、拒絶型、恐れ型アタッチメ

² Facebook とは、2004 年にマーク・ザッカーバーグによって開発された世界最大のソーシャル・ネットワーキングサービスのことである。

ントの人はオンラインよりもオフラインの友人関係満足感が高いことを明らかにしている。渡部・松井（2011）は、主張性の4要件（素直な表現、情動制御、他者配慮、主体性）と友人関係における適応との関連について検討し、高校生時においては情動をコントロールできていたことや自分の行動を主体的に決定できていたことが友人関係満足感を高めること、そして、大学生時においては、率直に自分の考えを表現できないことや情動をコントロールできないことが友人関係満足感を低めることを見出している。他にも、シャイネスの高さが友人関係満足感を抑制すること（Baker & Oswald, 2010）、親和欲求が友人関係満足感を促進し、きらわれ不安は友人関係満足感を抑制すること（笠原・島谷, 2012）、ポジティブ関係コーピングと解決先送りコーピングが友人関係満足感を促進し、ネガティブ関係コーピングが友人関係満足感を抑制すること（加藤, 2001）、対人ストレス時に相手とうまく付き合うことを諦めることや自責するといった消極的なコーピングを行うほど友人関係満足感が低下すること（高橋・斎藤, 2013）などが明らかにされてきた。

最後に、精神的健康に関する研究についてまとめる。精神的健康に関する研究もこれまでに数多く行われてきている（たとえば、中尾, 2012; 庄司, 2011）。野村・橋本（2006）は、青年期における回想と自我同一性および心理的適応の関連を検討し、頻繁な回想が精神的健康を低めることを明らかにした。また、山田（2006）は、大学新生に焦点をあて、大学生活への適応感と修学状況の動向について検討し、不本意入学や入学後早期に現れる不本意感を背景とする大学への違和感が意欲減退傾向と関連していることを明らかにしている。一方、友人関係は学校適応を規定する主要な要因であるため（佐藤, 2010）、友人関係の良好さと学校適応との関連を検討している研究もいくつか見られる（e.g., Berndt, 2002; 石本, 2010）。

このように、友人関係におけるつき合いの多さ、友人関係満足感、精神的健康に関しては、いくつも検討がなされてきているが、友人関係における動機づけとの関連を検討したものは見られない。そこで、研究5では、友人関係における動機づけと友人つき合いの多さ、友人関係満足感との関連について、そして、研究6では、友人関係における動機づけと精神的健康との関連について検討する。

第3節 友人関係における動機づけとコミュニケーション

本節では、友人関係における親密さを促進するようなコミュニケーション（対面、携帯電話でのコミュニケーション）と友人関係における親密さを悪化させる可能性があるコミ

コミュニケーション（友人との葛藤場面）に関する先行研究について見ていく。

友人との1対1のコミュニケーションに関して、従来は対面でのコミュニケーションを中心に検討がなされてきた（e.g., 加藤, 2003; 下田, 2009）。たとえば、丹野・下斗米・松井（2005）は、友人とのコミュニケーションとして自己開示に着目し、友人関係の親密化過程における自己開示の機能を検討している。その結果、親密化に伴い自己開示量が増加することを見出している。ほかにも、自己開示が対人魅力に及ぼす影響（高木, 1992）、関係継続の予期と関係継続の意思が対人コミュニケーション（発話量や笑顔、視線）に及ぼす影響（木村・磯・大坊, 2012）、主張性、対人不安と友人への配慮行動との関連（渡部, 2010）など、多くの研究が蓄積されてきた。

しかし、第1章においても述べたように、現代青年は、対面だけではなく携帯電話を用いて友人とのコミュニケーションを頻繁に行っていると考えられる。平成22年通信利用動向調査によると、10代後半の携帯電話利用率は81.6%にも及び（総務省, 2011）、携帯電話を所有している20代の9割以上が携帯メールを使用している（Miyata et al., 2003）。また、携帯メールと対面のどちらも用いてコミュニケーションを行っている人は対面のみを用いてコミュニケーションを行っている人よりも友人との親密さを高く評価している（Igarashi, Takai, & Yohida, 2005）。これらのことを考えると、日本の青年にとっては友人との携帯電話を介したコミュニケーションは日常生活に浸透しており、対面でのコミュニケーションと同様に、友人関係にとって重要であると言える。

それでは、対面でのコミュニケーションと携帯電話を介したコミュニケーションにはどのような違いが見られるのであろうか。両者の特徴の違いに関してはこれまでにいくつか検討されているが（e.g., 黒角・深田, 2005）、それらをまとめると、同期性（送り手と受け手が同時にコミュニケーションを行う程度）は、携帯メールよりも対面、携帯電話が高く、匿名性は、対面では無いが、携帯電話、携帯メールにおいてはある。そして、空間的制約は、対面ではあるが、携帯電話、携帯メールにおいては無い、と言えるだろう。また、携帯電話は即時性や利便性に優れているため、コンサマトリーな利用が行われている（林・宮田・林, 2004）。以上のように、匿名性や空間的制約の点から見ると、対面よりも携帯電話を介したコミュニケーションの方が比較的気軽に行うことができると考えられる。

携帯電話を介したコミュニケーションと友人関係に関しては、性別や性役割が携帯電話、携帯メールコミュニケーションに影響を及ぼすこと（黒角・深田, 2005）、大学新生において、大学入学後の友人に対するメール送信数の増加が孤独感を低減すること（五十嵐・

吉田, 2003), 友人に対しての信頼が高いほど, 携帯メディアコミュニケーションに好意的であること (岡本・江川, 2003), 友人と親密になるにつれて, 対面と携帯メールでの自己開示内容の量が増加し開示内容の質が高まること (古谷・坂田・高口, 2005) といった研究がこれまでに行われてきた。

次に, 対人葛藤に関する研究についてまとめる。大学生は, 友人と, 日々様々なコミュニケーションを行っていると考えられるが, 普段は相手とのコミュニケーションにおいて, 相手を評価したり, 相手から評価されることを意識することはないだろう。しかし, 友人との意見が対立するような場面 (対人葛藤場面) では, お互いが二人の関係を再評価し (本田, 2008), そこでの行動がその後の二人の関係に影響を与えることは十分に考えられる。

対人葛藤とは, 他者との顕在的・潜在的対立を含む社会的状況であり, 当事者の葛藤対処方略によって葛藤の結果が左右される (大淵・福島, 1997)。これまでの対人葛藤研究において, 葛藤対処方略に関する研究が数多く行われてきた (e.g., 長峰, 1999; Rahim & Bonama, 1979; Rubin, Pruitt, & Kim, 1994)。Rubin et al. (1994) は, 自己の利害への関心と他者の利害への関心の 2 次元により解決方略を 4 つに分類する二重関心モデルを提案している。このモデルでは, 自己と他者への利害への関心への動機づけの高さによって選択される方略が異なることを想定している。加藤 (2003) は, Rahim & Bonama (1979) の対人葛藤方略の 2 次元 5 スタイルを参考に, 対人葛藤方略スタイルを測定する尺度を作成し, 対人葛藤方略スタイルと友人関係満足感, 心理的ストレス反応, 孤独感との関連を検討している。この尺度は, 自己志向的次元と他者志向的次元の 2 次元から構成されており, どちらの志向も高い「統合スタイル」, 自己志向が高く, 他者志向が低い「強制スタイル」, 自己志向が低く, 他者志向が高い「自己譲歩スタイル」, どちらの志向も低い「回避スタイル」, どちらも中程度である「相互妥協スタイル」の 5 スタイルによって葛藤方略を捉えている。分析の結果, 統合スタイルを多く使用する人は友人関係満足感が高く, 強制スタイルを多く使用する人は友人関係満足感が低いことを明らかにしている。

また, 大淵・福島 (1997) は, 葛藤解決における社会的動機に着目をし, 関係目標, パワー・敵意目標, 公正目標, 同一性目標, 個人的資源目標, 経済的資源目標という 6 つの目標と対処方略との関連を検討している。そして, 関係目標が協調方略と第三者方略に正の影響を与えること, パワー・敵意目標が対決方略に正の影響を与えること, 同一性目標が協調方略に負の影響, 回避方略に正の影響を与えることを明らかにしている。加藤 (2003) における統合スタイルと協調方略, 強制スタイルと対決方略, 回避スタイルと回避方略は

それぞれ内容が対応していると考えられる。他にも、藤森（1989）は、対人葛藤時の解決戦略が相手への好意度に影響を及ぼしていることを明らかにしている。

このように、対人葛藤の研究において、当人の動機に着目した研究が行われてきており、葛藤時にどのような動機に基づくのかによって対処方略が異なることが明らかにされている。

このように、友人関係における対面および携帯でのコミュニケーション、対人葛藤方略に関しては、いくつも検討がなされてきているが、友人関係における動機づけとの関連を検討したものは見られない。そこで、研究 7 では、友人関係における動機づけと親密な友人との対面および携帯でのコミュニケーションとの関連について、研究 8 では、友人関係における動機づけと親密な友人との対人葛藤方略との関連について、研究 9 では、友人関係における動機づけと親密ではない友人との対面および携帯でのコミュニケーション、対人葛藤方略との関連について検討する。

第2部 現代青年における友人関係の特徴に関する実証的検討

第5章 現代青年の友人や友人の数に対するイメージについての基礎的検討

本章では、現代青年が友人に対してどのようなイメージを持っているのか、また、どのような動機で友人とつき合っているのか、そして、それらを踏まえ、友人の数が多く、少ない人に対してどのようなイメージを持つのかについて検討することとする。友人関係に関する心理学的な研究においては、親密さや互惠性、関係としての楽しさに基づいて友人関係が定義されてきた。一方で、友人との関係が深まることを拒絶する傾向や社会学の知見などに示されている必ずしも望ましいとは限らない友人関係の特徴については、定義に含まれてきていない。

そこで、現代青年が友人に対してどのようなイメージを持っているのか（どのような他者を友人として認識しているのか）や友人とつき合う動機について明らかにすることで、本研究が、対象とする友人の範囲が明確になるものと考えられる。また、現代青年の特徴の一つとして、周りの空気を読みながら、仲間外れにならないように生活をしていることが指摘されているが、そのような特徴を持つ現代青年にとって、友人を多く持つことにはどのような意味があるのかについて検討する。具体的には、研究1において友人に対するイメージと友人とつき合う動機について検討し、研究2～4において友人の数に対するイメージについて検討する。

第1節 友人に対するイメージ、友人とつき合う動機に関する調査（研究1）

1. 目的

本研究では、現代青年が友人をどのように捉えているのか、また、どのような動機により友人とつき合っているのかについて明らかにする。これまでの研究においては、「家族以外の自発的で親密な他者 (Heyl & Schmitt, 2007)」、「互いが助け、共有し合う関係 (Berndt, 2002)」、「助け、快適さ、感情的共有、ちょうど良い楽しきの源 (Caldwell & Peplau, 1982)」、「平等、相互関与、相互好意、自己開示、様々な種類のサポートの供給に特徴づけられた自発的、個人的な関係 (Fehr, 2008)」といったように、親密さや互惠性により友人関係が定義されてきた。一方、日本においては、友人が意味する対人関係の範囲が広い (宮本, 2007) ことが指摘されており、必ずしも従来の研究において想定してきた定義が当てはまるとは限らない。また、友人とつき合う動機に関しても、先行研究によると、内発的なものだけ

ではなく、外発的な動機に基づく友人関係も存在することが考えられるが、その点に着目をした研究はあまり見られていない。

そこで、本研究では、現代青年が友人関係をどのように捉え、どのような動機により友人関係を形成・維持しているのかについて基礎的なデータを収集する。

2. 方法

2-1. 調査対象者

関西圏の大学生 75 名を対象に調査を行った。なお、本研究においては、年齢、性別をたずねていない。

2-2. 調査時期

2011 年 7 月に実施した。

2-3. 調査内容

1)友人に対するイメージ：友人とはどのような存在であるのかについて、思いつく限り自由記述にて回答を求めた。

2)友人とつき合う動機：なぜ友人とつき合っているのかについて、思いつく限り自由記述にて回答を求めた。

2-4. 実施方法

上記の質問紙を講義中に集団で施行し、その場で回答を求め、回収を行った。なお、倫理的な配慮として、個人の特定は行わない旨を伝え、無記名とした。また、強制ではなく、協力するか否かは自由であること、また、回答しないことによる不利益はないこと等を伝えた。同意を得た者のみを対象として実施した。

3. 結果

3-1. 友人に対するイメージ：今回得られたイメージは全部で 124 であった。KJ 法に準拠して分類を行った。分類の結果、友人に対するイメージとしては、大きく分けて 9 つのカテゴリーに分類された (Table 5.1)。

具体的には、相談・相互援助（「自分が話したいことを聞いてくれる存在」「悩み事や、困ったことがあったときに、助けてもらったり助けたりしてお互いに支え合っている」など）、刺激・成長（「自分とは違った価値観を持ち、お互いを刺激し合える存在」「自分を成長させてくれる存在」など）、楽しさ（「楽しい時に笑えたりできる存在」「寂しさを楽しさに変えてくれる存在」など）、安心（「ありのままの自分でいられる存在」「自分自身の事を理解し、受け入れてくれる存在」など）、かけがえのなさ（「無くしたくない大切な存在」「親族以外で親しい人であり、生きていく上でなくてはならないもの」など）、打算的（「孤独感を感じたとき一緒にいてくれるとまぎれる存在」「寂しさを埋める」など）、アンビバレント（「精神的な支えにもなれば、大きな悩みの種にもなりうる」「自分にとってプラスにもマイナスにもなる存在」など）、ネガティブ（「人によってはうわべ上の付き合い」「どんなに嫌いな人でも、集団で生活しなければならない環境ばかりだから」など）、その他（「運命のいたずら」「気の合う人のこと」など）であった。

Table 5.1 友人に対するイメージ

カテゴリー	度数	記述例
相談・相互援助	35	自分が話したいことを聞いてくれる存在 悩み事や、困ったことがあったときに、助けてもらったり助けたりしてお互いに支え合っている
刺激・成長	18	自分とは違った価値観を持ち、お互いを刺激し合える存在 自分を成長させてくれる存在
楽しさ	16	楽しい時に笑えたりできる存在 寂しさを楽しさに変えてくれる存在
安心	16	ありのままの自分でいられる存在 自分自身の事を理解し、受け入れてくれる存在
かけがえのなさ	15	無くしたくない大切な存在 親族以外で親しい人であり、生きていく上でなくてはならないもの
打算的	6	孤独感を感じたとき一緒にいてくれるとまぎれる存在 寂しさを埋める
アンビバレント	5	精神的な支えにもなれば、大きな悩みの種にもなりうる 自分にとってプラスにもマイナスにもなる存在
ネガティブ	4	人によってはうわべ上の付き合い どんなに嫌いな人でも、集団で生活しなければならない環境ばかりだから
その他	9	運命のいたずら 気の合う人のこと

3-2. 友人とつき合う動機：今回得られた動機は全部で 104 であった。KJ 法に準拠して分類を行った。なお、岡田（2005）の友人関係における動機づけ尺度のカテゴリーを参考に分類した。分類の結果、友人とつき合う動機としては、大きく分けて 4 つのカテゴリーに分類された（Table 5.2）。

具体的には、内発（「一緒にいて楽しいから」「友人とつき合っていると笑えるから」な

ど), 同一化(「自分が成長するために友人が必要だから」「自分の考えを広げてくれるから」など), 取り入れ(「一人であることが嫌いだから」「一人であると周囲の人間にかawaiiそうな人だと思われるから」など), 外的(「小学校の頃から友人と仲良くしるとたたき込まれてきたから」「仕方なく」など)であった。

Table 5.2 友人とつき合う動機

カテゴリー	度数	記述例
内発	45	一緒にいて楽しいから 友人とつき合っていると笑えるから
同一化	28	自分が成長するために友人が必要だから 自分の考えを広げてくれるから
取り入れ	27	一人であることが嫌いだから 一人であると周囲の人間にかawaiiそうな人だと思われるから
外的	4	小学校の頃から友人と仲良くしるとたたき込まれてきたから 仕方がないから

4. 考察

分析の結果, どのような相手を友人として認識しているのかについては, 従来の定義で強調されてきた相互援助や楽しさというものだけでなく, 打算的であったり, ネガティブな側面を持つものであることが明らかとなった。この結果は, 日本の場合には「友人」が意味する対人関係の範囲が広い(宮本, 2007)という指摘や, 相手を気遣い, 関係を回避するような友人関係(岡田, 1999)という知見からも十分理解できる。

次に, 友人とつき合う動機に関して, 岡田(2005)において見出されているカテゴリーに対応させて分類を行った。その結果, 外的はあまり多くは見いだされなかったが, おおむね4つのカテゴリーに対応した記述が見られた。友人とつき合う動機は必ずしも楽しいからという内発的なものだけではなく, 外発的なものも存在することが本研究からも見いだされた。

以上のように, 現代青年は友人に対して多様なイメージを持っており, つき合う動機に関しても様々なものが見られることが明らかとなった。本結果を踏まえると, 従来の研究において扱われてきた友人関係の定義(親密さや楽しさ, 相互援助)では, 現代青年の友人関係の特徴を一部しか把握できない可能性が高い。そこで, 本論文においては, 現代青年の友人を「楽しさ, かけがえのなさ, 煩わしさ, 都合の良さなど様々な要素で特徴づけ

られた同性、同世代の他者」]として捉え、検討を行うこととする。

第2節 友人数の多さに対する対人イメージに関する調査（研究2）

1. 目的

研究1において、現代青年がどのような他者を友人として認識しているのか、どのような動機に基づいて友人とつき合っているのかについて検証し、従来の定義には含まれていない他者に対しても友人として認識している可能性があること、多様な動機によって友人とコミュニケーションを取っていることが明らかとなった。研究1の結果を踏まえ、本研究においては、友人の数が多し人、少し人に対するイメージを自由記述にて回答を求めらる。

日本においては、親密で深いつき合い方によって特徴づけられる友人関係と、積極的な関わりを拒否し、周りから嫌われることを恐れ、互いを傷つけないようにするつき合い方によって特徴づけられる友人関係が見出されているが、そのような相手とのつながりを多く持つことにはどのような意味が考えられるのであろうか。これまでの友人関係の機能に関する研究によると、孤独感の低減（藤原・石田, 2010）、社会化の促進（安定化機能、社会的スキルの学習機能、モデル機能）（松井, 1990）などが明らかにされている。また、友人のソーシャルサポート（知覚されたサポート）が自己充實的達成動機を促進し、それが大学や学業への意欲低下を抑制し、精神的な健康を抑制すること（福岡, 2007）が明らかにされている。友人とのつながりを多く持つことは、孤独感の低減や、精神的な健康の抑制などの側面にプラスに働くと考えられる。

次に、対人印象や印象形成という観点から友人とのつながりの多さについて考える。人は、他者に対して、たとえ実際に会わなくとも、その人の写真を見たり風評を耳にするだけでパーソナリティの認知を行うことがある（古畑・岡, 1994）。どのようなパーソナリティを有しているのかは、当人の印象に影響を与えるため、できるだけ望ましいパーソナリティを有していると他者から認知されることが周りから嫌われることを恐れる現代青年にとっては特に、重要であろう。それでは、友人とのつながりが多いか少ないかという情報は当人の印象にどのような影響を与えるのであろうか。本研究ではこの点について明らかにすることを目的とする。

2. 方法

2-1. 調査対象者

都内の専門学校生 46 名（男性 7 名，女性 36 名，不明 3 名）を対象に調査を行った。調査対象者の平均年齢は，18.8 歳（ $SD = 1.28$ ）であった。

2-2. 調査時期

2009 年 9 月に実施した。

2-3. 調査内容

1)友人のイメージ：(1) あなたは，「友人の多い人」と聞いた時に，どのような人物をイメージしますか，または，(2) あなたは，「友人の少ない人」と聞いた時に，どのような人物をイメージしますか，のどちらか一つについて思いつく限り自由記述にて回答を求めた。

2) フェイスシート：年齢と性別についてたずねた。

2-4. 実施方法

上記の質問紙を講義中に集団で施行し，その場で回答を求め，回収を行った。なお，倫理的な配慮として，個人の特定は行わない旨を伝え，無記名とした。また，強制ではなく，協力するか否かは自由であること，また，回答しないことによる不利益はないこと等を伝えた。同意を得た者のみを対象として実施した。

3. 結果

今回得られたイメージは全部で 221 であった。「友人の多い人」のイメージは 107 であり，「友人の少ない人」のイメージは 114 であった。それぞれのイメージについて KJ 法に準拠して分類を行った。その際に，ポジティブなイメージとネガティブなイメージという内容に分けた上で，それぞれ分類した。分類の結果，「友人の多い人」に対するイメージ（ポジティブ）に関しては，「明るい」「信頼できる」「優しい，思いやりがある」「面白い，楽しい」「人つきあいが良い」「話しやすい」「気がきく」の順に挙げられていた。「友人の多い人」に対するイメージ（ネガティブ）に関しては，「とても親しい人が少なそう」「誰と仲が良いのかわからない」「目立ちたがり屋」の順に挙げられていた。「友人の少ない人」に

対するイメージ（ポジティブ）に関しては、「狭く深い友人関係」「自分の世界を持っている」「思慮深い」「カッコいい」「一人が好き」の順に挙げられていた。「友人の少ない人」に対するイメージ（ネガティブ）に関しては、「暗い」「内気、人見知り」「性格悪い」「自己中心的」「社交的ではない」の順に挙げられていた（Table 5.3）。

Table 5.3 友人の数に対するイメージ

		カテゴリー	度数	
友人が多い人	ポジティブ	明るい	23	
		信頼できる	12	
		優しい、思いやりがある	12	
		面白い、楽しい	10	
		人つきあいが良い	8	
		話しやすい	8	
		気がきく	4	
		とても親しい人が少なそう	1	
		ネガティブ	誰と仲が良いのかわからない	1
		目立ちたがり屋	1	
友人が少ない人	ポジティブ	狭く深い友人関係	12	
		自分の世界を持っている	2	
		思慮深い	1	
		カッコいい	1	
		一人が好き	1	
	ネガティブ	暗い	18	
		内気、人見知り	18	
		性格悪い	14	
		自己中心的	11	
		社交的ではない	9	

4. 考察

分析の結果、「友人が多い人」のイメージにおいては、「明るい」「信頼できる」「優しい、思いやりがある」といったポジティブなイメージが多く挙げられていた。一方、「友人が少ない人」のイメージにおいては、「暗い」「内気、人見知り」「性格が悪い」といったネガティブなイメージが多く挙げられていた。

本研究において多く挙げられていたイメージは、パーソナリティの 5 因子モデルの外向

性、調和性、誠実性に対応していると考えられる。5因子モデルは、特性論の立場から、個人の嗜好、感情、行為の典型的なパターンに基づいて人への理解を試みる考え方である（Carver, 2010）。外向性（extroversion）、調和性（agreeableness）、誠実性（conscientiousness）、神経症傾向（neuroticism）、経験への開放性（openness to experience）の5つから構成されており（Nettle, 2009）、これらの中でも外向性（外向性の高い人は、社交的であり、物事に熱中しやすく、外向性の低い人は、よそよそしく、物静かである）、調和性（調和性の高い人は、共感性が高く、人を信頼しやすい、調和性の低い人は、非協力的で敵対的な傾向がある）、誠実性（誠実性の高い人は、有能で自己管理が得意であり、誠実性の低い人は、衝動的であり注意散漫である）の3つは社会的に望ましいパーソナリティであると考えられる。友人の数が多く人のイメージは、外向性、調和性、誠実性の高さに対応しており、友人の数が少ない人のイメージは、外向性、調和性、誠実性の低さに対応しているようであった。正直さや思いやり、誠実性は大学生にとって好ましいパーソナリティを表す形容詞である（Anderson, 1968）ことを考えると、友人とのつながりの多さは、好ましいパーソナリティを有していることを他者に認知させ、その結果、他者からの評価を高める可能性があり、一方、友人が少ないことはあまり好ましくないパーソナリティを他者に認知させ、その結果、他者からの評価を低める可能性があることが本研究から示唆された。

しかし、友人の数が多く人のイメージの中にも、「とても親しい人が少なそう」「誰と仲が良いのかわからない」「目立ちたがり屋」といったネガティブな印象が挙げられていた。そして、友人の数が少ない人のイメージの中にも、「狭く深い友人関係」「自分の世界を持っている」「思慮深い」といったポジティブな印象が挙げられていた。友人の多さに関して、人が円滑に関係を結ぶことができる友人の数には上限がある（Dunbar, 2011）ことを考えると、あまりにも友人が多いことは逆に、当人の不誠実さなどに繋がるのかもしれない。一方、友人の少なさにおいても、狭くて深い友人関係という印象が多く見られていた。青年期における友だちとのつきあい方の発達的な変化を検討した落合・佐藤（1996）において、深く狭くかかわるつきあい方が年齢を増すにつれて多くなっていくことが示されている。そのことを考えると、友人の数が少ないことは大学生にとってはある意味自然な状態であり、あまりネガティブな印象を持たれないこともあると考えられる。

第3節 友人数の多さが対人印象に与える影響 (1) —好意度の観点から— (研究3)

1. 目的

研究2においては、友人つき合いの多さは、当人が望ましいパーソナリティを有していることを他者に認識させ、その結果、他者からの評価が高くなる可能性があること、一方で、友人つき合いの少なさは、当人があまり望ましくないパーソナリティを有していることを他者に認識させ、その結果、他者からの評価が低くなる可能性があることが明らかとなった。しかし、研究2においては、他者からの評価の部分については直接検討していない。

そこで、研究3では、他者からの評価として好意度に焦点を当て、友人つき合いの多さが当人の好意度にどのような影響を与えるのかどうかを検討することを目的とする。具体的には、友人つき合いの多さが当人の好意度を高め、友人つき合いの少なさが当人の好意度を低めるかどうかについて質問紙実験により検討する。

2. 方法

2-1. 調査対象者

都内の専門学校生119名（男性86名、女性33名）を対象に調査を行った。調査対象者の平均年齢は25.0歳（ $SD = 5.34$ ）であった。

2-2. 調査時期

2007年7月に実施した。

2-3. 調査手続き

ある人物（Aさん）の紹介文を読ませて、その人物のイメージを想像させ、その後、質問項目に回答させた。紹介文は、3種類（友人が多い条件・友人が少ない条件・統制条件）あり、調査対象者はランダムにいずれかひとつの紹介文を読み、その後、質問項目に回答した。

2-4. 紹介文

以下の文章の後に、それぞれの条件に対応する文章が加えられていた。

「Aさんは、都内の専門学校に通っています。授業中は先生の話をちゃんと聞き、ノートもしっかりとっています。学校行事の時には積極的に行事に関わるほうです。」

- 1) 友人数多条件 (46名：男性30名，女性16名)：友人もとても多く，休日にはよく友人と一緒にいることが多いです。
- 2) 友人数少条件 (37名：男性28名，女性9名)：友人はあまりおらず，休日には1人でいることが多いです。
- 3) 統制条件 (36名：男性28名，女性8名)：友人に関する記述なし。

2-5. 質問項目

1) Aさんに対する好意度：特性形容詞対尺度 (林, 1978) を用いた (20項目, 7件法)。本尺度は、人が他者のパーソナリティを判断する際に共通して用いる対人認知構造を測定するものであり、「個人的親しみやすさ」「社会的望ましさ」「力動性」の3次元から構成されている (Table 5.4)。

2) 友人に対する考え方 3項目：「あなたにとって、友人の数が多きことは、どのくらい重要ですか (以下、友人数の重要性)」「あなたには、どのくらい友人がいますか (以下、友人数)」「あなたは、どのくらい友人との関係に満足していますか (以下、友人関係満足感)」という3項目に関して、それぞれ、「1. 全く重要ではない、全くいない、全く満足していない」～「5. とても重要である、とてもいる、とても満足している」の5件法で回答を求めた

3) フェイスシート：年齢と性別についてたずねた。

Table 5.4 特性形容詞対尺度

個人的親しみやすさ ($\alpha = .81$)	人のわるい - 人のよい
	なまいきな - なまいきでない
	近づきがたい - ひとなつつこい
	にくらしい - かわいらしい
	感じのわるい - 感じのよい
	親しみにくい - 親しみやすい
	不親切な - 親切な
社会的望ましさ ($\alpha = .60$)※	心のせまい - 心のひろい
	責任感のない - 責任感のある
	軽率な - 慎重な
	無分別な - 分別のある
	無気力な - 意欲的な
	自信のない - 自信のある
	短気な - 気長な
力動性 ($\alpha = .62$)	消極的な - 積極的な
	非社交的な - 社交的な
	恥知らずの - 恥ずかしがりの
	重々しい - 重々しくない
	沈んだ - うきうきした
卑屈な - 堂々とした	

※「短気な-気長な」を除いて、得点を算出した。

2-6. 実施方法

上記の質問紙を講義中に集団で施行し、その場で回答を求め、回収を行った。なお、倫理的な配慮として、個人の特定は行わない旨を伝え、無記名とした。また、強制ではなく、協力するか否かは自由であること、また、回答しないことによる不利益はないこと等を伝えた。同意を得た者のみを対象として実施した。

3. 結果

まず、回答者自身がもともと有している友人に対する考え方が好意度へ影響している可能性があるために、条件間において友人に対する考え方が異なるかどうかを検討する。友人数（友人数多条件・友人数少条件・統制条件）を独立変数、友人に対する考え方（3項目）

を従属変数とした分散分析を行った。分析の結果、友人数の重要性 ($F(2,116) = 0.797, n.s.$)、友人数の多さ ($F(2,116) = 1.095, n.s.$)、友人関係満足感 ($F(2,116) = 0.686, n.s.$) の3項目全てにおいて、条件間による得点の違いは認められなかった。よって、条件間において友人に対する考え方に偏りはないものと考えられる。

次に、友人数（友人数多条件・友人数少条件・統制条件）を独立変数、特性形容詞対尺度の各得点（個人的親しみやすさ、社会的望ましさ、力動性）を従属変数とした多変量分散分析を行った（Table 5.5）。なお、各得点に関して、得点が高いほど印象が良くなるように逆転処理を行った。分析の結果、すべての得点に関して条件間による違いが有意であった ($F(2,110) = 15.72, p < .005, \lambda = .48$)。条件間の差が有意であったため、多重比較（Bonferroni法）を行った。個人的親しみやすさに関して、友人数多条件 ($M = 5.63, SD = 0.75$) は友人数少条件 ($M = 4.30, SD = 0.73$)、統制条件 ($M = 4.70, SD = 0.69$) よりも有意に得点が高かった ($p < .001$)。次に、社会的望ましさに関して、友人数多条件 ($M = 5.26, SD = 0.71$) は友人数少条件 ($M = 4.74, SD = 0.80$) よりも有意に得点が高かった ($p < .01$)。最後に、力動性に関して、友人数多条件 ($M = 5.22, SD = 0.70$) は友人数少条件 ($M = 4.10, SD = 0.56$) よりも有意に得点が高かった ($p < .01, p < .05$)。また、友人数少条件 ($M = 4.10, SD = 0.56$) は、統制群 ($M = 4.89, SD = 0.58$) よりも有意に得点が低かった ($p < .001$)。

Table 5.5 条件ごとの各得点の平均値および標準偏差(SD), F値, 多重比較の結果

	独立変数						F値	多重比較
	友人数多条件		友人数少条件		統制条件			
	平均値	SD	平均値	SD	平均値	SD		
個人的親しみやすさ	5.63	0.75	4.30	0.73	4.70	0.69	35.45 ***	多条件 > 少条件
社会的望ましさ	5.26	0.71	4.74	0.80	4.97	0.69	4.93 ***	多条件 > 少条件, 統制条件
力動性	5.22	0.70	4.10	0.56	4.89	0.58	32.75 ***	多条件 > 少条件, 統制条件 > 少条件

*** $p < .001$

4. 考察

本研究の結果、当人の持つ友人の数に対する考え方に関わらず、友人数多条件が最も A さんに対する印象が良く、友人数少条件が最も A さんに対する印象が良くないことが明らかとなった。友人数多条件を読んだ人は、A さんに対して、個人的親しみやすさ、社会的望ましさ、力動性が高いと判断していた。一方、友人数少条件を読んだ人は、A さんに対して、個人的親しみやすさ、社会的望ましさ、力動性が低いと判断していた。本研究において用いられた人物の紹介文は、友人の数に関する記述以外では、学校に積極的に関わり、授業

態度も真面目であるという印象を喚起するような紹介文であったため、印象としては良いと判断されやすいと考えられる。そこに、友人の数が多という記述が加わることで、人物の評価がさらに高まっていた。しかし、友人の数が少ないという記述が加わると、良いと判断される可能性の高い印象はあまり見られなくなり、全体的に印象が低くなることが明らかになった。

現代青年の間では、学校の成績よりもコミュニケーションに関する能力が評価される(斎藤, 2005) ために、他者とのコミュニケーションを円滑に行うことが重要であると考えられる。そうであるならば、友人を多く持つことが、他者に対して自分にコミュニケーション能力があることを示すための一つの判断材料になる可能性があり、他者からの評価が高くなれば、結果的に今後より有益な相手との関係を形成できる可能性も高まるだろう。本結果により、現代青年にとって、友人つき合いの多さが当人の好意度を高め、友人つき合いの少なさが当人の好意度を低めることが明らかとなった。

第4節 友人数の多さが対人印象に与える影響 (2) —他者の行動推測の観点から— (研究4)

1. 目的

研究2では、友人つき合いの多さ、少なさに対する対人イメージ(パーソナリティ)、研究3では、友人つき合いの多さ、少なさと対人印象(好意度)との関連について検討を行った。本研究では、友人つき合いの多さ、少なさと対人印象(行動推測)との関連について検討を行う。研究2および3において、現代青年において、友人つき合いの多い人は、社会的に望ましく、個人的に親しみやすいという印象を持たれ、友人つき合いの少ない人は、社会的に望ましくなく、個人的に親しみにくいという印象を持たれることが明らかとなった。それでは、友人つき合いの多さ、少なさは、他者の行動推測にまで影響を及ぼすのかという点について検証する。

本研究では、友人との対人葛藤場面を用いてそこでの行動を推測させる。対人葛藤とは、他者との顕在的・潜在的対立を含む社会的状況であり、当事者の葛藤対処方略によって葛藤の結果が左右される(大淵・福島, 1997)。大学生は、友人と、日々多くのコミュニケーションを行っていると考えられ、コミュニケーションの量が多い分、対人葛藤を経験することも多いであろう。そこでどのような対処行動を取るのかという点は、その後の関係性に影響を与える重要な要因であるため、これまでの対人葛藤研究において、葛藤対処方略

に関する研究が数多く行われてきた (e.g., 長峰, 1999; Rahim & Bonama, 1979; Rubin, Pruitt, & Kim, 1994)。加藤 (2003) は, Rahim & Bonama (1979) の対人葛藤方略の 2 次元 5 スタイルを参考に, 対人葛藤方略スタイルを測定する尺度を作成している。この尺度は, 自己志向的次元と他者志向的次元の 2 次元から構成されており, どちらの志向も高い「統合スタイル」, 自己志向が高く, 他者志向が低い「強制スタイル」, 自己志向が低く, 他者志向が高い「自己譲歩スタイル」, どちらの志向も低い「回避スタイル」, どちらも中程度である「相互妥協スタイル」の 5 スタイルによって葛藤方略を捉えている。

友人つき合いの多さは, 社会的な望ましさや個人的な親しみやすさを印象付けるのであれば, 対人葛藤時において, 双方にとって望ましい方略を取り, 自分のみを優先するような方略は取らないと推測されると考えられる。一方, 友人つき合いの少なさは, 対人葛藤時にとって, 自分のみを優先するような方略を取り, 相手を優先するような方略は取らないと考えられる。

2. 方法

2-1. 調査対象者

関西圏の大学生 300 名 (男性 186 名, 女性 111 名, 不明 3 名) を対象に調査を行った。分析には, 回答に不備のあったものを除いた 268 名 (男性 163 名, 女性 105 名) を対象とした。分析対象者の平均年齢は, 19.1 歳 ($SD = 1.30$) であった。

2-2. 調査時期

2010 年 5 月に実施した。

2-3. 調査手続き

研究 3 と同様に, ある人物 (A さん) の紹介文を読ませて, その人物のイメージを想像させ, その後, 質問項目に回答させた。紹介文は, 3 種類 (友人数多条件・友人数少条件・統制条件) あり, 調査対象者はいずれかひとつの紹介文を読み, その後, 質問項目に回答した。

2-4. 紹介文

以下の文章の後に、それぞれの条件に対応する文章が加えられていた。

「Aさんは、関西の4年生大学に通っています。授業中は先生の話をちゃんと聞き、ノートもしっかりとっています。学校行事の時には積極的に行事に関わるほうです。」

- 1)友人数多条件 (89名：男性56名，女性33名)：友人もとても多く，休日にはよく友人と一緒にいることが多いです。
- 2)友人数少条件 (92名：男性55名，女性37名)：友人はあまりおらず，休日には1人でいることが多いです。
- 3)統制条件 (87名：男性52名，女性35名)：友人に関する記述なし。

2-5. 場面想定

Aさんが友人との間で葛藤を経験した時に、相手に対してどのような行動をとると思うかについてたずねた。葛藤場面はどちらかに責任があるわけではないが意見が対立する場面（課題葛藤場面）と相手に責任がある場面（約束の反故場面）の2場面を設けた。なお、場面の提示はカウンターバランスをとった。

- 1) 課題葛藤場面：Aさんは、友人と2人で定期試験の課題として、一緒に作業をやることになりました。課題の出来により2人の成績が決定します。作業を進めていく中で、Aさんは作業の進め方について友人と意見が合わなくなりました。
- 2) 約束の反故場面：Aさんは数日前に、友人と一緒に遊びに行く約束をしました。しかし、当日に友人から「他の友人と遊びに行く約束が入ってしまったから行けなくなった」とメールが入ってきました。

2-6. 質問項目

1) 対人葛藤方略：対人葛藤方略スタイル尺度（加藤, 2003）を用いた（Table 5.6）。この尺度は、Rahim & Bonama（1979）の対人葛藤方略の2次元5スタイルを参考に作成された尺度であり、自己志向的次元と他者志向的次元の2次元から構成されている。どちらの志向も高い「統合スタイル」、自己志向が高く、他者志向が低い「強制スタイル」、自己志向が低く、他者志向が高い「自己譲歩スタイル」、どちらの志向も低い「回避スタイル」、どちらも中程度である「相互妥協スタイル」の5スタイルによって葛藤方略を捉えている（各4項目）。課題葛藤場面、約束の反故場面のそれぞれについて、Aさんがどのような行動を

とると思うかについて、「1. あてはまらない」～「4. よくあてはまる」の4件法で回答を求めた。

2) 友人に対する考え方 3項目：「あなたにとって、友人の数が多きことは、どのくらい重要ですか（以下、友人数の重要性）」「あなたには、どのくらい友人がいますか（以下、友人数）」「あなたは、どのくらい友人との関係に満足していますか（以下、友人関係満足感）」という3項目に関して、それぞれ、「1. 全く重要ではない、全くいない、全く満足していない」～「5. とても重要である、とてもいる、とても満足している」の5件法で回答を求めた。

3) フェイスシート：年齢と性別についてたずねた。

Table 5.6 対人葛藤方略スタイル尺度（加藤, 2003）

統合スタイル	お互いの利益になるような決定をする
	お互いに満足するような結論を見つけ出そうとする
	お互いの目的を支持する
	最良の結果が得られるように、お互いの考えを理解する
回避スタイル	お互いの意見の相違に直面しないようにする
	出来る限り口論にならないようにする
	相手との衝突を避けようとする
	対立を防ごうとする
強制スタイル	自分の意見を通すために、いろんなことをする
	自分にとって有利な結果を得ようとする
	自分の立場を通そうとする
	自分の意見を通そうとする
自己譲歩スタイル	友人の要求に従う
	友人の目的に沿うようにする
	友人の望み通りにする
	友人の考えを認める
相互妥協スタイル	お互いの意見の間を取ろうとする
	お互いの意見を水に流すよう主張する
	お互いの妥協点を探そうとする
	お互いの意見の歩みよったところで、取り決めようとする

2-7. 実施方法

上記の質問紙を講義中に集団で施行し、その場で回答を求め、回収を行った。なお、倫理的な配慮として、個人の特定は行わない旨を伝え、無記名とした。また、強制ではなく、協力するか否かは自由であること、また、回答しないことによる不利益はないこと等を伝えた。同意を得た者のみを対象として実施した。

3. 結果

3-1. 記述統計

2つの葛藤場面における対人葛藤方略スタイルについて、 α 係数を算出した。各スタイルの平均値、標準偏差および α 係数をTable 5.7に示す。相互妥協スタイルに関して、課題葛藤場面 ($\alpha = .52$)、約束の反故場面 ($\alpha = .50$) のどちらも α 係数があまり高くなかったが、それ以外においては、 $\alpha = .78 \sim .86$ と比較的高い α 係数だった。それぞれについて合計得点を分析に使用した。

Table 5.7 対人葛藤方略スタイルの平均値、標準偏差および α 係数

		平均値	標準偏差	α 係数
対人葛藤方略 (課題葛藤場面)	統合スタイル	3.02	0.66	.78
	強制スタイル	2.10	0.81	.83
	回避スタイル	2.59	0.78	.86
	自己譲歩スタイル	2.03	0.60	.74
	相互妥協スタイル	2.33	0.56	.52
対人葛藤方略 (約束の反故場面)	統合スタイル	2.60	0.80	.81
	強制スタイル	1.79	0.77	.83
	回避スタイル	2.75	0.85	.84
	自己譲歩スタイル	2.57	0.81	.82
	相互妥協スタイル	2.07	0.58	.50
友人に対する考え方	友人数の重要性	3.49	1.12	
	友人数の多さ	3.31	0.87	
	友人関係満足感	3.76	0.91	

3-2. 友人数による友人に対する考え方の違い

回答者自身がもともと有している友人に対する考え方が A さんへの印象へ影響している可能性を排除するために、条件間において友人に対する考え方が異なるかどうかを検討する。友人数（友人数多条件・友人数少条件・統制条件）を独立変数、友人に対する考え方（3項目）を従属変数とした多変量分散分析を行った。分析の結果、条件間による違いが有意であった（ $F(6,526) = 2.16, p < .05, \lambda = .95$ ）。項目ごとに見ていくと、友人数の重要性（ $F(2,265) = 3.14, p < .05$ ）、友人数の多さ（ $F(2,265) = 2.41, n.s.$ ）、友人関係満足感（ $F(2,265) = 0.43, n.s.$ ）であり、友人数の重要性においてのみ条件間での得点に違いが認められた。多重比較（Bonferroni 法）の結果、友人数多条件（ $M = 3.70, SD = 1.01$ ）の方が統制条件（ $M = 3.28, SD = 1.11$ ）よりも有意に得点が高かった（ $p < .05$ ）。

3-3. 友人数による対人葛藤方略スタイルの違い 1（課題葛藤場面）

友人数（友人数多条件・友人数少条件・統制条件）において、課題葛藤場面における対人葛藤方略スタイルに違いが見られるかどうかを検討するために、友人数（友人数多条件・友人数少条件・統制条件）を独立変数、対人葛藤方略スタイルを従属変数とした多変量分散分析を行った（Table 5.8）。その際に、友人数の重要性を共変量として投入した。分析の結果、条件間による違いが有意であった（ $F(10,494) = 2.62, p < .05, \lambda = .92$ ）。方略ごとに見ると、強制スタイル（ $F(2,251) = 7.94, p < .001$ ）においてのみ条件間による違いが認められた。多重比較（Bonferroni 法）を行ったところ、友人数多条件（ $M = 1.81, SD = 0.64$ ）は、友人数少条件（ $M = 2.24, SD = 0.90$ ）、統制条件（ $M = 2.22, SD = 0.82$ ）と比べて有意に得点が低かった。

3-4. 友人数による対人葛藤方略スタイルの違い 2（約束の反故場面）

友人数（友人数多条件・友人数少条件・統制条件）において、約束の反故場面における対人葛藤方略スタイルに違いが見られるかどうかを検討するために、友人数（友人数多条件・友人数少条件・統制条件）を独立変数、対人葛藤方略スタイルを従属変数とした多変量分散分析を行った（Table 5.8）。その際に、友人数の重要性を共変量として投入した。分析の結果、条件間による違いが有意であった（ $F(10,500) = 2.22, p < .05, \lambda = .92$ ）。しかし、方略ごとに見ていくと、どこにも条件間による有意な違いは認められなかった。

Table 5.8 2つの場面における条件ごとの対人葛藤方略スタイルの平均値および標準偏差 (SD), F値, 多重比較の結果

	友人多数条件	友人少数条件	統制条件	F値	多重比較	
課題葛藤場面	統合スタイル	3.12 (0.62)	2.93 (0.73)	3.00 (0.64)	1.67	
	強制スタイル	1.81 (0.64)	2.24 (0.90)	2.22 (0.82)	7.94 ***	多条件 > 少条件, 統制条件
	回避スタイル	2.58 (0.83)	2.63 (0.78)	2.56 (0.76)	0.22	
	自己譲歩スタイル	2.05 (0.60)	2.05 (0.64)	1.95 (0.60)	0.71	
	相互妥協スタイル	2.31 (0.58)	2.34 (0.56)	2.33 (0.54)	0.08	
約束の反故場面	統合スタイル	2.65 (0.84)	2.45 (0.81)	2.72 (0.7)	2.52	
	強制スタイル	1.17 (0.67)	1.85 (0.87)	1.83 (0.75)	0.79	
	回避スタイル	2.62 (0.82)	2.82 (0.89)	2.81 (0.83)	1.53	
	自己譲歩スタイル	2.47 (0.78)	2.65 (0.85)	2.53 (0.84)	1.13	
	相互妥協スタイル	2.03 (0.56)	1.90 (0.59)	2.18 (0.57)	2.76	

*** $p < .001$

4. 考察

本研究では、友人数が人の印象に影響を与えるのかどうかについて、人は友人が多い人、少ない人の行動をどのように推測するのかという観点により検討を行った。分析の結果、予測はほぼ支持されず、友人が多い人は、少ない人と比べて、共同作業時の意見対立において、自分の主張を一方的に通すような行動をあまり取らないと推測されることが示された。本研究で提示した場面は、課題の出来により成績が決定するという大学生にとっては重要度の高い状況であると考えられる。そのような状況において、友人の多い人は、自分の意見を通そうとする強制スタイルをあまり取らないのではないかと推測されていた。本結果は、これまでの研究において見出されていた友人が多い人の印象（外向性や調和性の高さ）を反映している可能性がある。

しかし、他の対人葛藤方略スタイルが条件間で異なることはなかった。課題葛藤場面、約束の反故場面のどちらも、一緒に活動を共にすることを自分たちで決めている場面であり、そこに出てくる友人とはある程度親密であると回答者自身が考えた可能性が高い。そして、親密な友人とは一度限りのコミュニケーションではなく、日々様々なコミュニケーションをとっていると想定されるため、一度の意見の対立や約束の反故に対して行動が変化するとは考えづらいのかもしれない。また、操作のインパクトが弱かった可能性もある。友人つき合いの多さによって人の印象は異なるが、対人葛藤場面での行動推測にまで影響を及ぼすことはないであろう。

第5節 第5章のまとめ

本章では、現代青年が友人に対してどのようなイメージを持っているのか（どのような他者を友人として認識しているのか）、また、どのような動機で友人とつき合っているのか、そして、それらを踏まえ、友人つき合いが多い人、少ない人に対してどのようなイメージを持つのかについて検討した。研究1では、友人に対するイメージと友人とつき合う動機について検討し、研究2~4において友人つき合いの多さ、少なさに対するイメージについて検討した。その結果、現代青年は、従来の友人関係研究において扱われてきた友人関係の定義よりも多様な他者を友人として捉えていること、そして、多様な動機によって友人とつき合っていることが明らかとなった。

また、友人つき合いの多さ、少なさによる対人印象の違いに関して、友人つき合いの多い人は、パーソナリティの5因子モデルにおける外向性、調和性、誠実性の高さに関連した印象や社会的に望ましく、個人的に親しみやすいという印象を持たれること、そして、友人つき合いの少ない人は、その反対のネガティブな印象を持たれることが明らかとなった。しかし、友人とのコミュニケーションにおける行動推測にまで影響することはなかった。

現代青年は、内発的だけではなく、外発的な動機づけによっても友人とつき合っていることや、友人つき合いの多さや少なさが対人印象に影響を及ぼすという本研究の結果を見ると、周りの空気を読みながら、仲間外れにならないように生活しているという現代青年の特徴は十分理解できる。第6章、第7章においては、友人関係における動機づけに焦点を当て、現代青年が友人とどのようなコミュニケーションを取っており、どの程度友人との関係に満足しているのかなどについて検証を進めていく。

第6章 友人関係における動機づけと友人つき合いの多さ、精神的健康との関連

第5章では、現代青年が友人に対してどのようなイメージを持っているのか（どのような他者を友人として認識しているのか）、また、どのような動機で友人とつき合っているのか、そして、それらを踏まえ、友人つき合いが多い人、少ない人に対してどのようなイメージを持つのかについて検討した。その結果、現代青年は、従来の友人関係研究において扱われてきた友人関係の定義よりも多様な他者を友人として捉えていること、そして、多様な動機によって友人とつき合っていることが明らかとなった。本章では、友人関係における動機づけと友人つき合いの多さ、精神的健康との関連について検討を行う。具体的には、研究5において友人関係における動機づけと友人関係満足感、友人つき合いの多さとの関連を検討し、研究6において自尊感情、生活満足感との関連を検討する。

第1節 友人関係における動機づけと友人数、友人関係満足感との関連（研究5）

1. 目的

本研究では、友人関係における動機づけと友人つき合いの多さ（親しい同性友人のイニシャル数、携帯電話に登録している友人数）および友人関係満足感との関連について検討を行う。なお、本研究は、研究6（親しい同性友人のイニシャル、携帯電話に登録している友人数、友人関係満足感）、研究7（携帯電話に登録している友人数、友人関係満足感）、研究9（親しい同性友人のイニシャル、携帯電話に登録している友人数、友人関係満足感）において集めたデータに加え新たに収集したデータをまとめ、本研究の目的に合わせて分析を行ったものである。

友人関係満足感については、これまでにいくつも検討が行われてきている。それらをまとめると、均衡のとれている関係であること（Veniegas & Peplau, 1997）、当人の主張性が高く、情動をコントロールできること（渡部・松井, 2011）、シャイネスが低いこと（Baker & Oswald, 2010）、親和欲求が高く、きらわれ不安が低いこと（笠原・島谷, 2012）が友人関係満足感を高めることが明らかになっている。しかし、友人関係における動機づけとの関連はこれまでに検討されていない。自己決定性理論を踏まえると、自己決定性の高い動機づけは友人との積極的なコミュニケーションを促進し、結果として友人関係満足感を促進させると考えられる。よって、「内発」や「同一化」といった自己決定性の高い動機づけは友

人関係満足感を促進すると予測される。一方、「取り入れ」や「外的」といった自己決定性の低い動機づけは、友人関係満足感を抑制すると予測される。

友人つき合いの多さに関しては、男性においてシャイネスの高さが友人ネットワークを抑制すること（石田, 2003）、外向性の高さが友人数を促進すること（Selfhout et al., 2010）、友人獲得に対する自己効力感の高さと友人数に正の関連が見られること（鈴木ら, 1999）などが明らかにされてきた。しかし、友人関係満足感と同様に、友人関係における動機づけとの関連はこれまでに検討されていない。自己決定性の高い動機づけは友人との積極的なコミュニケーションを促進することを考えると、「内発」や「同一化」といった自己決定性の高い動機づけは、親しい友人の数、携帯電話に登録している友人の数はともに多くなる予測できる。次に、「取り入れ」と友人の数との関連について考える。「取り入れ」は、不安や義務の感覚、自己価値の維持という理由に基づくものである。そして、研究2~4において明らかになったように、友人の数が少ないことは他者からの評価を低める可能性があることを考えると、できるだけ多くの友人を獲得しようと動機づけられるであろう。しかし、相手に気を使うような動機づけによって親しい友人を獲得できるとは考えづらいため、親しい友人の数との関連は見られないが、携帯電話に登録している友人の数を促進すると予測できる。

2. 方法

2-1. 分析対象者

東京都の短期大学生および専門学校生、東京都、岩手県、兵庫県、愛知県の大学生 672名（男性 263名、女性 407名、不明 2名）を対象に分析を行った。平均年齢は 19.32 ($SD=1.16$)であった。

2-2. 調査内容

1) 友人関係における動機づけ：回答者の友人関係全般における動機づけを測定するために、岡田（2005）の友人関係における動機づけ尺度を用いた。この尺度は、「外的」「取り入れ」「同一化」「内発」の4つの下位尺度（各4項目）から成る（Table 6.1）。「あなたの友人に対する態度全般についてお聞きします。なぜ友人と親しくしたり、一緒に時間を過ごしたりしますか？それぞれの文章についてもっともあてはまる数字に○をつけてください

い」という教示を行い、「1. あてはまらない」～「5. あてはまる」の5件法で回答を求めた。

Table 6.1 友人関係における動機づけ尺度 (岡田, 2005)

外的	親しくしていないと、友人ががっかりするから 友人関係を作っておくように、まわりから言われるから 一緒にいないと、友人が怒るから 友人の方から話しかけてくるから
取り入れ	友人がいないと、後で困るから 友人とは親しくしておくべきだから 友人がいないのは、恥ずかしいことだから 友人がいないと、不安だから
同一化	友人のことをよく知るのは、価値のあることだから 友人関係は、自分にとって意味のあるものだから 友人といることで、幸せになれるから 友人と一緒に時間を過ごすのは、重要なことだから
内発	友人と一緒にいるのは楽しいから 友人と親しくなるのは、うれしいことだから 友人と話すのは、おもしろいから 友人と一緒にいると、楽しい時間が多いから

2) 親しい同性友人のイニシャル (以下, 友人数(イニシャル)): 「あなたが親しいと感じている同性の友人を思いつく限り, 思い浮かべてください。そして, 思い浮かべた友人全員のイニシャルを記入してください。」と教示を行い, イニシャルを記入させた。

3) 携帯電話に登録している友人数 (以下, 友人数(携帯)): 携帯電話に登録している友人の数を記入させた。

4) 友人関係満足感: 鈴木 (2002) の作成した主観的ウェルビーイング尺度の中の下位尺度である「友人関係満足感 (6項目)」を用いた。「それぞれの項目についてあてはまる数字に1つ○をつけてください」と教示を行い, 「1. 全くあてはまらない」～「5. 非常に良くあてはまる」までの5件法で回答を求めた。分析には平均得点を使用した。

5) フェイスシート: 年齢と性別についてたずねた。

3. 結果

3-1. 記述統計

各尺度の平均値、標準偏差および α 係数を Table 6.2 に示す。外的のみ $\alpha = .62$ と α 係数があまり高くなかったが、それ以外においては $\alpha = .74 \sim .86$ と比較的高い α 係数であった。それぞれについて平均得点を分析に使用した。なお、内発は天井効果のため、分析から除外した。

Table 6.2 各尺度の平均値、標準偏差および α 係数

	平均値	標準偏差	α 係数
内発	4.43	0.65	.86
同一化	4.07	0.73	.81
取り入れ	2.95	0.91	.74
外的※	1.80	0.72	.62
友人数(イニシャル)	16.90	11.22	
友人数(携帯)	104.66	78.65	
友人関係満足感	4.02	0.60	

※4項目中、「友人の方から話しかけてくるから」を除いた3項目

3-2. 変数間の関連

友人関係における動機づけ尺度と友人数（イニシャル）、友人数（携帯）および友人関係満足感との関連を検討するために、相関分析および重回帰分析を男女別に行った（Table 6.3, 6.4）。なお、友人数（イニシャル）と友人数（携帯）のどちらか1つのみをたずねている調査対象者が存在しているため、分析の人数は両者で異なっている（友人数(イニシャル)は、 $N=423$ 、友人数(携帯)は、 $N=672$ ）。

まず、相関分析の結果について述べる。男性に関しては、友人数（イニシャル）、友人数（携帯）、友人関係満足感すべてにおいて同一化（ $r = .21, p < .05$, $r = .19, p < .01$, $r = .54, p < .001$ ）と正の関連が有意であった。女性に関しても、友人数（イニシャル）、友人数（携帯）、友人関係満足感すべてにおいて同一化（ $r = .26, p < .001$, $r = .21, p < .001$, $r = .60, p < .001$ ）と正の関連が有意であった。また、友人数（イニシャル）、友人関係満足感と外的（ $r = -.13, p < .05$, $r = -.25, p < .001$ ）と負の関連が有意であった。

次に、重回帰分析の結果について述べる。男性に関しては、友人数（携帯）に対して、同一化（ $\beta = .59, p < .001$ ）と正の関連が有意であった（ $R^2 = .03, p < .05$ ）。また、友人関係満

足感に対しても、同一化($\beta = .59, p < .001$)と正の関連が有意であった($R^2 = .31, p < .001$)。友人関係(イニシャル)や取り入れと外的との関連は見られなかった。女性に関しては、友人数(イニシャル)に対して、同一化($\beta = .25, p < .001$)と正の関連が有意であった($R^2 = .07, p < .001$)。友人数(携帯)に対して、同一化($\beta = .26, p < .001$)と正の関連、取り入れ($\beta = -.15, p < .05$)と負の関連が有意であった($R^2 = .06, p < .001$)。友人関係満足感に対して、同一化($\beta = .60, p < .001$)と正の関連、取り入れ($\beta = -.14, p < .01$)、外的($\beta = -.17, p < .001$)と負の関連が有意であった($R^2 = .40, p < .001$)。

Table 6.3 友人関係における動機づけ尺度と友人数、友人関係満足感との関連(相関分析)

		同一化	取り入れ	外的
友人数(イニシャル)	男性	.21 *	.13	-.02
	女性	.26 ***	-.01	-.13 *
友人数(携帯)	男性	.19 **	.10	-.01
	女性	.21 ***	-.07	-.04
友人関係満足感	男性	.54 ***	.01	-.11
	女性	.60 ***	-.06	-.25 ***

* $p < .05$, ** $p < .01$, *** $p < .001$

Table 6.4 友人関係における動機づけ尺度と友人数、友人関係満足感との関連(重回帰分析)

		同一化	取り入れ	外的	R^2_{adj}
友人数(イニシャル)	男性	.17	.12	-.09	.03
	女性	.25 ***	-.03	-.10	.07 ***
友人数(携帯)	男性	.15 *	.09	-.07	.03 *
	女性	.26 ***	-.15 *	.05	.06 ***
友人関係満足感	男性	.59 ***	-.15 *	-.09	.31 ***
	女性	.60 ***	-.14 **	-.17 ***	.40 ***

* $p < .05$, ** $p < .01$, *** $p < .001$

4. 考察

本研究では、友人関係における動機づけと友人つき合いの多さ(親しいと感じている同性友人、携帯電話に登録している友人)、友人関係満足感との関連を検討した。自己決定性の高い動機づけである内発や同一化は友人関係満足感の高さ、友人つき合いの多さと関連があり、自己決定性の低い動機づけである取り入れや外的は、友人関係満足感の低さ、取り入れにおいてのみ、携帯電話に登録している友人数の多さと関連があると予測していた。

分析の結果、予測通り、男女ともに、自己決定性の高い動機づけである同一化と親しい友人の数（女性のみ）、携帯電話に登録している友人の数、友人関係満足感との間に正の関連がみられた。友人関係における動機づけに関するこれまでの先行研究によると、自己決定性の高い動機づけは友人との積極的なコミュニケーションを促進し、結果的に友人関係における適応を高めることが明らかにされている（e.g., 岡田, 2005）。友人関係はソーシャルサポートの一つであり、友人からのサポートの多さと精神的健康に関連があること（福岡・橋本, 1995）を考えると、本研究の結果は、これまでの先行研究において想定されている結果であると考えられる。

そして、自己決定性の低い動機づけである取り入れや外的に関しては、性別による違いが認められた。男性においては、取り入れと友人関係満足感との間にのみ負の関連が認められ、それ以外との関連は見られなかった。一方、女性においては、取り入れと携帯電話に登録している友人の数、友人関係満足感との間に負の関連、外的と友人関係満足感との間に負の関連が見られた。友人関係満足感に関しては、予測通りの結果であったが、友人付き合いの多さに関しては、予測とは異なる結果であった。

携帯電話に登録している友人数と負の関連が見られた点に関して、これまでの友人関係に関する性差の研究より、男性よりも女性の方が、友人に対して親密さを求める傾向が強く、友人から多くのサポートを得ている一方で、自分の所属している関係に依存する傾向が強く、友人から拒絶されることに対するネガティブな影響が強いことが明らかとなっている。携帯電話にはそこまで親しくない友人を気軽に、数多く登録することができる反面、登録している友人が多くなれば、その分、相手とのコミュニケーションを取る必要が出てくる。取り入れは、友人がいないと不安を感じたり、友人とは親しくしておくべきという動機づけであるが、相手とコミュニケーションを取る量には上限があるため、友人に対して親密さを多く求める女性においては、携帯電話に登録している友人数はある程度抑制する必要があるものと考えられる。

第2節 友人関係における動機づけと自尊感情、生活満足感との関連（研究6）

1. 目的

本研究では、友人関係における動機づけと精神的健康との関連として、自尊感情、生活満足感との関連について検討を行う。自尊感情に関して、岡田（2011）は、現代青年の友人

関係と自尊感情との関連を検討し、相手を傷つけることや傷つけられることを回避する傾向が拒絶感を低め、結果的に当人の自尊感情を維持させることを明らかにしている。また、小塩（1998）は、青年の自己愛傾向と自尊感情、友人関係のあり方との関連を検討し、深い友人関係を築いているものは、自尊感情が高いことを明らかにしている。このように、友人関係のつきあい方と自尊感情に関わる研究はいくつか見られるが、友人関係における動機づけとの関連を検討しているものは見られない。また、生活満足感に関して、友人からのソーシャルサポートと精神的健康を検討したもの（福岡・橋本, 1995）や、友人に対する感情と生活充実感を検討したもの（榎本, 2001）などいくつも検討がなされているが、生活満足感に関しても、友人関係における動機づけとの関連を検討しているものは見られない。友人関係における動機づけと自尊感情、生活満足感の関連を検討することは、現代青年の友人関係の特徴を捉える上で有益であると考えられる。

本研究の結果としては、以下のように予測する。まず、自尊感情に関して、岡田（2011）や小塩（1998）の結果を踏まえると、自己決定性の高い動機づけである「内発」や「同一化」、そして、自己決定性の低い動機づけである「取り入れ」が自尊感情を促進すると考えられる。次に、生活満足感に関して、自己決定性の高い動機づけが個人の適応を促進することや（岡田, 2005）という先行研究の結果から、自己決定性の高い動機づけである「内発」、 「同一化」が生活満足感を促進させると考えられる。

2. 方法

2-1. 調査対象者

兵庫県内の大学生、愛知県内の大学生計 221 名を対象に調査を行った。分析には、回答に不備のあったものを除いた 212 名（男性 28 名、女性 183 名、不明 1 名）を対象に行った。分析対象者の平均年齢は、19.4 歳（ $SD = 1.02$ ）であった。

2-2. 調査時期

2012 年 7 月に実施した。

2-3. 調査内容

1) 友人関係における動機づけ：回答者の友人関係全般における動機づけを測定するために、岡田（2005）の友人関係における動機づけ尺度を用いた。この尺度は、「外的」「取り

入れ」「同一化」「内発」の4つの下位尺度（各4項目）から成る。「あなたの友人に対する態度全般についてお聞きします。なぜ友人と親しくしたり、一緒に時間を過ごしたりしますか？それぞれの文章についてもっともあてはまる数字に○をつけてください」という教示を行い、「1. あてはまらない」から「5. あてはまる」の5件法で回答を求めた。

2) 親しい同性友人のイニシャル：「あなたが親しいと感じている同性の友人を思いつくり、思い浮かべてください。そして、思い浮かべた友人全員のイニシャルを記入してください」という教示を行い、友人全員のイニシャルの記入を求めた。なお、本節において友人のイニシャルは分析に用いない。

3) 携帯電話に登録している友人の数：携帯電話に登録している友人の数の記入を求めた。なお、本節において携帯電話の友人数は分析に用いない。

4) 自尊感情：山本・松井・山成（1982）の自尊感情尺度（10項目）を用いた（Table 6.5）。「以下の項目についてあてはまる数字に1つ○をつけてください」と教示を行い、「1. あてはまらない」～「4. よくあてはまる」までの4件法で回答を求めた。分析には平均得点を使用した。

Table 6.5 自尊感情尺度(山本・松井・山成, 1992)

少なくとも人並みには、価値のある人間である
色々な良い素質をもっている
敗北者だと思ふことがよくある(※)
物事を人並みには、うまくやれる(※)
自分には、自慢できるところがあまりない(※)
自分に対して肯定的である
だいたいにおいて、自分に満足している
もっと自分自身を尊敬できるようになりたい(※)
自分は全くだめな人間だと思ふことがある(※)
何かにつけて、自分は役に立たない人間だと思ふ(※)

※逆転項目

5) 主観的ウェルビーイング：鈴木（2002）の作成した主観的ウェルビーイング尺度の中の下位尺度である「学校生活充実感（5項目）」「友人関係満足感（6項目）」「全般的な生活満足感（6項目）」を用いた（Table 6.6）。「それぞれの項目についてあてはまる数字に1つ○をつけてください」と教示を行い、「1. 全くあてはまらない」～「5. 非常に良くあてはまる」

までの 5 件法で回答を求めた。分析には平均得点を使用した。なお、本節において友人関係満足感分析に用いない。

Table 6.6 主観的ウェルビーイング尺度(鈴木, 2005)

友人関係満足感	友だちといると楽しい
	今の友人関係に満足している
	友だちといると不愉快になることが多い(※)
	友だちといるより、ひとりである方が気楽だ(※)
	これまで、あたたかく信頼できる友人関係を作ってきた友だちに感謝している
全般的 生活充実感	私の毎日は充実している
	今の生活には楽しいことがたくさんある
	今の生活はたいくつだ(※)
	私は自分の生活に満足している
	自分が生きていることの意味を見いだせない(※)
学校生活満足感	自分の将来には夢を持っている
	学校にいるのは時間のムダだと感じる(※)
	学校での経験は、将来の生活や職業に役に立つと感じる
	これまで学校で学んできたことに満足している
	学校の先生に対して親しみを感じる
	今の学校生活に満足している

※逆転項目

6) フェイスシート：年齢と性別についてたずねた。

2-4. 実施方法

上記の質問紙を講義中に集団で施行し、その場で回答を求め、回収を行った。なお、倫理的な配慮として、個人の特定は行わない旨を伝え、無記名とした。また、強制ではなく、協力するか否かは自由であること、また、回答しないことによる不利益はないこと等を伝えた。同意を得た者のみを対象として実施した。なお、本節においては、友人関係における動機づけと自尊感情、全般的な生活満足感、学校生活充実感との関連に焦点を当てて検討する。友人数（イニシャル）、友人数（携帯）、友人関係満足感は、第 6 章第 1 節において扱う。

3. 結果

3-1. 記述統計

友人関係における動機づけ尺度，自尊感情，学校生活充実感，全般的な生活満足感に関して α 係数を算出した。各尺度の平均値，標準偏差および α 係数を Table 6.7 に示す。なお，内発に関しては，天井効果のため分析から除外した。

Table 6.7 各尺度の平均値，標準偏差および α 係数

	平均値	標準偏差	α 係数
内発	4.45	0.73	.91
同一化	4.14	0.79	.86
取り入れ	2.80	0.93	.75
外的	2.04	0.70	.68
自尊感情	2.40	0.54	.83
学校生活充実感	3.40	0.75	.76
全般的な生活満足感	3.60	0.77	.79

3-2. 友人関係における動機づけと各変数との関連（相関分析）

友人関係における動機づけと各変数との関連を検討するために，男女別に，相関分析を行った。分析結果を Table 6.8 に示す。男性において，同一化と全般的な生活満足感 ($r = .61, p < .001$)，学校生活充実感 ($r = .69, p < .001$) との間に有意な正の相関，取り入れと学校生活充実感 ($r = .43, p < .05$) との間に有意な正の相関が認められた。しかし，自尊感情との関連は見られなかった。女性においては，同一化と全般的な生活満足感 ($r = .61, p < .001$)，学校生活充実感 ($r = .69, p < .001$) との間に有意な正の相関が認められ，それ以外の関連は見られなかった。

Table 6.8 各尺度間の関連(相関分析)

		同一化	取り入れ	外的
自尊感情	男性	.08	-.10	.15
	女性	.00	-.01	-.01
全般的な生活満足感	男性	.61 ***	.28	-.07
	女性	.44 ***	-.01	-.14
学校生活充実感	男性	.69 ***	.43 *	.11
	女性	.32 ***	.01	-.07

* $p < .05$, *** $p < .001$

3-3. 友人関係における動機づけと各変数との関連(重回帰分析)

友人関係における動機づけと各変数との関連を検討するために、友人関係における動機づけを説明変数、自尊感情、全般的な生活満足感、学校生活充実感を目的変数とした重回帰分析を男女別に行った。分析結果を Table 6.9 に示す。男性において、全般的な生活満足感に関して、同一化 ($\beta = .58, p < .01$) が正の影響を与えていた ($R^2 = .32, p < .01$)。また、学校生活充実感に関して、同一化 ($\beta = .61, p < .01$) が正の影響を与えていた ($R^2 = .42, p < .01$)。取り入れや外的との関連は見られなかった。また、自尊感情との関連も見られなかった。女性においても、全般的な生活満足感に関して、同一化 ($\beta = .45, p < .001$) が正の影響を与えていた ($R^2 = .20, p < .001$)。また、学校生活充実感に関して、同一化 ($\beta = .33, p < .001$) が正の影響を与えていた ($R^2 = .09, p < .001$)。取り入れや外的との関連は見られなかった。また、自尊感情との関連も見られなかった。

Table 6.9 友人関係における動機づけ尺度、自尊感情、全般的な生活満足感、学校生活充実感との関連(重回帰分析)

		友人関係における動機づけ尺度			R^2_{adj}
		同一化	取り入れ	外的	
自尊感情	男性	.24	-.41	.36	-.01
	女性	-.01	.00	-.03	-.02
全般的な生活満足感	男性	.58 **	.10	-.19	.32 **
	女性	.45 ***	-.06	-.07	.20 ***
学校生活充実感	男性	.61 **	.17	-.02	.42 **
	女性	.33 ***	-.05	-.01	.09 ***

** $p < .01$, *** $p < .001$

4. 考察

本研究では、友人関係における動機づけが自尊感情、全般的な生活満足感、学校生活充実感に与える影響を検討した。本研究の結果、予測通り、男女ともに、全般的な生活満足感、学校生活充実感においては、自己決定性の高い動機づけである同一化が正の影響を与えていることが明らかとなった。本結果は、自己決定性の高い動機づけは友人との積極的なコミュニケーションを促進し、その結果、適応を促進するという先行研究の結果と同様のものであると考えられる。また、自己決定性の低い動機づけである取り入れや外的との関連は見られないことが明らかとなった。

一方、予測とは異なり、自尊感情と友人関係における動機づけとの関連は見られないことが明らかとなった。ソシオメーター理論によると、自尊感情は、人々が他者によって、関係的に重視され、社会的に受け入れられていると認知している程度に関する心理学的な計測器であるとされており、対人的な受容と拒絶に対してモニターし、反応するシステムのアウトプットとして捉えられている (Leary, 2012)。このように考えると、当人がどのような動機づけを持っているのかということは、他者から実際に受容または拒絶されているかどうかとは関係ないために、自尊感情との関連が見られなかったものと考えられる。

第5節 第6章のまとめ

本章では、友人関係における動機づけと友人つき合いの多さ、精神的健康との関連について検討を行った。具体的には、研究5において友人関係における動機づけと友人関係満足感、友人つき合いの多さとの関連を検討し、研究6において自尊感情、生活満足感との関連を検討した。その結果、友人つき合いの多さに関して、性別によって自己決定性の低い動機づけとの関連が異なっていた。男性では、友人つき合いの多さとの関連は見られなかったが、女性において、取り入れと携帯電話に登録している友人数との間に負の関連が認められた。友人関係満足感に関しては、性別による違いはほとんど認められず、自己決定性の高い動機づけは友人関係満足感を促進し、自己決定性の低い動機づけは友人関係満足感を抑制することが明らかとなった。

精神的健康との関連に関しても性別による違いは認められなかった。男女とも自己決定性の高い動機づけが、生活満足感や学校生活充実感を促進していることが明らかとなった。自己決定性の低い動機づけとの関連は見られなかった。また、自尊感情に関しては、友人関係における動機づけとの関連は見られなかった。

第7章 友人関係における動機づけと友人とのコミュニケーションとの関連

第6章では、友人関係における動機づけと友人つき合いの多さ、精神的健康との関連について検討を行った。本章においては、友人関係における動機づけと友人とのコミュニケーションについて検討を行う。コミュニケーションには様々なものが存在するが、本章では、親密さを促進させるコミュニケーションと、親密さを促進または抑制させるコミュニケーションに焦点を当てて、友人関係における動機づけとの関連について検証を行う。具体的には、研究7において、親密な友人との親密さを促進させるコミュニケーション（たとえば、課題解決のためのアドバイスをもらうことや、おしゃべりをするなど）との関連について検討を行う。次に、研究8において、親密な友人との親密さを促進または抑制させるコミュニケーション（対人葛藤時の対処方略）との関連について検討を行う。そして、研究9においては、そこまで親密ではない友人に焦点を当て、親密さを促進させるコミュニケーション、親密さを促進または抑制させるコミュニケーションと友人関係における動機づけとの関連について検討を行う。

第1節 友人関係における動機づけと、対面および携帯コミュニケーションとの関連－親密さの程度の高い友人に着目して－（研究7）

1. 目的

本章では、友人関係における動機づけと友人とのコミュニケーションについて検討する。コミュニケーションには様々なものが存在するが、本章では、親密さを促進させるコミュニケーションと、親密さを促進または抑制させるコミュニケーションに焦点を当てて検証を行う。そこで、本研究では、友人関係における動機づけと、親密な友人との親密さを促進させるコミュニケーション（たとえば、課題解決のためのアドバイスをもらうことや、おしゃべりをするなど）との関連について検討する。なお、その際に、現代青年のコミュニケーションツールとして、携帯電話の利用が多くなっていることから、対面および携帯電話を介したコミュニケーションについて検討することとする。

対面と携帯電話、携帯メールにおける特徴の違いについては、これまでにいくつも言及がなされてきている。たとえば、木村（2010）は、コミュニケーションの特性として、「同時性（メッセージを伝えることと理解することの時点が一致すること）」、「空間の共有（個

人と個人が同じ場所にいること)」、「可搬性 (自分が移動しても使用できること, 持ち運べること)」の3つを取り上げ, 対面状況ではすべてが兼ね備えられており, 携帯電話および携帯メールでは, 空間の共有がないとまとめている。また, 岡田・松田 (2012) は, 携帯メールは, 送られてきたとしても, 後に, あるいは選択的に見たり, 返信したりすることができるなど非同期性が高いが, 音をなくすることができるので, 声を発するのが問題となるような公共空間においてもリアルタイムな, 同期性の高いコミュニケーションも可能であると述べている。他にも, 心理的な側面として, メールでのコミュニケーションは, 対面よりも対人的な緊張や対人的な圧力感が少ないと感ずることができるために, コミュニケーションがとりやすい (勝谷, 2009) ことも明らかにされている。

これらの先行研究を踏まえ, 本研究の結果としては, 以下のように予測する。自己決定理論によると自己決定性の高い動機づけは友人との積極的なコミュニケーションを促すことが予想されるため, 自己決定性の高い動機づけである「内発」, 「同一化」は, すべてのコミュニケーションを促進すると考えられる。また, 自己決定性の低い動機づけである「取り入れ」に関しても, 友人との親密さを促進するようなコミュニケーションを積極的に促進すると考えられる。しかし, 「友人がいないと不安だから」などの項目で構成されているため, 相手から否定的な評価をされることを避けようとするを考えると, 対面や携帯電話などではなく, 特に携帯メールでのコミュニケーションが促進されると考えられる。外的に関しては, 相手からの働きかけに基づく動機づけであるため, すべてのコミュニケーションを抑制すると考えられる。

2. 方法

2-1. 調査対象者

東京都内, 兵庫県内, 岩手県内の大学生 270 名 (男性 148 名, 女性 120 名, 不明 2 名) を対象に調査を行った。平均年齢は, 19.1 歳 ($SD=1.34$) であった。

2-2. 調査時期

2011 年 6 月, 7 月および 2012 年 11 月~2013 年 1 月に実施した。

2-3. 調査内容

1) 全般的な同性の友人関係に関する項目

1-1) 友人関係における動機づけ：回答者の友人関係全般における動機づけを測定するために、岡田（2005）の「友人関係における動機づけ尺度」を用いた。この尺度は、「外的」「取り入れ」「同一化」「内発」の4つの下位尺度（各4項目）から成る。「あなたの友人に対する態度全般についてお聞きします。なぜ友人と親しくしたり、一緒に時間を過ごしたりしますか？それぞれの文章についてもっともあてはまる数字に○をつけてください」という教示を行い、「1. あてはまらない」～「5. あてはまる」の5件法で回答を求めた。

1-2) 友人関係満足感：鈴木（2002）の主観的ウェルビーイングの下位尺度である友人関係満足感（6項目）を用いた。「それぞれの項目についてあてはまる数字に1つ○をつけてください」と教示を行い、「1. 全くあてはまらない」～「5. 非常に良くあてはまる」までの5件法で回答を求めた。なお、本節において友人関係満足感は分析に用いない。

1-3) 携帯電話の友人数：携帯電話に登録している友人の数（以下、携帯友人数）を記入させた。なお、本節において携帯電話の友人数は分析に用いない。

2) 特定の同性の友人関係に関する項目

2-1) 最も親しいと感じている同性友人のイニシャル：最も親しいと感じている同性の友人を1人思い浮かべさせ、そのイニシャルを記入させた。

2-2) 友人との親密度：2-1)において記入した同性友人との親密さについて、「1. 全く親しくない」～「5. とても親しい」までの5件法で回答を求めた。

2-3) 友人とのコミュニケーション内容：2-1)において記入した友人とどのような内容のコミュニケーションを行っているのかを測定するために、古谷・坂田（2006）のコミュニケーション尺度を使用した（Table 7.1）。この尺度は、課題的コミュニケーション（本人が直面している問題に対して具体的な解決方法や、その手がかり情報をやり取りするコミュニケーション）、情緒的コミュニケーション（悩みごとの相談や気持ちの理解といった、自己開示や情緒的支持を含むコミュニケーション）、コンサマトリーのコミュニケーション（おしゃべりなどの、その行為をすること自体が目的であるコミュニケーション）から構成されている（各3項目）。回答の際には、コミュニケーション・メディア（対面、携帯（通話）、携帯（メール））ごとに、「友人とどの程度コミュニケーションを行っていると思いますか」とたずね、「1. 全く行っていないと思う」～「5. 非常にやっていると思う」の5件法で回答を求めた。なお、コミュニケーション・メディアの提示順はカウンターバランス

をとった。

3) 回答者自身に関する項目

3-1) フェイスシート：年齢と性別についてたずねた。

Table 7.1 コミュニケーション尺度(古谷・坂田, 2006)

課題的 コミュニケーション	問題解決のためのアドバイスや情報を伝えてもらうこと 自分の能力や適性について、客観的な情報を交換すること 問題解決のために現実的な手助けや支援をしてもらうこと
情緒的 コミュニケーション	自分の悩みや愚痴を伝えること 励ましてもらうこと そのときの自分の気持ちを理解してもらうこと
コンサマトリーの コミュニケーション	おしゃべりなどをする事 体験した出来事について伝えること 今何をしているのかといった現状報告

2-4. 実施方法

講義中に集団で施行し、その場で回答・回収を行った。また、調査は無記名とした。倫理的配慮について説明し、同意を得た者のみ回答を求めた。最終的に、回答に不備のあった者、2-2) 友人との親密度に関する項目において、1~3 に回答をしていた者を除いた 249 名（男性 131 名、女性 118 名、平均年齢 19.1 歳、 $SD=1.31$ ）を分析の対象とした。なお、携帯電話に登録している友人数、友人関係満足感に関しては、第 6 章第 1 節において扱う。

3. 結果

3-1. 記述統計

各尺度の平均値、標準偏差および α 係数を Table 7.2 に示す。外的のみ $\alpha = .62$ と α 係数があまり高くなかったが、それ以外の変数においては $\alpha = .70 \sim .93$ と比較的高い α 係数であった。それぞれについて平均得点を分析に使用した。なお、内発、対面でのコンサマトリーのコミュニケーションに関しては、天井効果のため分析から除外した。

Table 7.2 各尺度の平均値、標準偏差および α 係数

		平均値	標準偏差	α 係数
友人関係における 動機づけ尺度	内発	4.44	.55	.81
	同一化	4.05	.66	.74
	取り入れ	3.01	.86	.70
	外的※	1.83	.74	.62
対面	課題的コミュニケーション	3.90	.97	.85
	情緒的コミュニケーション	3.99	.97	.82
	コンサマトリーのコミュニケーション	4.35	.72	.73
携帯(通話)	課題的コミュニケーション	2.85	1.29	.90
	情緒的コミュニケーション	2.90	1.41	.93
	コンサマトリーのコミュニケーション	3.18	1.40	.91
携帯(メール)	課題的コミュニケーション	3.04	1.16	.87
	情緒的コミュニケーション	3.04	1.22	.84
	コンサマトリーのコミュニケーション	3.39	1.19	.83

※4項目中、「友人の方から話しかけてくるから」を除いた3項目

3-2. 友人関係における動機づけとコミュニケーションとの関連（相関分析）

友人関係における動機づけとコミュニケーション・メディア（対面，携帯(通話)，携帯(メール)）ごとのコミュニケーション内容（課題的，情緒的，コンサマトリーの）との相関係数（男女別）を Table 7.3 に示す。

まずは，男性の結果について述べる。対面コミュニケーションに関して，同一化と課題的コミュニケーション ($r = .31, p < .001$)，情緒的コミュニケーション ($r = .40, p < .001$) の間に正の相関が見られた。次に，携帯（通話）コミュニケーションに関して，同一化と課題的コミュニケーション ($r = .23, p < .05$)，情緒的コミュニケーション ($r = .18, p < .05$) との間に正の相関が見られた。そして，携帯（メール）コミュニケーションに関しては，動機づけとの関連は見られなかった。

次に，女性の結果について述べる。対面コミュニケーションに関して，同一化と課題的コミュニケーション ($r = .33, p < .001$)，情緒的コミュニケーション ($r = .28, p < .01$) の間に正の相関が見られた。次に，携帯（通話）コミュニケーションに関して，同一化と課題的コミュニケーション ($r = .26, p < .01$)，情緒的コミュニケーション ($r = .19, p < .05$)，コンサマトリーのコミュニケーション ($r = .19, p < .05$) との間に正の相関，取り入れと課題的コミュニケーション ($r = .18, p < .05$) との間に正の相関が見られた。そして，携帯（メ

ール) コミュニケーションに関しては、取り入れと課題的コミュニケーション ($r = .22, p < .05$) との間に正の相関が見られた。

Table 7.3 友人関係における動機づけ尺度とコミュニケーションとの関連 (相関分析)

			同一化	取り入れ	外的
対面	課題的コミュニケーション	男性	.31 ***	.11	-.04
		女性	.33 ***	.15	.03
	情緒的コミュニケーション	男性	.40 ***	.15	.03
		女性	.28 **	.08	-.05
携帯 (通話)	課題的コミュニケーション	男性	.23 *	-.02	.01
		女性	.26 **	.18 *	-.02
	情緒的コミュニケーション	男性	.18 *	-.08	-.04
		女性	.19 *	.09	-.08
	コンサマトリーのコミュニケーション	男性	.14	-.09	-.05
		女性	.19 *	.11	-.01
携帯 (メール)	課題的コミュニケーション	男性	.07	-.02	.05
		女性	.13	.22 *	.04
	情緒的コミュニケーション	男性	.13	.05	.06
		女性	.11	.12	-.01
	コンサマトリーのコミュニケーション	男性	.08	.00	.00
		女性	.01	.10	.06

* $p < .05$, ** $p < .01$, *** $p < .001$

3-3. 友人関係における動機づけとコミュニケーションとの関連 (重回帰分析)

友人関係における動機づけがコミュニケーション・メディア (対面, 携帯(通話), 携帯(メール)) ごとのコミュニケーション内容 (課題的, 情緒的, コンサマトリーの) に与える影響を検討するために、友人関係における動機づけ尺度を説明変数、コミュニケーション・メディア (対面, 携帯(通話), 携帯(メール)) ごとのコミュニケーション内容 (課題的, 情緒的, コンサマトリーの) を目的変数とした重回帰分析を男女別に行った。

まずは、男性の結果について述べる。対面において、同一化が課題的コミュニケーション ($\beta = .28, p < .01$; $R^2 = .08, p < .01$), 情緒的コミュニケーション ($\beta = .38, p < .001$; $R^2 = .13, p < .001$), コンサマトリーのコミュニケーション ($\beta = .38, p < .001$; $R^2 = .14, p < .001$) に対して有意な正の関連が見られた (Table 7.4)。携帯 (通話) において、同一化が課題的コミュニケーション ($\beta = .28, p < .01$; $R^2 = .05, p < .05$) に対して有意な正の関連が見られた (Table 7.5)。携帯 (メール) において、動機づけとの関連は見られなかった (Table 7.6)。

次に、女性の結果について述べる。対面において、同一化が課題的コミュニケーション

($\beta = .32, p < .01$; $R^2 = .09, p < .01$), 情緒的コミュニケーション ($\beta = .27, p < .01$; $R^2 = .06, p < .05$) に対して有意な正の関連が見られた (Table 7.4)。携帯 (通話) において, 同一化が課題的コミュニケーション ($\beta = .22, p < .05$; $R^2 = .06, p < .05$) に対して有意な正の関連が見られた (Table 7.5)。携帯 (メール) において, 動機づけとの関連は見られなかった (Table 7.6)。

Table 7.4 友人関係における動機づけ尺度と対面コミュニケーションとの関連 (重回帰分析)

		課題的コミュニケーション	情緒的コミュニケーション
同一化	男性	.28 **	.38 ***
	女性	.32 **	.27 **
取り入れ	男性	.10	.06
	女性	.05	.02
外的	男性	-.14	-.06
	女性	.04	-.03
R^2_{adj}	男性	.08 **	.13 ***
	女性	.09 **	.06 *

* $p < .05$, ** $p < .01$, *** $p < .001$

Table 7.5 友人関係における動機づけ尺度と携帯 (通話) コミュニケーションとの関連 (重回帰分析)

		課題的コミュニケーション	情緒的コミュニケーション	コンサマトリ-的コミュニケーション
同一化	男性	.28 **	.24 *	.20 *
	女性	.22 *	.16	.16
取り入れ	男性	-.10	-.16	-.15
	女性	.15	.09	.08
外的	男性	.02	.00	-.01
	女性	-.06	-.10	-.03
R^2_{adj}	男性	.05 *	.03	.04
	女性	.06 *	.02	.02

* $p < .05$, ** $p < .01$

Table 7.6 友人関係における動機づけ尺度と携帯（メール）コミュニケーションとの関連（重回帰分析）

		課題的コミュニケーション	情緒的コミュニケーション	コンサトリーのコミュニケーション
同一化	男性	.09	.15	.07
	女性	.07	.07	-.01
取り入れ	男性	-.11	-.04	-.02
	女性	.22 *	.12	.09
外的	男性	.09	.05	.00
	女性	-.05	-.06	.03
R ² _{adj}	男性	-.01	.00	-.02
	女性	.03	.00	-.02

* $p < .05$

4. 考察

本研究では、友人関係における動機づけと、最も親しい友人とのコミュニケーションとの関連について検討を行った。分析の結果、友人関係における動機づけの中でも自己決定性の高い動機づけである同一化が対面でのコミュニケーション、携帯（通話）での課題的コミュニケーションを促進することが明らかとなった。一方、自己決定性の低い動機づけとの関連は見られなかった。自己決定性の高い動機づけは全般的にすべてのコミュニケーションを促進すると予測していたが、一部の予測のみが支持されたこととなった。性別による違いはほとんど見られなかった。

一方、自己決定性の低い動機づけとの関連が見られなかった理由の一つとしては、想定した友人が考えられる。本研究においては、最も親しい友人とのコミュニケーションについてたずねているために、自己決定性の低い動機づけとの関連が見られなかった可能性がある。自己決定性の低い動機づけとは、「嫌われたくないから一緒にいる」、「相手が怒ったり悲しんだりするから一緒にいる」という動機づけであり、こういった動機づけは、最も親しい友人とのコミュニケーションにおいてはその影響が見られないのかもしれない。また、本研究で扱ったコミュニケーションは、手助けや励まし、おしゃべりなどの相手との親密さを促進するコミュニケーションであり、自己決定性の低い動機づけは、すでに親しい友人との間でのさらに親密さを促進するようなコミュニケーションに影響を与えることはないであろう。今後は、親密さを促進するようなコミュニケーションではなく、親密さを低下させる可能性があるようなコミュニケーションと自己決定性の低い動機づけとの関連を検討していく必要があると考えられる。

第2節 友人関係における動機づけと、対人葛藤時の対処方略との関連 —親密さの程度の高い友人に着目して— (研究8)

1. 目的

本研究の目的は、友人関係における動機づけと親密な友人との葛藤時の対処方略との関連を検討することである。前節において、友人関係における動機づけと、友人との親密さを促進するようなコミュニケーションとの関連を検討した。本節においては、場合によっては友人との親密さを低下させる可能性のあるコミュニケーションである対人葛藤時の対処方略との関連を検討する。

対人葛藤とは、他者との顕在的・潜在的対立を含む社会的状況であり、当事者の葛藤対処方略によって葛藤の結果が左右される（大淵・福島，1997）。これまでの対人葛藤研究において、葛藤対処方略に関する研究は数多く行われてきた（eg., 長峰, 1999; Rahim & Bonama, 1979; Rubin, Pruitt, & Kim, 1994）。加藤（2003）は、Rahim & Bonama（1979）の対人葛藤方略の2次元5スタイルを参考に、対人葛藤方略スタイルを測定する尺度を作成している。この尺度は、自己志向的次元と他者志向的次元の2次元から構成されており、どちらの志向も高い「統合」、自己志向が高く、他者志向が低い「強制」、自己志向が低く、他者志向が高い「自己譲歩」、どちらの志向も低い「回避」、どちらも中程度である「相互妥協」の5スタイルによって葛藤方略を捉えている。また、葛藤解決における社会的動機に着目した研究（大淵・福島, 1997）や、葛藤時の方略と相手への好意度との関連に着目した研究（藤森, 1989）など様々な知見が蓄積されてきている。そして、葛藤時にどのような動機に基づくのかにより対処方略が異なることが明らかになっている。しかし、友人関係における動機づけと対処方略との関連を検討したものはこれまでに見られない。

それでは、友人関係における動機づけと対人葛藤方略との間にはどのような関連が予測されるのだろうか。友人関係における動機づけと対人葛藤方略との関連について加藤（2003）や大淵・福島（1997）などの研究結果を踏まえて考える。他者からの働きかけによって行動が開始される「外的」は、自分からというよりも相手からの働きかけによって続いている関係であるため、関係へのコミットメントは低いと考えられる。そのため、友人との葛藤時には、相手に対して自分の優位な立場を維持することが目標となる可能性が高い。よって、自己志向が高く、他者志向が低くなると考えられ、その結果、「強制」が促進されると予測される。次に、不安や義務の感覚によって行動が開始される「取り入れ」

は、相手からというよりも自分からの働きかけによって続いている関係であるため、関係へのコミットメントが高いと考えられる。そのため、友人との葛藤時には、自分を抑えて、相手からの評価が下がらないようにすることが目標となる可能性が高い。よって、自己志向が低く、他者志向が高くなると考えられ、その結果、「自己譲歩」が促進されると予測される。もしくは、相手からの評価が下がることに対する不安から、相手との対立を避ける方略である「回避」が促進されると予測される。自発的に行動が開始される「内発」や「同一化」は、どちらも自己決定性の高い動機であり、これまでの研究により自己決定性の高い動機は、友人との円滑なコミュニケーションを促進することが明らかとなっている。藤森（1989）は、対人葛藤時に、相互の利益になるような解決策を模索する促進・協調型が、葛藤解決後の不満や相手に対する敵意が最も低いことを明らかにしている。このように考えると、「同一化」や「内発」は、友人との葛藤時に、自己志向、他者志向のどちらも高くなると考えられ、その結果、「統合」または「相互妥協」が促進されると予測される。

2. 方法

2-1. 調査対象者

関東圏の短期大学生および専門学校生、兵庫県内の大学生計 233 名を対象に調査を行った。なお、本研究においては性別と年齢をたずねていない。

2-2. 調査時期

2010年7月に実施した。

2-3. 調査内容

1) 全般的な同性の友人関係に関する項目

1-1) 友人関係における動機づけ：回答者の友人関係全般における動機づけを測定するために、岡田（2005）の友人関係における動機づけ尺度を用いた。この尺度は、「外的」「取り入れ」「同一化」「内発」の4つの下位尺度（各4項目）から成る。「あなたの友人に対する態度全般についてお聞きします。なぜ友人と親しくしたり、一緒に時間を過ごしたりしますか？それぞれの文章についてもっともあてはまる数字に○をつけてください」という教示を行い、「1. あてはまらない」～「5. あてはまる」の5件法で回答を求めた。

2) 特定の同性の友人関係に関する項目

2-1) 親しいと感じている同性友人のイニシャル：親しいと感じている同性の友人を1人思い浮かべさせ、そのイニシャルを記入させた。

2-2) 友人との親密度：2-1)において記入した同性友人との親密さについて、「1. 全く親しくない」～「6. とても親しい」までの6件法で回答を求めた。この項目は、2-1)において記入した友人への親密度が低い対象者を除外するために設けた項目であった。

2-3a) 対人葛藤場面：2-1)において記入した同性友人との間で生じた対人葛藤場面として2つの場面を提示した。対人葛藤場面には自分に責任のある場面、相手に責任のある場面、どちらも責任はないが意見が分かれる場面という3つが考えられる。本研究においては、外発的動機づけとの関連を検討することが主な目的であること、そして回答者の負担を考慮に入れ、自分に責任がある場面を除いた2つの場面を用いることとし、藤森（1989）や加藤（2003）、大淵・福島（1997）の研究を参考に独自で作成した。(1) 旅行の話し合い場面「あなたは、友人と2人で旅行に行く約束をしています。今日は、その旅行の計画を立てるために2人で打ち合わせをしています。打ち合わせを進めていく中で、旅行の計画について友人と意見が合わなくなりました」、(2) 約束の反故場面「あなたは数日前に、友人と一緒に遊びに行く約束をしました。しかし、当日に友人から『他の友人と遊びに行く約束が入ってしまったから行けなくなった』とメールが入ってきました。

2-3b) 対人葛藤方略：加藤（2003）の対人葛藤方略スタイル尺度（20項目）を用いた。この尺度は、「統合スタイル」「回避スタイル」「強制スタイル」「自己譲歩スタイル」「相互妥協スタイル」の5つの下位尺度（各4項目）から成る。それぞれの場面を読ませた後に、「このような状況の時に、あなたはどのような行動をとりますか、あてはまるところに○をつけてください」という教示を行い、「1. あてはまらない」～「4. あてはまる」の4件法で回答を求めた。

2-4) 対人葛藤方略（頻度）：2-1)において記入した同性友人との間で実際に起きたことについてたずねた。これは、場面を想起させるだけでは、実際にどのような対処方略をとっているのかまでは明らかにすることができないため、現実にはどのような対処方略を友人に対して行っているのかについてたずねることとした。「この1年の間に、あなたが次のような行動をとったことはどのくらいありましたか」という教示を行い、加藤（2003）の対人葛藤方略スタイル尺度について、「1. 全くなかった」～「5. 非常にあった」の5件法で回答を求めた。

2-4. 実施方法

上記の質問紙を講義中に集団で施行し、その場で回答を求め、回収を行った。なお、倫理的な配慮として、個人の特特定は行わない旨を伝え、無記名とした。また、強制ではなく、協力するか否かは自由であること、また、回答しないことによる不利益はないこと等を伝えた。同意を得た者のみを対象として実施した。なお、233名のうち、回答に不備のあったもの、そして、同性友人との親密度に関して6件法のうち、3以下であったものを除いた201名を分析の対象とした。

3. 結果

3-1. 記述統計

各尺度の平均値、標準偏差および α 係数をTable 7.7に示す。友人関係における動機づけの内発、対人葛藤場面（約束の反故）における強制スタイルに関して、天井効果およびフロア効果のため分析から除外した。 α 係数に関して、対人葛藤方略の中の相互妥協スタイルのみ2つの場面および頻度において $\alpha = .52, .49, .57$ とあまり高くなかったが、それ以外の変数においては、 $\alpha = .63 \sim .91$ であった。それぞれについて平均得点を分析に使用した。

Table 7.7 各尺度の平均値、標準偏差および α 係数

		平均値	標準偏差	α 係数
友人関係における 動機づけ尺度	内発	4.66	.55	.84
	同一化	4.29	.68	.75
	取り入れ	2.84	.98	.76
	外的	2.00	.69	.63
対人葛藤方略 (場面1)	統合スタイル	3.37	.50	.73
	強制スタイル	1.67	.63	.82
	回避スタイル	2.79	.80	.83
	自己譲歩スタイル (※1)	2.45	.64	.68
	相互妥協スタイル (※2)	2.85	.64	.52
対人葛藤方略 (場面2)	統合スタイル	2.72	.80	.82
	強制スタイル	1.59	.65	.82
	回避スタイル	2.74	.88	.71
	自己譲歩スタイル	2.69	.91	.91
	相互妥協スタイル (※2)	2.26	.68	.49
対人葛藤方略 (頻度)	統合スタイル	3.99	.80	.85
	回避スタイル	3.39	1.11	.85
	強制スタイル	2.21	.90	.83
	自己譲歩スタイル	3.39	.82	.81
	相互妥協スタイル	2.94	.75	.57

※1：4項目中、「友人の要求に従う」を除いた3項目

※2：4項目中、「お互いの意見を水に流すよう主張する」を除いた3項目

3-2. 友人関係における動機づけと他の変数との関連（相関分析）

友人関係における動機づけと対人葛藤方略（2つの場面および頻度）との相関係数を Table 7.8 に示す。分析の結果、同一化は、対人葛藤方略の中でも統合スタイルとの間に関連が見られた。場面1 ($r = .39, p < .001$)、場面2 ($r = .31, p < .001$) との間に正の相関、頻度 ($r = .28, p < .001$)、それぞれにおいて有意な正の相関が見られた。また、同一化と相互妥協スタイルとの間にも関連が見られた。場面1 ($r = .15, p < .05$)、場面2 ($r = .25, p < .001$) との間に正の相関、頻度 ($r = .21, p < .01$)、それぞれにおいて有意な正の相関が見られた。しかしそれ以外の変数との関連は見られなかった。

次に、取り入れは、場面2における自己譲歩スタイル以外、すべての対人葛藤方略と正の相関が認められた ($r_s = .18 \sim .37, p_s < .05 \sim .001$)。そして、外的に関しては、場面1、頻度において強制スタイルと正の相関が見られた ($r_s = .29, .35, p_s < .001$)。また、場面1においては、自己譲歩スタイルと正の相関 ($r = .16, p < .05$)、場面2においては、相互妥協スタイル ($r = .27, p < .001$)、頻度においては、強制スタイル ($r = .29, p < .001$)、回避スタイル

($r = .24, p < .001$), 自己譲歩スタイル ($r = .26, p < .001$), 相互妥協スタイル ($r = .29, p < .001$) との間に正の相関が見られた。

Table 7.8 友人関係における動機づけ尺度と各場面の対人葛藤方略との関連 (相関分析)

		同一化	取り入れ	外的
対人葛藤方略 (場面1)	統合スタイル	.39 ***	.23 ***	.04
	強制スタイル	.07	.22 **	.35 ***
	回避スタイル	.06	.29 ***	.11
	自己譲歩スタイル	.11	.21 **	.16 *
	相互妥協スタイル	.15 *	.26 ***	.09
対人葛藤方略 (場面2)	統合スタイル	.31 ***	.18 *	.12
	回避スタイル	.07	.28 ***	.12
	自己譲歩スタイル	.05	.08	.02
	相互妥協スタイル	.25 ***	.35 ***	.27 ***
対人葛藤方略 (頻度)	統合スタイル	.28 ***	.19 **	.09
	強制スタイル	.10	.19 **	.29 ***
	回避スタイル	.06	.37 ***	.24 ***
	自己譲歩スタイル	.13	.33 ***	.26 ***
	相互妥協スタイル	.21 **	.32 ***	.29 ***

* $p < .05$, ** $p < .01$, *** $p < .001$

3-3. 友人関係における動機づけと他の変数との関連 (重回帰分析)

友人関係における動機づけが対人葛藤方略 (2つの場面および頻度) に与える影響を検討するために、友人関係における動機づけ尺度を説明変数、対人葛藤方略 (2つの場面および頻度) を目的変数とした強制投入法による重回帰分析を行った。なお、対人葛藤方略に関して2つの場面および頻度に関して各スタイル同士の相関が高かったため ($r_s = .38 \sim .68$), 各スタイルの平均値を算出して分析を行った。分析の結果、統合スタイルと、同一化 ($\beta = .37, p < .001$) との正の関連が有意 ($R^2 = .17, p < .001$), 強制スタイルと、外的 ($\beta = .32, p < .001$) の正の関連が有意 ($R^2 = .10, p < .001$), 回避スタイルと、取り入れ ($\beta = .41, p < .001$) との正の関連が有意 ($R^2 = .13, p < .001$), 自己譲歩スタイルと、取り入れ ($\beta = .22, p < .05$) との正の関連が有意 ($R^2 = .06, p < .01$), 相互妥協スタイルと、同一化 ($\beta = .16, p < .05$), 取り入れ ($\beta = .28, p < .01$) との正の関連が有意 ($R^2 = .16, p < .001$) であった (Table 7.9)。

Table 7.9 友人関係における動機づけ尺度と対人葛藤方略との関連（重回帰分析）

	統合 スタイル	強制 スタイル	回避 スタイル	自己譲歩 スタイル	相互妥協 スタイル
同一化	.37 ***	.04	-.06	.04	.16 *
取り入れ	.13	.02	.41 ***	.22 *	.28 **
外的	-.02	.32 ***	-.03	.05	.10
R ² _{adj}	.17 ***	.10 ***	.13 ***	.06 **	.16 ***

* $p < .05$, ** $p < .01$, *** $p < .001$

4. 考察

本研究では、友人関係における動機づけと、親密な友人との葛藤時の対処方略との関連について検討を行った。自己決定性の高い動機づけは、自己と他者双方にとって有益な相互作用を促進するが、自己決定性の低い動機づけは、自己と他者どちらかに対して有益な相互作用を促進するため、結果的に友人との関係にとって望ましくない結果をもたらすことが考えられる。

分析の結果、両者の関連については、おおむね予測通りの結果が得られた。同一化は友人との葛藤時に、互いにとって有益な（少なくとも一方的に得ないし損をしないような）対処方略を行うことが明らかとなった。これは、自己決定性の高い動機づけは友人との積極的なコミュニケーションを促すという先行研究（岡田, 2005）と同様の結果であると考えられる。一方、取り入れは友人との葛藤時に、相手から嫌われないようにする方略、また、互いに妥協する方略を行うことが明らかとなった。取り入れのように、相手への関心を常に優先することが、必ずしも相手からの評価を下げないことにつながるとは限らないが、友人がいないと不安だと考えて友人とのつきあいをしている場合は、友人から嫌われることを避けるために、相手優先の方略もしくは双方がある程度歩み寄りができるような方略を選択するのだろう。また、外的は友人との葛藤時に、自分の意見を一方的に通すような方略を選択することが明らかとなった。外的は、他者からの働きかけによって行動が開始されるものであるため、関係へのコミットメントは低いと考えられる。よって、友人との葛藤時には、相手に対して自分の優位な立場を維持することが目標になりやすく、強制スタイルのような自分の意見を押し付けるような方略を行うと考えられる。

第3節 友人関係における動機づけと、コミュニケーションとの関連

－親密さの程度の低い友人に着目して－（研究9）

1. 目的

研究7および8において、友人関係における動機づけと親密さを促進するようなコミュニケーション、場合によっては友人との親密さを低下させる可能性のあるコミュニケーションとの関連を検討した。ここでは、従来の研究と同様に、親密な友人とのコミュニケーションについて検討を行った。これまでの友人関係に関する研究では、親密な友人関係を対象に検討が行われてきた（e.g., Caldwell & Peplau, 1982; Knapp & Harwood, 1977）。この点は、これまでの友人関係に関する定義が親密さや互惠性によってのみ特徴づけられてきたことに関係する。その中で、あまり親密ではない友人関係は、親密な友人との比較対象として扱われてきており（e.g., 宮崎・池上, 2011; Reader & English, 1947）、そこでの結果にはほとんど着目されてこなかった。

しかし、表面的な友人関係という現代青年の特徴や、友人の数の平均は150人程度である（Hill & Dunbar, 2003）といった知見を考えると、現代青年において、本人が友人であると認識している相手すべてと親密な関係を築いているとは想定しづらい。むしろそこまで親しくない相手とコミュニケーションをとることも十分に考えられる。また、研究1においても、現代青年は、煩わしさや都合の良さによっても友人関係を特徴づけていることが明らかとなっている。だが、友人関係の研究において、そのような相手とどのようなコミュニケーションをとっているのかについての心理学的な検討は、友人との親密度により自己開示量が異なることを明らかにした研究（武田・前田・徳岡・石田, 2012）などがある程度で、あまり行われていない。そこで、本研究では、親密さの程度の低い友人関係を対象にし、友人関係における動機づけと友人とのコミュニケーション（対面および携帯でのコミュニケーション、対人葛藤時の対処方略）との関連を検討する。

それでは、友人関係における動機づけと、対面および携帯コミュニケーション、対人葛藤方略にはどのような関連が予測されるのだろうか。まず、友人関係における動機づけと対面および携帯コミュニケーションとの関連について考える。研究7の結果を見ると、自己決定性の高い動機づけが、対面および携帯（通話）でのコミュニケーションを促進しており、自己決定性の低い動機づけとの関連は見られなかった。本研究では、親密さの程度の低い友人を対象としており、基本的に、親密さの程度の低い友人とは積極的なコミュニ

ケーションを行わないと考えられるため、自己決定性の高い動機づけとの関連は見られないと予測される。一方、自己決定性の低い動機づけの中でも、不安や義務の感覚によって行動が開始される「取り入れ」は、相手から拒否されることを避けて、なるべく多くの友人との関係を維持するための行動を取ると考えられる。そのために、親密さの程度が低い友人との間でもコミュニケーションを促進すると考えられる。もう一つの動機づけである「外的」に関しては、他者からの働きかけによって行動が開始されるものであり、コミュニケーションが抑制されると考えられる。

次に、友人関係における動機づけと対人葛藤方略との関連について考える。研究 8 において、自己決定性の高い動機づけである「同一化」が、統合スタイル、相互妥協スタイルを促進していた。また、自己決定性の低い動機づけである「取り入れ」が、回避スタイル、自己譲歩スタイル、相互妥協スタイルを促進し、「外的」が、強制スタイルを促進していた。親密さの程度の低い友人を対象としているので、自己決定性の高い動機づけとの関連は見られないと考えられる。しかし、対人葛藤方略に関しては、どのような方略を取るのかによってその後の関係性が左右されるものであるため、「取り入れ」に関しては、回避スタイル、自己譲歩スタイル、相互妥協スタイルを促進すると予測される。一方、「外的」に関しては、強制スタイルが促進されると考えられる。

2. 方法

2-1. 調査対象者

関東圏の大学生 94 名および兵庫県の大学生 153 名の計 247 名(男性 130 名,女性 115 名,不明 2 名, 平均年齢 19.8($SD=1.76$)歳)を対象に調査を行った。

2-2. 調査時期

2012 年 7 月に実施した。

2-3. 調査内容

1) 友人関係における動機づけ：回答者の友人関係全般における動機づけを測定するために、岡田(2005)の友人関係における動機づけ尺度を用いた。この尺度は、「外的」「取り入れ」「同一化」「内発」の 4 つの下位尺度(各 4 項目)から成る。「あなたの友人に対する態度全般についてお聞きします。なぜ友人と親しくしたり、一緒に時間を過ごしたりしま

すか？それぞれの文章についてもっともあてはまる数字に○をつけてください」という教示を行い、「1. あてはまらない」～「5. あてはまる」の5件法で回答を求めた。

2) 友人関係満足感：鈴木（2002）の主観的ウェルビーイングの下位尺度である友人関係満足感（6項目）を用いた。「それぞれの項目についてあてはまる数字に1つ○をつけてください」と教示を行い、「1. 全くあてはまらない」～「5. 非常に良くあてはまる」までの5件法で回答を求めた。なお、本節において友人関係満足感は分析に用いない。

3) 親しい同性友人のイニシャル：親しいと感じている同性の友人のイニシャルを思いつく限り記入させた。なお、本節において友人のイニシャルは分析に用いない。

4) 携帯電話の友人数：携帯電話に登録している友人の数（以下、携帯友人数）を記入させた。なお、本節において携帯電話の友人数は分析に用いない。

5) 親密さの程度の低い同性友人のイニシャル：親密さの程度の低い同性友人を1名記入させるために、「親しい同性友人としてイニシャルを記入してはいないが、携帯電話に登録している同性友人を1名思い浮かべて、その人のイニシャルを記入してください」と教示し、記入させた。

6) 友人との親密度：5)において記入した同性友人との親密さについて、「1. 全く親しくない」～「6. とても親しい」までの6件法で回答を求めた。この項目は、3)において記入した友人への親密度が高い対象者を除外するために設けた項目であった。

7) 対人葛藤方略スタイル：5)において記入した同性友人との間で実際に起きたことについてたずねた。「この1年の間に、あなたが次のような行動をとったことはどのくらいありましたか」という教示を行い、加藤（2003）の対人葛藤方略スタイル尺度（20項目）について、「1. 全くなかった」～「5. 非常にあった」の5件法で回答を求めた。

8) 友人とのコミュニケーション内容：5)において記入した同性友人とどのような内容のコミュニケーションを行っているかを測定するために、古谷・坂田（2006）のコミュニケーション尺度を使用した。この尺度は、課題的コミュニケーション（3項目）、情緒的コミュニケーション（3項目）、コンサマトリーのコミュニケーション（3項目）の計9項目から成る。回答の際にはコミュニケーション・メディア（対面、携帯(通話)、携帯(メール))ごとに「友人とどの程度コミュニケーションを行っていると思いますか」とたずね、「1. 全く行っていないと思う」～「5. 非常にしていると思う」の5件法で回答を求めた。

9) フェイスシート：年齢と性別についてたずねた。

2-4. 実施方法

上記の質問紙を講義中に集団で施行し、その場で回答を求め、回収を行った。なお、倫理的な配慮として、個人の特定は行わない旨を伝え、無記名とした。また、強制ではなく、協力するか否かは自由であること、また、回答しないことによる不利益はないこと等を伝えた。同意を得た者のみを対象として実施した。なお、247名のうち、回答に不備のあったもの、年齢が高かったもの、そしてイニシャルを記入した同性友人との親密度に関して6件法のうち、5、6であったものを除いた211名（男性104名、女性106名、不明1名、平均年齢19.6($SD=1.06$)歳)を分析の対象とした。また、親しい同性友人のイニシャル、携帯電話に登録している友人数は、第5章第4節において、友人関係満足感に関しては、第6章第1節において扱う。

3. 結果

3-1. 記述統計

各尺度の平均値、標準偏差および α 係数をTable 7.10に示す。外的のみ $\alpha = .48$ （4項目中1項目除外）と α 係数が低かったが、それ以外の変数においては $\alpha = .77\sim.93$ と比較的高い α 係数であった。それぞれについて平均得点を分析に使用した。なお、友人関係における動機づけの内発、対面での情緒的コミュニケーション、携帯（通話）での課題的コミュニケーション、情緒的コミュニケーション、コンサマトリーのコミュニケーション、携帯（メール）での情緒的コミュニケーションに関しては、天井効果およびフロア効果により分析から除外した。

Table 7.10 各尺度の平均値、標準偏差および α 係数

		平均値	標準偏差	α 係数
友人関係における 動機づけ尺度	内発	4.40	.67	.83
	同一化	4.02	.76	.81
	取り入れ	3.03	.92	.77
	外的※	1.87	.66	.48
対人葛藤方略 スタイル尺度	統合スタイル	2.23	.91	.90
	強制スタイル	1.82	.73	.84
	回避スタイル	2.46	.97	.88
	自己譲歩スタイル	2.25	.84	.83
対面	相互妥協スタイル	2.00	.75	.80
	課題的コミュニケーション	2.17	1.05	.82
	情緒的コミュニケーション	2.03	1.07	.85
携帯（通話）	コンサマトリーのコミュニケーション	2.54	1.13	.80
	課題的コミュニケーション	1.93	1.11	.89
	情緒的コミュニケーション	1.87	1.16	.93
携帯（メール）	コンサマトリーのコミュニケーション	2.15	1.32	.90
	課題的コミュニケーション	2.31	1.25	.87
	情緒的コミュニケーション	2.09	1.26	.92
	コンサマトリーのコミュニケーション	2.41	1.33	.87

※4項目中、「友人の方から話しかけてくるから」を除いた3項目

3-2. 友人関係における動機づけと他の変数との関連（相関分析）

友人関係における動機づけと対人葛藤方略、コミュニケーション・メディア（対面、携帯（メール））ごとのコミュニケーション内容（課題的、コンサマトリーの）との相関係数を Table 7.11 に示す。

まずは、男性の結果について述べる。対人葛藤方略に関して、自己決定性の低い動機づけである取り入れと回避スタイル ($r = .23, p < .05$)、相互妥協スタイル ($r = .21, p < .05$) との間に正の相関が見られた。また、外的と自己譲歩スタイル ($r = .26, p < .05$)、相互妥協スタイル ($r = .22, p < .05$) との間に正の相関が見られた。次に、コミュニケーション・メディアごとのコミュニケーション内容との関連に関しては、自己決定性の高い動機づけである同一化と対面でのコンサマトリーのコミュニケーション ($r = .20, p < .05$) との間に正の相関が見られた。自己決定性の低い動機づけである外的と対面での課題的コミュニケーション ($r = .32, p < .01$)、対面でのコンサマトリーのコミュニケーション ($r = .22, p < .05$)、携帯（メール）での課題的コミュニケーション ($r = .25, p < .05$) との間に正の相関が見られた。それ以外の変数との関連は見られなかった。

次に、女性について述べる。対人葛藤方略に関して、自己決定性の低い動機づけである外的と強制スタイル ($r = .25, p < .05$) との間に正の相関が見られた。次に、コミュニケー

ション・メディアごとのコミュニケーション内容との関連に関しては、自己決定性の低い動機づけである取り入れと対面における課題的コミュニケーション ($r = .23, p < .05$) との間に正の相関が見られた。また、外的と対面における課題的コミュニケーション ($r = .30, p < .01$) との間に正の相関が見られた。それ以外の変数との関連は見られなかった。

Table 7.11 友人関係における動機づけ尺度と各変数との関連（相関分析）

		同一化	取り入れ	外的	
対人葛藤方略 スタイル尺度	統合スタイル	男性	.07	.07	.09
		女性	.03	.02	.08
	強制スタイル	男性	.01	.12	.13
		女性	.02	.18	.25 *
	回避スタイル	男性	.13	.23 *	.12
		女性	-.02	.14	.08
	自己譲歩スタイル	男性	.04	.11	.26 *
		女性	.03	.14	.17
	相互妥協スタイル	男性	.06	.21 *	.22 *
		女性	.08	.16	.15
対面	課題的 コミュニケーション	男性	.07	.11	.32 **
		女性	.03	.23 *	.30 **
	コンサマトリー 的 コミュニケーション	男性	.20 *	.02	.22 *
		女性	.11	.14	.19
携帯（メール）	課題的 コミュニケーション	男性	.07	.09	.25 *
		女性	-.08	.06	.00
	コンサマトリー 的 コミュニケーション	男性	.11	.00	.20
		女性	.00	.07	.04

* $p < .05$, ** $p < .01$

3-3. 友人関係における外発的動機づけと他の変数との関連（重回帰分析）

友人関係における動機づけが対人葛藤方略、コミュニケーション・メディア（対面、携帯(メール)）ごとのコミュニケーション内容（課題的、コンサマトリーの）に与える影響を検討するために、友人関係における動機づけ尺度を説明変数、対人葛藤方略、コミュニケーション・メディア（対面、携帯(メール)）ごとのコミュニケーション内容（課題的、コンサマトリーの）を目的変数とした強制投入法による重回帰分析を行った。分析の結果を Table 7.12, Table 7.13 に示す。

まずは、男性の結果について述べる。対人葛藤方略に関しては、1つのスタイルへの影響が見られた。自己譲歩スタイルに対して、外的 ($\beta = .31, p < .05$) の正の影響が有意傾向で

あった ($R^2 = .04, p < .10$)。コミュニケーション・メディアごとのコミュニケーション内容については、それぞれについて影響が見られた。まず、対面での課題的コミュニケーションに対して、外的 ($\beta = .38, p < .01$) の正の影響が有意であった ($R^2 = .08, p < .05$)。次に、対面でのコンサマトリーのコミュニケーションに対して、同一化 ($\beta = .27, p < .05$) と外的 ($\beta = .36, p < .01$) は正の影響、取り入れ ($\beta = -.25, p < .10$) は負の影響が有意 (取り入れは有意傾向) であった ($R^2 = .09, p < .01$)。また、携帯 (メール) での課題的コミュニケーションに対して、外的 ($\beta = .32, p < .05$) の正の影響が有意傾向であった ($R^2 = .04, p < .10$)。そして、携帯 (メール) でのコンサマトリーのコミュニケーションに対して、同一化 ($\beta = .19, p < .10$) と外的 ($\beta = .36, p < .01$) は正の影響、取り入れ ($\beta = -.28, p < .05$) は負の影響が有意 (同一化は有意傾向) であった ($R^2 = .06, p < .05$)。

次に、女性の結果について述べる。対人葛藤方略に関しては、1つのスタイルへの影響が見られた。強制スタイルに対して、外的 ($\beta = .21, p < .10$) の正の影響が有意傾向であった ($R^2 = .04, p < .10$)。コミュニケーション・メディアごとのコミュニケーション内容については、対面での課題的コミュニケーションに対して、外的 ($\beta = .25, p < .05$) の正の影響が有意であった ($R^2 = .08, p < .05$)。それ以外の関連は見られなかった。

Table 7.12 友人関係における動機づけ尺度と対人葛藤方略との関連 (重回帰分析)

		統合 スタイル	強制 スタイル	回避 スタイル	自己譲歩 スタイル	相互妥協 スタイル
同一化	男性	.08	.01	.08	.06	.06
	女性	.02	-.01	-.03	-.03	.06
取り入れ	男性	.01	.05	.21	-.09	.09
	女性	-.05	.11	.12	.07	.08
外的	男性	.09	.11	.01	.31 *	.18
	女性	.11	.21 †	.05	.15	.11
R^2_{adj}	男性	-.02	-.01	.03	.04 †	.03
	女性	-.02	.04 †	-.01	.01	.01

† $p < .10$, * $p < .05$

Table 7.13 友人関係における動機づけ尺度と対面および携帯コミュニケーションとの関連（重回帰分析）

		対面		携帯（メール）	
		課題的 コミュニケーション	コンサマトリーの コミュニケーション	課題的 コミュニケーション	コンサマトリーの コミュニケーション
同一化	男性	.10	.27 *	.09	.19 †
	女性	-.04	.06	-.12	-.02
取り入れ	男性	-.11	-.25 †	-.12	-.28 *
	女性	.12	.04	.14	.06
外的	男性	.38 **	.36 **	.32 *	.36 **
	女性	.25 *	.18	-.06	.01
R ² _{adj}	男性	.08 *	.09 **	.04 †	.06 *
	女性	.08 *	.02	-.02	-.03

† $p < .10$, * $p < .05$, ** $p < .01$

4. 考察

本研究では、友人関係における動機づけと、親密さの程度の低い友人とのコミュニケーションの関連に焦点を当て、友人関係における動機づけと対人葛藤方略、友人との対面および携帯コミュニケーションとの関連について検討を行った。その結果、全般的に自己決定性の低い動機づけである取り入れや外的との間に関連が認められた。また、性別によって異なる関連が見られた。

4-1. 友人関係における動機づけと対人葛藤方略

本研究では、友人関係における動機づけと対人葛藤時の対処方略との関連を検討した。分析の結果、一部のみ関連が認められた。男性において、外的と自己譲歩スタイルとの間に正の関連が、女性において、外的と強制スタイルとの間に正の関連が見られた。同一化に関しては、予測通り、対人葛藤方略との関連は認められなかった。これは、自己決定性の高い動機づけは友人との積極的なコミュニケーションを促進する（岡田, 2005）という先行研究とは異なる結果である。本研究においては、親密さの程度の低い友人に焦点を当てて検討を行っている。親密さの程度の低い友人とは、本来あまり重要視されない相手であり、積極的なコミュニケーションを取る必要のない相手であると考えられる。そのような相手との間においては自己決定性の高い動機づけの影響は見られないのであろう。

一方、自己決定性の低い動機づけの中でも外的という他者からの働きかけによって行動が開始される動機づけが性別によって異なる影響を与えていた。女性においては、予測通り、強制スタイルとの間に関連が見られたが、男性においては、自己譲歩スタイルとの間に関連が見られた。自己譲歩スタイルとは、「友人の要求に従う」「友人の望みどおりにする」という項目で構成されており、これは、自分よりも相手を優先する方略である。外的

は他者よりも自己を優先することを動機づけやすく、特に、親密さの程度の低い友人に関しては、自己が優先されやすいと考えられる。この動機づけが性別によって正反対の行動に影響を与える点は非常に興味深い。その理由としては、2点考えられる。1点目は、本研究で回答を行った男性にとって、親密さの程度の低い友人というのが、今は親しくはないが、今後親しくなりたいと考えている相手が想起された場合である。その場合には、相手をがっかりさせたり、怒らせたりしないような方略が優先されると考えられる。2点目は、男性は、親密さの程度が低い場合でも、友人に対しては、外的な動機づけが自己を優先させる方向ではなく、他者に合わせる方向に働くという可能性である。この点は今後の検証が必要になると考えられる。

4-2. 友人関係における動機づけと対面および携帯コミュニケーション

本研究では、友人関係における動機づけと友人との対面および携帯コミュニケーションとの関連を検討した。分析の結果、性別によって動機づけとコミュニケーションとの関連が異なることが明らかとなった。男性は、4つのコミュニケーションすべてにおいて関連が見られた。対面および携帯（メール）どちらにおいても、課題的コミュニケーションには外的と正の関連が見られ、コンサマトリーのコミュニケーションには、同一化と外的とは正の関連が、取入れとは負の関連が見られた。一方、女性は、対面での課題的コミュニケーションと外的との正の関連のみが見られ、他の関連は認められなかった。

本研究において扱ったコミュニケーションは、相手との親密さを促進する可能性の高いコミュニケーションであり、親しい友人との間では（研究7）、対面での課題的コミュニケーションに関して、男女とも同一化と正の関連が見られていた。また、携帯（メール）でのコミュニケーションに関しては、男女とも動機づけとの関連が見られなかった。課題的コミュニケーションは、「問題解決のためのアドバイスや情報を伝えてもらうこと」「問題解決のために現実的な手助けや支援をしてもらうこと」といった項目から構成されている。このコミュニケーションは親密さを促進するというよりも、自分自身が有利になるようなコミュニケーションであると考えられ、親密さの程度の低い友人に対しては、外的という他者よりも自己を優先する動機づけが関連していることは十分理解できる。

一方、コンサマトリーのコミュニケーションは、「おしゃべりなどをする」「今何をしているのかといった現状報告」といった項目から構成されており、身近なやり取りを行うことで親密さを促進することにつながる。このコミュニケーションでは、男性において

のみ、同一化と外的が正の関連、取入れが負の関連という結果であった。対人葛藤方略での結果と同様に、男性は、親密さの程度が低い場合でも、友人に対しては、外的な動機づけが自己を優先させる方向ではなく、他者に合わせる方向に働くという可能性があるのかもしれない。しかし、「友人がいないと、後で困るから」「友人がいないと、不安だから」という項目で構成されている取入れと負の関連が見られたことは興味深い。この点に関しては、今後の検討課題であろう。

第4節 第7章のまとめ

本章では、友人関係における動機づけと友人とのコミュニケーションとの関連について検討を行った。その際に、親密さの程度の高い友人と低い友人に分けて検討した。研究7、研究8においては、親密さの程度の高い友人を対象に、友人関係における動機づけとコミュニケーション、対人葛藤方略との関連を、研究9においては、親密さの程度の高い友人を対象に動機づけとコミュニケーション、対人葛藤方略との関連を検討した。その結果、親密な友人の場合、親密さを促進するようなコミュニケーションに関しては、自己決定性の低い動機づけとの関連はほとんど見られず、自己決定性の高い動機づけである同一化が対面や携帯（通話）コミュニケーションを促進することが明らかとなった。しかし、葛藤場面のようなこちらの行動によって相手との親密さが左右される可能性のあるコミュニケーションに関しては、自己決定性の高い動機づけと自己決定性の低い動機づけの両方が異なる影響を与えていた。同一化は、友人との葛藤時に互いにとって有益な対処方略を促進し、取り入れは、相手から嫌われないような方略を促進し、外的は自分の意見を押しつけるような方略が促進することが明らかとなった。

一方、親密さの程度の高い友人の場合、親密さを促進するようなコミュニケーションに関しては、男性の場合、自己決定性の高い動機づけと自己決定性の低い動機づけの両方が対面や携帯（メール）でのコミュニケーションとの間に関連があることが明らかとなった。女性の場合は、自己決定性の低い動機づけと対面でのコミュニケーションとの間に関連が見られた。そして、葛藤場面においては、自己決定性の高い動機づけとの関連は見られず、自己決定性の低い動機づけである外的が、男性においては、相手から嫌われないような方略を、女性においては、自己を優先するような方略を促進することが明らかとなった。

第 3 部 全体の統括

第 3 部では、これまでの内容についてまとめ、本論文の意義や問題点、今後の課題について述べる。第 1 部では、社会調査や社会学、心理学領域の先行研究を元に日本と海外での友人関係の違いや現代青年における友人関係の特徴を捉える上で様々な視点がありうることについて確認した。その上で、第 2 部において、現代青年がどのような他者を友人として捉えているのか、どのような理由により友人とつき合っているのか、友人つき合いが多い人と少ない人に対する対人印象について確認を行った上で、友人関係における様々な視点を包括的に捉える枠組みとして友人関係における動機づけに着目し、友人つき合いの多さ、精神的健康、コミュニケーションという 3 つの側面について検討を行った。

本論文では、従来の内面的な友人関係から表面的な友人関係への変化として友人関係を捉えるのではなく、現代では友人の捉え方が広がっており、それに関連して、友人関係における多様な動機づけ存在するという観点から、現代青年の友人関係の特徴を包括的に捉えることを目的とした。その際に、親密さの程度の高い友人だけでなく、親密さの程度の低い友人とのコミュニケーションについても検討を行った。友人関係は、哲学からドラマまで非常に幅広い分野で扱われてきた。中でも、心理学の領域においては、友人関係を親密さや互惠性によって特徴づけ、友人関係を形成、維持するための要因や、友人関係の意義、現代青年の友人関係の特徴など様々な側面について検討が行われてきた。一方で、友人と深く関わり合うことを避ける傾向や状況によってつき合う友人を切り替える傾向など、必ずしも親密さや互惠性のみで特徴づけることができない友人との関わり方が見出されてきている。また、日本においては、友人が意味する対人関係の範囲が広い（宮本, 2007）という指摘も見られる。

そこで、現代青年は、どのような他者を友人として認識しており、どのような動機で友人とつき合っているのか、そして、友人つき合いの多さが対人印象にどのような影響を与えるのかについて確認を行った。その上で、友人関係における動機づけに着目し、内発的な動機づけだけでなく外発的な動機づけと友人とのつき合いの多さ、精神的健康、親密さの程度の異なる友人とのコミュニケーションとの関連を検討した。本研究により、従来別個に扱われてきた内面的な友人関係と表面的な友人関係を友人関係における動機づけという枠組みにより包括的に捉えることが可能であること、さらに、親密な友人だけではなく親密ではない友人とのコミュニケーションについても検討を行うことの有用性について示すことができたと考えられる。

以下、まとめと意義（第 8 章）、および、本研究の問題点と今後の課題（第 9 章）として

述べることとする。

第 8 章 本実証的研究の知見の要約, 本論文の意義

本章では、本論文において検討した実証的研究の知見についてまとめ、本論文の意義について述べる。そして、本論文において得られた知見と他領域との連携可能性について考えることとする。

第 1 節 本実証的研究のまとめ

本論文においては、まず、現代青年がどのような他者を友人として認識しているのか、どのような理由で友人とつき合っているのか、友人つき合いの多さは対人印象にどのような影響が見られるのかについて確認を行った。その上で、友人関係における多様な動機づけに着目をし、(1) 友人関係における動機づけと友人つき合いの多さ、(2) 友人関係における動機づけと自尊感情、精神的健康との関連、(3) 友人関係における動機づけと友人とのコミュニケーション、という三つの側面について検討することで、現代青年における友人関係の特徴を包括的に捉えることを目的とした。本節では、本論文において検討した実証的研究の知見についてまとめる。

第 1 項 現代青年の友人や友人の数に対するイメージについて

本項では、第 5 章（現代青年の友人や友人の数に対するイメージについての基礎的検討）において得られた知見についてまとめる。第 5 章では、現代青年が友人に対してどのようなイメージを持っているのか、また、どのような動機で友人とつき合っているのか、そして、それらを踏まえ、友人つき合いの数が多い人、少ない人に対してどのようなイメージを持っているのかについて検討を行った。

まず、研究 1 において、現代青年が友人関係をどのように捉え、どのような動機により友人関係を形成・維持しているのかについて基礎的なデータを収集した。分析の結果、どのような相手を友人として認識しているのかについては、従来の定義で強調されてきた相互援助や楽しさというものだけでなく、打算的であったり、ネガティブな側面を持つものであることが明らかとなった。また、友人とつき合う動機は、必ずしも楽しいからという内発的なものだけではなく、外発的なものも存在することが明らかとなった。研究 1 により、従来の研究において扱われてきた友人関係の定義（親密さや楽しさ、相互援助）では、現代青年の友人関係の特徴を一部しか把握できない可能性が見出された。よって、本論文

においては、現代青年の友人を「楽しさ、かけがえのなさ、煩わしさ、都合の良さなど様々な要素で特徴づけられた同性、同世代の他者」として捉え、検討を行うこととした。

研究 2 では、研究 1 の結果を踏まえ、現代青年は、友人の数が多く、少ない人に対してどのようなイメージを持っているのかについて自由記述にて収集した。その結果、パーソナリティの 5 因子モデルの外向性、調和性、誠実性に対応した記述が多く挙げられていた。友人の数が多く人のイメージは、「明るい」「信頼できる」「思いやりがある」というような、外向性、調和性、誠実性の高さに対応しており、友人の数が少ない人のイメージは、「暗い」「人見知り」「自己中心的」というような、外向性、調和性、誠実性の低さに対応しているようであった。

研究 3 では、質問紙実験を用い、友人の数が対人印象（好意度）に与える影響について検討を行った。その結果、現代青年は、友人の数が多く人に対して、個人的親しみやすさ、社会的望ましさ、力動性が高いと判断しており、一方、友人の数が少ない人に対して、個人的親しみやすさ、社会的望ましさ、力動性が低いと判断していることが明らかとなった。研究 3 において用いられた人物の紹介文は、友人の数に関する記述以外では、学校に積極的に関わり、授業態度も真面目であるという印象を喚起するような紹介文であったため、印象としては良いと判断されやすいと考えられる。そこに、友人の数が多くという記述が加わることで、人物の評価がさらに高まっていた。しかし、友人の数が少ないという記述が加わると、良いと判断される可能性の高い印象はあまり見られなくなり、全体的に印象が低くなることが明らかになった。

研究 4 では、研究 3 と同様に質問紙実験を用い、友人の数が対人印象（他者の行動推測）に与える影響について検討を行った。その際に、友人との対人葛藤場面を用いてそこでの行動を推測させた。その結果、友人の数が多く人は、少ない人と比べて、共同作業時の意見対立において、自分の主張を一方的に通すような行動をあまり取らないと推測されることが示された。研究 4 で提示した場面は、課題の出来により成績が決定するという大学生にとっては重要度の高い状況であると考えられる。そのような状況において、友人の多い人は、自分の意見を通そうとする強制スタイルをあまり取らないのではないかと推測されていた。本結果は、これまでの研究において見出されていた友人が多い人の印象（外向性や調和性の高さ）を反映している可能性がある。しかし、それ以外の有意な結果は見られなかった。

研究 1~4 の結果、現代青年は、従来の友人関係研究において扱われてきた友人関係の定

義よりも多様な他者を友人として捉えていること、そして、多様な動機によって友人とつき合っていることが明らかとなった。また、友人つき合いの多さや少なさが対人印象にある程度影響を及ぼすことが明らかとなった。現代青年の間では、学校の成績よりもコミュニケーションに関する能力が評価される（斎藤, 2005）ために、他者とのコミュニケーションを円滑に行うことが重要であると考えられる。そうであるならば、友人を多く持つことが、他者に対して自分にコミュニケーション能力があることを示すための一つの判断材料になる可能性があり、他者からの評価が高くなれば、結果的に今後より有益な相手との関係を形成できる可能性も高まるだろう。自分がどのような人物であるのかという印象は、他者にとって「その相手とどのように接するのが望ましいか」を判断する手がかりとなり、その結果、日々の生活に多くの影響を与えられられる。社会生活は、日々、他者が抱くイメージにより影響を受けており、他者に対して抱くイメージが関係の本質を形成する（Ickes & Duck, 2004）。よって、他者からどのような印象を持たれているのかは、重要な問題であり、現代青年にとって、友人つき合いの多さは、従来の研究で明らかにされてきたようなソーシャル・サポート源として自己の精神的健康に有益であると同時に、他者が自己に対して良い印象を形成する要因にもなり得ることが示された。

第2項 友人関係における動機づけと友人つき合いの多さ、精神的健康との関連

本項では、第6章（友人関係における動機づけと友人つき合いの多さ、精神的健康との関連）において得られた知見についてまとめる。第5章では、現代青年がどのような相手を友人として捉えているのか、どのような動機づけで友人とつき合っているのか、そして、友人つき合いの多い人や少ない人に対してどのようなイメージを持っているのかについて検証を行った。その結果、親密さだけではなく煩わしさや都合の良さによっても友人関係は特徴づけられており、様々な動機づけによって友人とつき合っていることが明らかとなった。そして、友人つき合いの多さは、他者からの評価を高め、友人つき合いの少なさは他者からの評価を低める可能性があることが明らかとなった。

第6章では、友人関係における動機づけと友人つき合いの多さ、精神的健康について検討を行った。なお、その際に友人関係における性差に着目して、性別ごとの検討を行った。研究5では、友人関係における動機づけと友人つき合いの多さ（親しい同性友人のイニシャル数、携帯電話に登録している友人数）および友人関係満足感との関連について検討を行った。その結果、男性において、自己決定性の高い動機づけである「同一化」は携帯電

話に登録している友人数，友人関係満足感を促進すること，自己決定性の低い動機づけである「取り入れ」は友人関係満足感を抑制することが明らかとなった。そして，女性において，自己決定性の高い動機づけである「同一化」は，親しい友人の数，携帯電話に登録している友人数，友人関係満足感を促進すること，自己決定性の低い動機づけである「取り入れ」は，携帯電話に登録している友人数，友人関係満足感を抑制すること，「外的」が，友人関係満足感を抑制することが明らかとなった。

研究 6 では，友人関係における動機づけと自尊感情，生活満足感との関連について検討を行った。その結果，男性，女性ともに，自己決定性の高い動機づけである「同一化」が，全般的な生活満足感，学校生活満足感を促進していた。自尊感情に関しては，動機づけの関連が認められなかった。

研究 5～6 の結果，自己決定性の高い動機づけと付き合いの多さ，友人関係満足感，精神的健康との間には正の関連が見られ，自己決定性の低い動機づけと友人付き合いの多さ，友人関係満足感との間には負の関連が見られた。しかし，精神的健康との関連は見られなかった。自己決定性の高い動機づけは，精神的健康を促進するが，自己決定性の低い動機づけが必ずしも精神的健康を抑制することはないということが明らかとなった。

第 3 項 友人関係における動機づけと友人とのコミュニケーションとの関連

第 7 章では，友人関係における動機づけと友人とのコミュニケーション（対面および携帯コミュニケーション，対人葛藤時の葛藤方略）との関連について検討を行った。その際に，親密さの程度の高い友人と親密さの程度の高い友人を対象として検討した。

研究 7～8 では，最も親しい友人に焦点を当てて検討した。研究 7 は，友人関係における動機づけと対面および携帯でのコミュニケーションとの関連について検討した。その結果，男性，女性ともに，自己決定性の高い動機づけである「同一化」が対面，携帯（通話）での課題的コミュニケーション，対面での情緒的コミュニケーションを促進することが明らかとなった。それ以外との関連は見られなかった。また，自己決定性の低い動機づけとの関連は見られなかった。

研究 8 では，友人関係における動機づけと対人葛藤時の対処方略との関連について検討を行った。その結果，自己決定性の高い動機づけである「同一化」が統合スタイル，相互妥協スタイルを促進することが明らかとなった。そして，自己決定性の低い動機づけである「取り入れ」が回避スタイル，自己譲歩スタイル，相互妥協スタイルを，「外的」が強制

スタイルを促進することが明らかとなった。

研究 9 では、親密さの程度の低い友人に焦点を当てて、友人関係における動機づけと対面および携帯でのコミュニケーション、対人葛藤時の対処方略との関連について検討を行った。その結果、男性において、自己決定性の高い動機づけである「同一化」が、対面、携帯（メール）でのコンサマトリーのコミュニケーションを促進することが明らかとなった。また、自己決定性の低い動機づけである「取り入れ」が、対面、携帯（メール）でのコンサマトリーのコミュニケーションを抑制すること、「外的」が、対面、携帯（メール）での課題的コミュニケーション、コンサマトリーのコミュニケーションを促進することが明らかとなった。また、「外的」が、自己譲歩スタイルを促進することが明らかとなった。女性において、自己決定性の低い動機づけである「外的」が対面での課題的コミュニケーションを促進することが明らかとなった。また、「外的」が、強制スタイルを促進することが明らかとなった。それ以外との関連は見られなかった。

研究 7~9 の結果、友人関係における動機づけと友人とのコミュニケーションとの関連は性別によって違いが見られること、自己決定性の高い動機づけだけではなく、自己決定性の低い動機づけの影響が見られることが明らかとなった。このように、自己決定性の低い動機の中でも、友人に対する行動が異なることは注目に値する。これまで、友人関係における動機づけは、自己決定性の高い動機づけを中心に検討がなされてきており、自己決定性の低い動機づけに着目されることは少なかった。また、親密な友人とのコミュニケーションに関する知見と比べて親密ではない友人とのコミュニケーションについては扱われることが少なかったといえる。その中で、本研究においては、自己決定性の高い動機づけと自己決定性の低い動機づけでは友人とのコミュニケーションに違いが見られること、そして、友人との親密さによっても、動機づけとコミュニケーションの関連が異なることを明らかにした点に意義があると考えられる。さらに、対人葛藤対処方略に関する研究においては、これまで相手との関係性や責任の有無といったことに着目されてきたが (e.g., Laursen & Collins, 1994), 本研究の結果、相手との関係性だけではなく、本人が持つ友人関係についての動機づけにも着目する必要があることを示したと言えるだろう。

第 4 項 本研究において見られた性差について

友人関係の研究においてはこれまでに数多くの性差が見出されてきている (e.g., 榎本, 1999,2001; 福岡・橋本, 1995,1997; 石田, 1998; 松岡・加藤・神戸・澤本・菅野・詫間・野瀬・

森, 2006; 三島, 2003,2008; 長沼・落合, 1998; 中村, 1990; 岡田, 1993; 岡本・上地, 1999; 柴橋, 2001,2004; 下斗米, 2000; 和田, 1993,1996, 2001)。たとえば, 和田 (1993) は, 大学生に友人関係に望むものをたずねている。その結果, 男性は女性よりも友人に対して一緒に行動すること (共行動) を望んでおり, 女性は男性よりも当人の情報を開示すること (自己開示) を望んでいた。また, 榎本 (1999) は, 友人と行う活動と友人への感情をたずねている。その結果, 互いの相違点を認め合い, 価値観や将来の生き方を話しあう「相互理解活動」, 仲が良いことを確認するような「親密確認行動」, 自分たちだけの絆を作り出す「閉鎖的活動」に関して, 女性は男性よりも多く行っていた。一方, 男性は, 友人と遊ぶことを中心とした「共行動」を女性よりも多く行っていた。さらに, 男性は未知の他者や疎遠な他者にも援助し, 女性は家族や親密な関係で援助を行う傾向にあること, 多くの研究で, 男性が浅く広い関係を持つとしようとする一方, 女性が狭く親密な関係を持つとしようとするのが明らかとなっている (Baumeister, 2011)。他にも, 男性より女性の方が友人から情緒的サポートを多く受けているといった結果 (福岡・橋本, 1995) や, 過去のいじめ経験に関して, 男子よりも女子の方が仲の良い同性の友達からいじめられた経験があるという結果 (三島, 2003,2008) が見出されている。これらの研究を見ると, 全体的に男性よりも女性の方が友人に対して親密さを求める傾向が強く, 友人から多くのサポートを得ているといえる。しかし, その分, 自分の所属している関係に依存する傾向が強く, 友人から拒絶されることに対するネガティブな影響が強いと考えられる。

本研究においても, いくつもの性差が見られた。中でも, 親密さの程度の低い友人との対人葛藤場面における対人葛藤方略において, 男性は, 自己決定性の低い動機づけである「外的」と自己譲歩スタイルとの間に正の関連が見られた。一方, 女性は, 「外的」と強制スタイルとの間に正の関連が見られた。自己譲歩スタイルは, 友人の要求や望みを叶える方略であり, 強制スタイルは, 自分の要求を通す方略である。男女により, 正反対の方略との関連が見られた点は, 男性が浅く広い関係を, 女性は狭く親密な関係を形成しがちであるというこれまでの性差から理解可能であろう。同じ自己決定性の低い動機づけにおいて, 親密さの違いによって正反対の結果が見られた点は興味深い知見であると考えられる。

次に, 親密さの程度の低い友人との対面および携帯 (メール) でのコミュニケーションにおいて, 女性はほとんど関連が見られず, 男性は, 自己決定性の高い動機づけである「同一化」がコンサマトリーのコミュニケーションと正の関連, 自己決定性の低い動機づけである「取り入れ」がコンサマトリーのコミュニケーションと負の関連, 「外的」が課題的コ

コミュニケーション、コンサマトリーのコミュニケーションと正の関連が見られた。課題的コミュニケーションは、問題解決のための道具的サポートであり、コンサマトリーのコミュニケーションはおしゃべりや現状報告のような情緒的サポートである。このように自己決定性の高い動機づけだけではなく、自己決定性の低い動機づけが性別によって友人とのコミュニケーションに与える影響が異なることは新たな知見であると考えられる。

Table 8.1 本実証研究についてのまとめ (第6章)

		男性	同一化	取り入れ	外的
友人 つき 合いの 多さ	親しい友人のイニシャル	男性			
		女性	+		
	携帯電話に 登録している友人数	男性	+		
		女性	+	-	
精 神 的 健 康	自尊感情	男性			
		女性			
	生活満足感	男性	+		
		女性	+		
	学校生活充実感	男性	+		
		女性	+		
	友人関係満足感	男性	+		-
		女性	+		-

「+」は、正の関連が見られたことを、「-」は、負の関連が見られたことを示す。

Table 8.2 本実証研究についてのまとめ (第7章)

想定した友人の親密さの程度		同一化		取り入れ		外的	
		親密さ 低	親密さ 高	親密さ 低	親密さ 高	親密さ 低	親密さ 高
対人葛藤 方略※1	統合スタイル	男性					
		女性		+			
	強制スタイル	男性					
		女性					+
	回避スタイル	男性				+	
		女性					
	自己譲歩スタイル	男性					+
		女性				+	
	相互妥協スタイル	男性		+		+	
		女性					
対面	課題的コミュニケーション	男性		+			+
		女性		+			+
	情緒的コミュニケーション	男性	※2	※2	※2		※2
		女性	※2	※2	※2		※2
	コンサトリー的コミュニケーション	男性	+	+	-		+
		女性		+			
(通携 話帯)	課題的コミュニケーション	男性	※2	+	※2		※2
		女性	※2	+	※2		※2
	情緒的コミュニケーション	男性	※2		※2		※2
		女性	※2		※2		※2
	コンサトリー的コミュニケーション	男性	※2		※2		※2
		女性	※2		※2		※2
(メ ール 携 帯)	課題的コミュニケーション	男性					+
		女性					
	情緒的コミュニケーション	男性	※2		※2		※2
		女性	※2		※2		※2
	コンサトリー的コミュニケーション	男性	+		-		+
		女性					

※1 親密さの程度高の対人葛藤方略に関しては、男女を合わせて分析を行っている。

※2 天井効果およびフロア効果により分析から除外したため、分析を行っていない。

第2節 友人関係研究と他領域との連携の可能性

本節においては、本研究において得られた知見の他領域への応用および連携の可能性について考える。本研究においては、現代青年の友人関係の特徴を包括的に明らかにすることを目的とし、これまでの友人関係研究において着目されることの多かった内発的な動機づけに基づく友人との付き合い方のみではなく、外発的な動機づけに基づく友人との付き合い方についても着目した。さらに、親密な友人とのコミュニケーションに加えて、親密さの程度の低い友人とのコミュニケーションについても検討を行った。その結果、友人の多い人少ない人によって他者からの印象が異なること、動機づけの違いによって友人付き合いの多さ、コミュニケーション、精神的健康が異なることが明らかとなった。

本研究において得られた知見と他領域への応用や連携としては、学校現場への応用が考えられる。中でも、学校現場において行われる社会的スキルトレーニングや教育プログラムへの応用や連携が可能であろう。児童や生徒の学校適応や心身の健康を守るための社会的スキルトレーニングや様々な教育プログラムは、学級単位やクラス単位での取り組みがいくつも見られ、それらの多くにおいて、一定以上の効果が認められている（たとえば、安藤, 2010 ; 藤枝・相川, 2001 ; 本田・大島・新井, 2009 ; 山崎・佐々木・内田, 2013）。学校ベースでのプログラムは提供する人や取り巻く環境が重要であることが言われており（Lochman, Powell, Boxmeyer, Qu, Wells, & Windle, 2009）、山崎ら（2013）においても、教育プログラム実施時の小グループ活動の重要性を指摘されている。児童期や青年期における友人関係の重要性はこれまでも多くの研究で明らかにされてきていることを考えると（Cirino & Beck, 1991; Coleman, 1980）、小学校や中学校という環境において様々なトレーニングやプログラムを実施する際には、クラス内での友人関係という要因は非常に大きいと考えられる。

友人とは、親密な他者として位置づけられていたために、これまでは友人関係におけるプラスの側面が注目されることが多かった。そのために、集団で行うトレーニングやプログラムにおいても友人とのポジティブな相互作用により期待される効果に目が向けられがちであったと考えられる。しかし、本研究において示されたように、人は様々な動機づけに基づいて友人との関係を形成、維持しており、内発的動機づけに基づいた友人関係だけではなく、外発的動機づけに基づいた友人関係も存在し、そこでのコミュニケーションは当人にとって必ずしも望ましいものではない可能性がある。また、性別によって動機づけと友人とのコミュニケーションが異なることも明らかとなった。この点を考えると、ある

一つのクラス内においても、様々な動機づけに基づいて友人とのコミュニケーションをとっていると考えられ、その点を考慮に入れることで、より、各自に適したトレーニングやプログラムの効果を得ることができるのではないだろうか。たとえば、集団で行うトレーニングやプログラムにおいて、グループメンバーを構成する際に、どのような組み合わせが適切であるのかについて、当人の持つ動機づけや性別を考慮することで、グループ内でのコミュニケーションを促進させ、その結果、トレーニングやプログラムの効果を向上させることが可能となるかもしれない。

また、仲間からの圧力 (peer pressure) が児童や生徒の行動に与える影響の大きさも指摘されている (Brown, Clasen, & Eicher, 1986)。学校におけるクラスという小さな集団においては、仲間からの圧力は強いと考えられ、本研究において扱ってきた外発的な動機づけに基づく友人とのつき合い方とも密接な関連があると考えられる。このような友人関係におけるネガティブな影響を学校現場において行われている様々なプログラムに反映することは重要であろう。本研究においては大学生を対象として研究を行ってきたため、小学校や中学校で行われている取り組みへ本研究での知見をダイレクトに結びつけることは難しいとも思われるが、本研究において扱ってきた友人関係における外発的な動機づけや親密さの程度の低い友人といった視点を小学生や中学生を対象に検討していくことで、学校現場への応用が可能になってくると考えられる。

第9章 本論文の問題点と今後の課題

第9章では、本論文の問題点と今後の課題について述べることにする。本論文においては、友人関係における動機づけという枠組みを用いることで、従来の友人関係研究における内面的な友人関係から表面的な友人関係への変化という捉え方ではなく、友人関係のレパートリーとして両者を同時に扱うことができることを示した。そして、親密な友人だけではなく、親密さの程度の低い友人とのコミュニケーションについても焦点を当てることを試みた。その結果、これまでの友人関係研究においては明らかにされてこなかった特徴のいくつかを明らかにすることができたと考えられる。しかし、本論文においてはいくつかの問題点が存在する。そこで、本章ではその問題点と今後の課題について、いくつかの観点から記述する。

第1節 年代について

本研究においては、大学生や専門学校生を対象に調査を行った。しかし、序論においても述べたように、友人関係は子どもから大人までどの世代にも存在し、重要な関係性の一つとして存在している。そして、年代によって友人とのつきあい方や動機づけが異なることは十分に考えられる。たとえば、小学校や中学校、高校における友人関係について考えてみると、クラス内での友人関係においては、クラスという集団が固定されているために、一度作った関係性を容易に変えることは難しい関係流動性の低い状況にあると考えられる。関係流動性とは、ある社会的な状況の中で人々が持つ必要な時に新しい関係性を選択するための機会の量のことである（Yuki, Schug, Horikawa, Takemura, Sato, Yokota, & Kamaya, 2007）。そのような状況は、クラスが固定されていない大学での友人関係とは異なり、友人関係における動機づけと友人とのコミュニケーションとの関連も異なってくる可能性がある。藤井・亀島・高岸（2010）は、最後通告ゲームを用いた実験において、不公平な扱いを受けた際にネガティブな感情を表出する人は、関係流動性が低いことを明らかにしている。この研究では、関係流動性という状況要因が行動を規定することを示していると考えられる。

また、第1部において述べたように、日本におけるこれまでの友人関係に関する研究では、成人や高齢者を対象とした研究はあまり見られない。たとえば、丹野（2010）は、友人関係を2種類（ふだんからよく会う接触頻度の高い親密な友人、めったに会えない接触

頻度は低いが親密な友人)に分け、友人関係が高齢者の QOL に及ぼす効果について検討している。その結果、どちらの友人関係においても日常の安心感や人生の受容に良い影響を与えていることが明らかとなっている。また、山岡・松永(2013)は、高齢者の友人関係機能、友人関係満足度と主観的幸福感との関連を検討し、高齢者の友人関係においては「相互理解やサポート」が友人関係を促進し、その結果、主観的幸福感を高めることを明らかにしている。現在の日本は、平均寿命の増加や高齢化社会という状況であり、高齢者の人々の精神的健康という視点からも高齢者における友人関係の検討は重要になると考えられる。

以上のように、大学生以外の年代の友人関係についての検討を蓄積していくことが今後の友人関係研究の発展にもつながっていくものと考えられる。

第2節 研究法について

本研究では、全ての研究を質問紙調査で行っており、さらに、横断的なデータによって結論を導き出しているという方法論上の限界がある。質問紙調査において友人関係における現象を検証することにも一定の意義があるとは考えられるが、質問紙調査だけではなく、実験場面を用いた検証や、観察、または、ペアデータ、縦断的データなど様々な方法を用いて友人関係における動機づけと友人とのコミュニケーションとの関連について検討することが結果の妥当性を高めるための方法であると考えられる。

また、友人関係における動機づけ尺度の「内発」、対面における情緒的コミュニケーション、携帯(通話)における課題的、情緒的、コンサマトリーのコミュニケーション、携帯(メール)における情緒的コミュニケーションに関して、天井効果およびフロア効果が見られたため分析から除外することとなった。その結果、知見としては明らかにし切れていない部分が多かった。本研究において使用した尺度の妥当性も考慮に入れながら、さらに知見を蓄積していくことが重要であろう。

第3節 友人関係における動機づけの発達的な変化について

本研究では、友人関係における動機づけである「内発」「同一化」「取り入れ」「外的」を独立に扱い、それぞれと友人とのコミュニケーションについて検討を行ってきた。しかし、発達に伴い、これらの動機づけは外発的なものから内発的なものへ変化していくことは十分に想定される。また、本研究では親密さの程度の高い友人と低い友人とのコミュニケーションについて検討を行ったが、関係の進展に伴ってその友人との間における動機づけが

変化することもあり得るであろう。

友人関係における発達の見点としては、たとえば、落合・佐藤（1996）は、青年期における友人とのつきあい方の発達のな変化について検討を行っている。その結果、青年期のはじめには、浅く広くかかわるつきあい方が多くみられるが、年齢を増すにつれて少なくなっていくこと、反対に、深く狭くかかわるつきあい方が、年齢を増すにつれて多くなっていくことを明らかにしている。

本論文においては、友人関係の変化という立場ではなく、友人関係のレパートリーという立場に立ち、友人関係における動機づけを独立したものとして扱ってきたが、友人関係の動機づけの発達という観点から友人とのコミュニケーションを検討することも必要になるであろう。

第4節 友人関係におけるコミュニケーションについて

本研究では、友人とのコミュニケーションとして、対面および携帯電話でのコミュニケーション（課題的、情緒的、コンサマトリーの）と対人葛藤時の対人葛藤方略について検討を行ってきた。しかし、コミュニケーションには他にも様々なものが存在している。たとえば、対人コミュニケーションの研究においては、言語的コミュニケーションと非言語的コミュニケーションの研究が数多く行われてきている。非言語的コミュニケーションとは、非言語行動（知覚することのできる、言語的ではない行動）を通じて行う思考や感情の伝達と理解であり、社会生活を営む上で重要な役割を果たしている（Ambady & Weisbuch, 2010）非言語的コミュニケーションに関しては、視線の機能、表情表出、表情解読などについて実験的に検討しているものが見られる（小川, 2011）。遠藤（2008）は、視線や表情は送り手の意図や心的状態を言葉以上に正確に伝えると指摘しており、これらと友人関係における動機づけや友人関係における親密さとの関連を検討することは、意味のあることであると考えられる。

第5節 オンライン上の友人について

本研究では、友人関係における動機づけと友人つき合いの多さ、精神的健康、友人とのコミュニケーションとの関わりを検討することで現代青年の友人関係の特徴を明らかにすることを試みた。そこでは、携帯電話を所有している20代の9割以上が携帯メールを使用していること（Miyata et al., 2003）、中学生、高校生の3割以上が一日20回以上のメール発

信を行っていること（内閣府, 2007）といった、現代青年のメディア利用の現状を踏まえ対面でのコミュニケーションのみならず、携帯電話を介したコミュニケーションについても焦点を当ててきた。しかし、これはコミュニケーションのツールが増えてはいるが、あくまでも対面でのコミュニケーションが主である友人を想定して検討を行っており、インターネット上でのコミュニケーションが主である友人関係については本研究では焦点を当てていない。

近年、インターネット上でのオンラインコミュニケーションが多く行われるようになっていっている。Facebook や mixi といった SNS³は、青年にとって非常に身近なものであり、デジタルネイティブ（小さな頃からパソコンやインターネットといった多様なメディアを活用し、デジタルテクノロジーに慣れ親しんでいる人たち）と呼ばれる世代が台頭してきている（Tapscott, 2009）。このような世代は、インターネット上で様々な人と知り合うことにあまり抵抗を持つことがないと考えられる。たとえば、政木（2013）の調査では、中学生の 17%、高校生の 32%が、インターネット上だけのつき合いで、実際に会ったことがない友だちがいると回答しており、いる人では、「10人以上」と回答している人が多く、中学生で 9%、高校生では 15%そのように回答していることを明らかにしている。また、中高生のソーシャルメディアの利用率は 75%であり、43.7%がソーシャルメディア上で知り合った経験をもち、15.1%が実際にその相手と対面していたという研究もみられる（桂川・渡邊・小野・佐藤・関・坂野・福田・平田・蔵田, 2012）。

オンラインのコミュニケーションに関する研究は、インターネット上における自己開示に焦点を当てたもの（佐藤・吉田, 2008）、CMC（computer mediated communication）が攻撃性に及ぼす影響を検討したもの（佐藤・日比野・吉田, 2010）など、これまでに数多く行われてきており、友人関係を対象にした研究もいくつか見られる。たとえば、Buote, Wood, & Pratt（2009）は、オンラインの友人とオフラインの友人において、友人関係満足感や友人との親密さなどが異なるのかどうかについて検討している。また、Cynthia, Marilyn, Nicole, & Lia（2010）は、ブロガー（ブログを書く人）を対象に調査を行っており、ブログ内においてよく自己開示を行うブロガーは、あまり自己開示を行わないブロガーと比べて、オンラインの友人が多く、友人との関係に満足していることを明らかにしている。さらに、facebook における友人数が、社会的知覚や記憶と関連のある領域の灰白質密度と関連があるという

³ SNS（ソーシャルネットワーキングサービス）とは、自己プロフィールの Web 公開を特別な知識がなくてもできるようにしたうえで、会員相互の出逢いやコミュニケーションを促進する仕掛けが盛り込まれたサービスのことである（湯田・小野・藤原, 2006）。

研究も見られる (Kanai, Bahrami, Roylance, & Rees, 2011)。Facebook や mixi などの SNS においては、友人つき合いの多さが画面上に表示されるために、当人がどの程度のつながりを有しているのかについて他者が認識することが容易である。また、幅広い年代の友人とつながりを作ることができることも特徴であり、これらの点において、友人関係における動機づけとオンライン上の友人とのコミュニケーションにどのような関連が見られるのかを検証することは大変興味深い。

今後は、対面でのコミュニケーションを中心とした友人関係だけではなく、オンライン上でのコミュニケーションを中心とした友人関係についても扱う必要があるだろう。友人関係における動機づけとオンライン上での友人関係との関わりについて検討した研究はこれまでに見られていないが、自己決定性の高い動機づけ（中でも同一化）が親しい友人との間での積極的なコミュニケーションを促進することや、自己決定性の低い動機づけ（中でも取り入れ）が友人からの評価を下げないようにするコミュニケーションを促進することといった、本研究において見られた知見が、オンライン上での友人関係においても得られるのかどうかについて検討していくことは、現代青年の友人関係の特徴を包括的に捉えるために重要であろう。

本論文に含まれている研究の発表先一覧

研究 1

未発表

研究 2～4

査読付き論文

本田周二 (2012) . 友人の数が自己評価及び他者評価に及ぼす影響 人間文化 H&S, **30**, 1-8.

研究 5

未発表

研究 6

未発表

研究 7

学会発表

本田周二 (2013) . 友人関係における動機づけと友人とのコミュニケーションおよび精神的健康との関連 日本パーソナリティ心理学会第 22 回大会発表論文集, 129.

研究 8

査読付き論文

本田周二 (2012) . 友人関係における動機づけが対人葛藤時の対処方略に及ぼす影響 パーソナリティ研究, **21**, 152-163.

研究 9

未発表

引用文献

- Adams, R. G., Bliszner R., & De Vries, B. (2000). Definitions of friendship in the third age: age, gender, and study location effects. *Journal of Aging Studies*, **14**, 117-134.
- 相澤寛史 (2003) . 同性友人関係における投資モデルの精緻化 実験社会心理学研究, **42**, 131-145.
- Ambady, N., & Weisbuch, M.(2010). Nonverbal behavior. In D. T. Gilbert, S. T. Fiske, & G. Lindzey(Eds.), *Handbook of Social Psychology*(pp.464-497.). Hoboken, NJ:John Wiley and Sons.
- Anderson, N. H. (1968). Likableness ratings of 555 personality-trait words. *Journal of Personality and Social Psychology*, **9**, 272-279.
- 安藤美華代 (2010) . 中学生の情緒的および行動上の問題を予防する心理教育的プログラム—“サクセスフル・セルフ 2”のアウトカム評価研究— 岡山大学大学院教育学研究科集録, **144**, 27-37.
- Bagwell, L. C., Bender, E. S., Andreassi, L. C., Kinoshita, L. T., Montarello, A. S., & Mukker, G. J. (2005). Friendship quality and perceived relationship changes predict psychosocial adjustment in early adulthood. *Journal of Social and Personal Relationships*, **22**, 235-254.
- Baker, L. R., & Oswald, D. L. (2010). Shyness and online social networking services. *Journal of Social and Personal Relationships*, **27**, 873-889.
- Baumeisiter, R.F.(2011). Need-to-belong theory. In P. A. M. Van Lange, Kruglanski, A. W., & Higgins, E. T.(Eds.) *Handbook of Theories of Social Psychology*.(pp.122-140.). London:Glyph International.
- Benesse 教育研究開発センター (2010) . 第 2 回子ども生活実態基本調査 ベネッセコーポレーション.
- Berndt, T. J. (2002). Friendship quality and social development. *Current Directions In Psychological Science*, **11**, 7-10.
- Berscheid, E., Snyder, M., & Omoto, A. M. (1989). The relationship closeness inventory: Assessing the closeness of interpersonal relationships. *Journal of Personality and Social Psychology*, **57**, 792-807.
- Brown, B.B, Clasen, D.R., & Eicher, S.A. (1986). Perceptions of peer pressure, peer conformity dispositions, and self-reported behavior among adolescents. *Developmental Psychology*, **22**, 521-530.
- Byrne, D. (1961). Interpersonal attraction and attitude similarity. *Journal of Abnormal and Social Psychology*, **62**, 713-715.
- Byrne, D., Clire, Jr., G. L., & Worchel, P. (1966). Effect of economic similarity-dissimilarity on interpersonal attraction. *Journal of Personality and Social Psychology*, **4**, 220-224.
- Buote, V. M., Wood, E., & Pratt, M. (2009). Exploring similarities and differences between online and offline

- friendships : The role of attachment style. *Computers in Human Behavior*, **25**, 560-567.
- Caldwell, A. M., & Peplau, A. L. (1982). Sex differences in same-sex friendship. *Sex Roles*, **8**, 721-732.
- Carver, S. C. (2010). Personality. In R. F. Baumeister., & E. J. Finkel(Eds.), *Advanced Social Psychology : The State of the Science* (pp.757-794.) . Oxford University Press.
- Cirino, R. J. & Beck, S. J. (1991). Social information processing and the effects of reputational, situational, developmental, and gender factors among children's sociometric groups. *Merrill-palmer Quarterly*, **37**, 561-582.
- Clark, M. S., & Mills. J. R. (2011). A theory of communal(and exchange) relationships. In P. A. M. Van Lange, Kruglanski, A. W., & Higgins, E. T.(Eds.) *Handbook of Theories of Social Psychology*.(pp.232-250.). London:Glyph Internaltional.
- Coleman, J.C. (1980). Friendship and the peer group in adolescence. In J. Adelson(ED.), *Handbook of Adolescent Psychology*(pp.408-431). New York: John Wiley.
- Cynthia M.H. Bane, Marilyn Cornish, Nicole Erspamer, and Lia Kampman. *Cyberpsychology, Behavior, and Social Networking*. April 2010, 13: 131-139. doi:10.1089/cyber.2009.0174.
- Deci, E. E., La Guardia, J. G, Moller, A. C/. Scheiner, M. J., & Ryan, R. M. (2006). On the benefits of giving as well as receiving autonomy support : Mutuality in close friendships. *Personality and Social Psychology Bulletin*, **32**, 313-327.
- 土井隆義 (2008) . 友だち地獄ー「空気を読む」世代のサバイバルー 筑摩書房
- Dunbar. R. (2011) . How many friends does one person need ? 藤井留美 (訳) 友達の数は何人? インターシフト
- 遠藤利彦 (2008) . 感応する心 : 視線と表情が発するもの (言語・非言語コミュニケーション～言葉と身体との相互作用～) 電子情報通信学会技術研究報告. HCS, ヒューマンコミュニケーション基礎, **108**, 13-18.
- 榎本淳子 (1999) . 青年期における友人との活動と友人に対する感情の発達的变化 教育心理学研究, **47**, 180-190.
- 榎本淳子 (2001) . 青年期の友人関係における欲求と感情・活動との関連 教育心理学研究, **48**, 444-453.
- Fehr, B. (2008). Friendship Formation Sprecher, S, Wenzel, A., & Larvey, J.(Eds) *Handbook of Relationship Initiation*.(pp.29-54.) Psychology Press.
- 藤井貴之・亀島信也・高岸治人 (2010) . 集団との関係とネガティブな感情表出との関係 : 最後通

- 告ゲームを用いた実験 関西福祉科学大学紀要, **14**, 151-157.
- 藤枝静暁・相川充 (2001) . 小学校における学級単位の社会的スキル訓練の効果に関する実験的検討 教育心理学研究, **49**, 371-381.
- 藤森立男 (1989) . 日常生活にみるストレスとしての対人葛藤の解決過程に関する研究 社会心理学研究, **4**, 108-116.
- 藤原美聡・石田弓 (2010) . 大学生における友人関係機能と孤独感の関連 広島大学大学院心理臨床教育研究センター紀要, **9**, 107-115.
- 福岡欣治 (2007) . 大学新入生のソーシャル・サポートと心理的適応 - 自己充實的達成動機の媒介的影響 - 静岡文化芸術大学研究紀要, **8**, 69-77.
- 福岡欣治 (2010) . 日常ストレス状況体験における親しい友人からのソーシャル・サポート受容と気分状態の関連性 川崎医療福祉学会誌, **19**, 319-328.
- 福岡欣治・橋本幸 (1995) . 大学生における家族および友人についての知覚されたサポートと精神的健康との関係 教育心理学研究, **43**, 185-193.
- 福岡欣治・橋本幸 (1997) . 大学生と成人における家族と友人の知覚されたソーシャルサポートとそのストレス緩和効果 心理学研究, **68**, 403-409.
- 福森崇貴・小川俊樹 (2006) . 青年期における不快情動の回避が友人関係に及ぼす影響—自己開示に伴う傷つきの予測を媒介要因として— パーソナリティ研究, **15**, 13-19.
- 福重清 (2006) . 若者の友人関係はどうなっているか 浅野智彦 (編) 検証・若者の変貌 勁草書房 pp.115-145.
- 古畑和孝・岡隆 (1994) . 社会心理学小辞典 有斐閣小辞典シリーズ
- 古谷嘉一郎・坂田桐子 (2006) . 対面, 携帯電話, 携帯メールでのコミュニケーションが友人との関係維持に及ぼす効果: コミュニケーションのメディアと内容の適合性に注目して 社会心理学研究, **22**, 72-84.
- 古谷嘉一郎・坂田桐子・高口央 (2005) . 友人関係における親密度と対面・携帯メールの自己開示との関連 対人社会心理学研究, **5**, 21-31.
- Giles, L. C., Flonek, G. F. V., Luszcz, M. A., & Andrews, G. R. (2005). Effect of social networks on 10 year survival in very old Australians : The Australian longitudinal study of aging. *Journal of Epidemiology and Community Health*, **59**, 574-579.
- 長谷川孝治 (2007) . 自尊心と安心さがしが他者からの拒絶認知に及ぼす影響 信州大学人文科学論集人間情報学科編, **42**, 53-65.

- 長谷川孝治・浦光博・前田和寛 (2009) . 低自尊心者の下方螺旋過程に対する友人関係の進展段階の調整効果 信州大学人文科学論集人間情報学科編, **43**, 53-63.
- Hatfield, E., & Rapson, R. L. (2011). Equity theory in close relationships. In P. A. M. Van Lange, Kruglanski, A. W., & Higgins, E. T.(Eds.) *Handbook of Theories of Social Psychology*.(pp.200-217.). London:Glyph International.
- 速水敏彦・田畑治・吉田俊和 (1996) . 総合人間科の実践による学習動機づけ変化 名古屋大学教育学部紀要, **43**, 23-35.
- 林文俊 (1978) . 対人認知構造の基本次元についての一考察 名古屋大学教育学部紀要 (教育心理学) , **25**, 233-247.
- 林泰子・宮田仁・林徳治 (2004) . 高校生を対象とした携帯メールと友人関係に関する調査研究 山口大学教育学部附属教育実践総合センター研究紀要, **17**, 191-201.
- Heyl, V., & Schmitt, M. (2007). The contribution of adult personality and recalled parent-child relations to friendships in middle and old age. *International Journal of Behavioral Development*, **31**. 38-48.
- Hill, R.A. & Dunbar, R.I.M. (2003) Social network size in humans. *Human Nature*, **14**, 53-72
- 本田真大・大島由之・新井邦二郎 (2009) . 不適応状態にある中学生に対する学級単位の集団社会的スキル訓練の効果—ターゲット・スキルの自己評定, 教師評定, 仲間評定を用いた検討— 教育心理学研究, **57**, 336-348.
- 本田周二 (2008) . 賞賛獲得欲求・拒否回避欲求が対人葛藤時の対処行動に及ぼす影響 東洋大学 21世紀ヒューマン・インタラクシオン・リサーチ・センター研究年報, **5**, 143-147.
- Ickes, W., & Duck, S.(2004). The social psychology of personal relationships.. 大坊郁夫・和田実 (監訳) パーソナルな関係の社会心理学 北大路書房
- Igarashi, T., Takai, J., & Yoshida, T. (2005). A longitudinal study of social network development via mobile phone text messages: Focusing on gender differences. *Journal of Social and Personal Relationships*, **22**, 691-713.
- 五十嵐祐・吉田俊和 (2003) . 大学新入生の携帯メール利用が入学後の孤独感に与える影響 心理学研究, **74**, 379-385.
- 石田靖彦 (1998) . 友人関係の親密化に及ぼすシャイネスの影響と孤独感 社会心理学研究, **14**, 43-52.
- 石田靖彦 (2003) . 友人関係の形成過程におけるシャイネスの影響: 大学新入生の縦断的研究 対人社会心理学研究, **3**, 15-22.

- 石本雄真 (2010) . 青年期の居場所感が心理的適応, 学校適応に与える影響 発達心理学研究, **21**, 278-286.
- 岩永誠 (1991) . 友人・異性との関係 今泉信人・南博文 (編) “人生周期の中の青年心理学” 北大路書房 pp.140-152.
- Izard, E. C. (1960). Personality similarity, positive affect, and interpersonal attraction. *Journal of Abnormal and Social Psychology*, **61**, 484-485.
- Joiner, Jr., T. E., Alfano, M. S., & Metalsky, G. I. (1992). When depression breeds contempt: Reassurance-seeking, self-esteem, and rejection of depressed college students by their roommates. *Journal of Abnormal Psychology*, **101**, 165-173.
- Kalpidou, M, Dan Consitn, M. A., & Jessica, M. B. A. (2011). The relationship between facebook and the well-being of undergraduate college students. *Cyberpsychology, Behavior, and Social Networking*, **14**, 183-189.
- Kanai, R, Bahrami, B, Roylance, R., & Rees, G. (2011). Online social network size is reflected in human brain structure. *PROCEEDINGS OF THE ROYAL SOCIETY BIOLOGICAL SCIENCES*, doi:10.1098/rspb.2011.1959.
- 笠原華葉・島谷まき子 (2012) . 中学生の神話欲求および対友人不安感情が友人とのつきあい方に及ぼす影響 昭和女子大学生生活心理研究所紀要, **14**, 69-78.
- 春日清孝 (2009) . 人間関係はむずかしい? 佐藤典子 (編) 現代人の社会とこころ 弘文堂 pp.87-111.
- 桂川泰典・渡邊由里子・小野僚子・佐藤佳奈・関泰子・坂野葵・福田安奈・平田夏鈴・蔵田三沙代 (2012) . 中高生のソーシャルメディア利用実態 (2011 年) : ソーシャルメディアにおける“出会い”とその失敗の分析を中心に 情報文化学会誌, **19**, 16-24.
- 加藤司 (2001) . 対人ストレス過程の検証 教育心理学研究, **49**, 295-304.
- 加藤司 (2003) . 大学生の対人葛藤方略スタイルとパーソナリティ, 精神的健康との関連について 社会心理学研究, **18**, 78-88.
- 加藤司 (2007) . 大学生における友人関係の親密性と対人ストレス過程との関連性の検証 社会心理学研究, **23**, 152-161.
- 勝谷紀子 (2009) . ネットのなかの自己と対人関係 安藤清志 (編) 自己と対人関係の社会心理学 北大路書房 pp.94-104.
- Kim, J., & Lee, J. E. (2011). The facebook paths to happiness: effects of the number of facebook friends and self-presentation on subjective well-being. *Cyberpsychology, Behavior, and Social Networking*, **14**, 359-364.

- 木村昌紀 (2010) . 人間関係のコミュニケーション 藤森立男 (編著) 人間関係の心理パースペクティブ 誠信書房 pp.55-70.
- 木村昌紀・磯友輝子・大坊郁夫 (2012) . 関係に対する展望が対人コミュニケーションに及ぼす影響—関係継続の予期と関係継続の意思の観点から— 実験社会心理学研究, **51**, 69-78.
- Knapp, C.W., & Harwood, B. T. (1977). Factors in the determination of same-sex friendship. *Journal of Genetic Psychology*, **131**, 83-90.
- 黒角健太・深田博己 (2005) . 携帯電話・携帯メールコミュニケーションに及ぼす性と性役割の影響 広島大学心理学研究, **5**, 69-92.
- 小林知博 (2012) . 親しい他者との間の自己・他者評価の関係性およびそれらの評価が社会的適応に及ぼす影響 対人社会心理学研究, **12**, 129-134.
- 小池はるか・吉田俊和 (2007) . 共感性と対人的迷惑認知, 迷惑認知の根拠との関連: 行為者との関係性による違いの検討 パーソナリティ研究, **15**, 266-275.
- Laursen B., & Collins. W. A. (1994). Interpersonal conflict during adolescence. *Psychological Bulletin*, **115**, 197-209.
- Leary, M.R.(2011). Sociometer Theory. In P. A. M. Van Lange, Kruglanski, A. W., & Higgins, E. T.(Eds.) *Handbook of Theories of Social Psychology*.(pp.141-159.). London:Glyph Internaltional.
- Lochman, E. J, Powell, P. N, Boxmeyer, L. C, Qu, L, Wells, C. K., & Windle, M. (2009). Implementation of a school-based prevention program: Effects of counselor and school characteristics, *Professional Psychology:Research and Practice*, **40**, 476-482.
- 前田尚子 (1992) . 非親族からのソーシャルサポート 折茂肇 (編) 新老年学 東京大学出版会 pp.1116-1128.
- Manyu, L, Irene, F. H, Timothy, N. J., & Jeewon, C. (2013). Do friends always help your studies? Mediating processes between social relations and academic motivation. *Social Psychology of Education*, **16**, 129-149.
- 政木みき (2013) . “楽しい”学校, ネットでつながる友だち: 「中学生・高校生の生活と意識調査 2012」から① 放送研究と調査, **63**, 26-50.
- 松田美佐 (2000) . 若者の友人関係と携帯電話利用 - 関係希薄化論から選択的關係論へ 社会情報学研究, **4**, 111-122.
- 松井豊 (1990) . 友人関係の機能“青年期における友人関係” 斎藤耕二・菊池章夫 (編) “社会科の心理学ハンドブック” 川島書店 pp.283-296.
- 松尾由美・大西麻衣・安藤玲子・坂元章 (2006) . 携帯電話使用が友人数と選択的友人関係志向に

- 及ぼす効果の検討 パーソナリティ研究, **14**, 227-229.
- 松岡弥玲・加藤美和・神戸美香・澤本陽子・菅野真智子・詫間里嘉子・野瀬早織・森ゆき絵 (2006) . 成人期における他者視点 (子ども, 配偶者, 両親, 友人, 職場の人) の理想・現実事故のズレが自尊感情に及ぼす影響: 性役割観との関連から 教育心理学研究, **54**, 522-533.
- 三島浩路 (2003) . 親しい友人間にみられる小学生の「いじめ」に関する研究 社会心理学研究, **19**, 41-50.
- 三島浩路 (2008) . 小学校高学年で親しい友人から受けた「いじめ」の長期的な影響—高校生を対象にした調査結果から 実験社会心理学研究, **47**, 91-104.
- 宮本聡介 (2007) . 親しくない友人が「友人」でありうる条件 日本社会心理学会第 48 回大会, 522-523.
- 宮本聡介 (2012) . 友人ネットワークサイズと社会的自尊心の関連: 日米大学生の比較 明治学院大学心理学紀要, **22**, 61-72.
- Miyata, K., Boase, J., Wellman, B., & Ikeda, K. (2003). The mobile-izing Japanese: Connecting to the internet by PC and webphone in Yamanashi. http://www.chass.utoronto.ca/~wellman/netlab/PUBLICATIONS/_frames.html
- 宮崎弦太・池上知子 (2011) . 関係喪失のコストが社会的拒絶への反応に及ぼす影響: 相互依存理論とソシオメーター理論による統合的アプローチ 社会心理学研究, **26**, 219-226.
- 長峰伸治 (1999) . 青年の対人葛藤場面における交渉過程に関する研究: 対人交渉方略モデルを用いた父子・母子・友人関係での検討 教育心理学研究, **47**, 218-228.
- 長沼恭子・落合良行 (1998) . 同性の友達とのつきあい方からみた青年期の友人関係 青年心理学研究, **10**, 35-47.
- 永田良昭 (1989) . 仲間関係の変貌 教育心理, **37**, 180-183.
- 内閣府 (2001) . 青少年の社会的適応能力と非行に関する調査 内閣府.
- 内閣府 (2002) . 第 4 回情報化社会と青少年に関する意識調査 内閣府.
- 内閣府 (2007) . 第 5 回情報化社会と青少年に関する意識調査 内閣府.
- 内閣府 (2004) . 第 7 回世界青年意識調査 内閣府.
- 内閣府 (2009) . 第 8 回世界青年意識調査 内閣府.
- 内閣府 (2010a) . 非行原因に関する総合的研究調査 内閣府.
- 内閣府 (2010b) . 若者の意識に関する調査 内閣府.
- 内閣府 (2011) . 青少年のインターネット利用環境実態調査 内閣府
- 中務哲郎 (2004) . 友情について 岩波文庫

- 中村雅彦 (1990) . 大学生の友人関係の発達過程に関する研究 : 関係関与性を予測する社会的交換モデルの比較検討 社会心理学研究, **5**, 29-41.
- 中村雅彦 (2006) . 「気が合う」とはどういうことか 児童心理, **60**, 37-41.
- 中村佳子・浦光博 (2000) . ソーシャル・サポートと信頼との相互関連について : 対人関係の継続性の視点から 社会心理学研究, **15**, 151-163.
- 中尾達馬 (2012) . 愛着スタイル尺度における自己評定と他者評定の不一致が適応へ及ぼす影響 琉球大学教育学部紀要, **80**, 225-234.
- 根本橋夫 (2006) . 子どもが成長する友だちづきあい 児童心理, **60**, 2-11.
- Nettle, D.(2009). Personality～What makes you the way you are 竹内和世 (訳) パーソナリティを科学する～特性5因子であなたがわかる 白揚社
- 野村信威・橋本幸 (2006) . 青年期における回想と自我同一性および心理的適応の関連 パーソナリティ研究, **15**, 20-32.
- 小川一美 (2011) . 対人コミュニケーションに関する実験的研究の動向と課題 教育心理学年報, **50**, 187-198.
- 小保方晶子・無藤隆 (2005) . 中学生の非行傾向行為と抑うつ傾向との関連 心理臨床学研究, **23**, 533-545.
- Ojanen, T, Sijtsema, J. J., Hawley, P. H., & Little, T. D. (2010). Intrinsic and extrinsic motivation in early adolescents' friendship development : Friendship selection, influence, and prospective friendship quality, *Journal of Adolescence*, 1-15, doi:10.1016/j.adolescence.2010.08.004.
- 岡田涼 (2005) . 友人関係への動機づけ尺度の作成および妥当性・信頼性の検討 : 自己決定理論の枠組みから パーソナリティ研究, **14**, 101-112.
- 岡田涼 (2006) . 自律的な友人関係への動機づけが自己開示および適応に及ぼす影響 パーソナリティ研究, **15**, 52-54.
- 岡田涼 (2008) . 友人との学習活動における自律的な動機づけの役割に関する研究 教育心理学研究, **56**, 14-22.
- 岡田涼・中谷素之 (2006) . 動機づけスタイルが課題への興味に及ぼす影響 : 自己決定理論の枠組みから 教育心理学研究, **54**, 1-11.
- 岡田涼・中山留美子 (2011) . 友人関係の形成初期場面における動機づけと親和傾向, 感情との関連—自己決定理論の枠組みから— 感情心理学研究, **19**, 28-33.
- 岡田朋之・松田美佐 (2012) ケータイ社会論 有斐閣選書

- 岡田努 (1993) . 現代の大学生における「内省および友人関係のあり方」と「対人恐怖的心性」との関係 発達心理学研究, **4**, 162-170.
- 岡田努 (1999) . 現代大学生の認知された友人関係と自己意識の関連について 教育心理学研究, **47**, 432-439.
- 岡田努 (2011) . 現代青年の友人関係と自尊感情の関連について パーソナリティ研究, **20**, 11-20.
- 岡田努 (2012) . 現代青年の友人関係に関する新たな尺度の作成 : 傷つけ合うことを回避する傾向を中心として 金沢大学人間科学系研究紀要, **4**, 19-34.
- 岡本清孝・上池安昭 (1999) . 第二の個体化の過程からみた親子関係および友人関係 教育心理学研究, **47**, 248-258.
- 岡本香・江川朋幸 (2003) . 携帯メディアコミュニケーションと大学生の友人関係態度との関連 日本教育工学雑誌, **27**, 137-140.
- 奥田秀宇 (1996) . 生物的・社会的・心理的視座から見た対人関係 大坊郁夫・奥田秀宇 (編) 親密な対人関係の科学 誠信書房 pp.1-21.
- 奥田秀宇 (1997) . 人をひきつける心 サイエンス社
- 大淵憲一・福島治 (1997) . 葛藤解決における多目標—その規定因と方略選択に関する効果 心理学研究, **68**, 155-162.
- 大谷宗啓 (2007) . 高校生・大学生における状況に応じた切替 : 心理的ストレス反応との関連にも注目して 教育心理学研究, **55**, 480-490.
- 大塚幸男 (1997) . 友情論 白水社
- オリコン (2010) . “親友” “友情” に関する調査結果 <<http://life.oricon.co.jp/73727/full/>> (2013年11月3日)
- 小塩真司 (1998) . 青年の自己愛傾向と自尊感情, 友人関係のあり方との関連 教育心理学研究, **46**, 280-290.
- 小塩真司 (1999) . 高校生における自己愛傾向と友人関係のあり方との関連 性格心理学研究, **8**, 1-11.
- 落合良行・佐藤有耕 (1996) . 青年期における友達とのつきあい方の発達的变化 教育心理学研究, **44**, 55-65.
- Popp, D., Laursen, B., Kerr, M., Stattin, H., & Burk, W. J. (2008). Modeling homophily over time with an actor-partner interdependence model. *Development Psychology*, **44**, 1028-1039.
- Rahim, M. A., & Bonoma, T. V. (1979). Managing organizational conflict: A model for diagnosis and

- intervention. *Psychological Reports*, **44**, 1323-1344.
- Reader, N., & English, B. H. (1947). Personality factors in adolescent female friendships. *Journal of Consulting Psychology*, **11**, 212-220.
- Roberto, K. A., & Kimboko, P. J. (1989). Friendship in later life : Definitions and maintenance patterns. *International Journal of aging & human development*, **28**, 9-19.
- Rubin, J. Z., Pruitt, D. G., & Kim, S. H. (1994). *Social conflict : Escalation, Stalemate, and Settlement*(3rd ed.). New York : McGraw-Hill.
- Rusbult, C. E., Agnew, C. R., & Arriaga, X. R. (2011). The investment model of commitment processes. In P. A. M. Van Lange, Kruglanski, A. W., & Higgins, E. T.(Eds.) *Handbook of Theories of Social Psychology*.(pp.218-231.). London:Glyph Internaltional.
- Ryan, R. M., & Deci, E. L. (2000). Self-determination theory and the facilitation of intrinsic motivation, social development, and well-being. *American Psychologist*, **55**, 68-78.
- 斎藤環 (2005) . 「負けた」教の信者たち—ニート・ひきこもり社会論 中公新書
- 櫻井茂男 (2009) . 自ら学ぶ意欲の心理学 有斐閣
- 佐藤広英・日比野桂・吉田富士雄 (2010) . CMC (Computer-Mediated Communication) が攻撃性に及ぼす効果 筑波大学心理学研究, **39**, 35-43.
- 佐藤広英・吉田富士雄 (2008) . インターネット上における自己開示—自己 - 他者の匿名性の観点からの検討 心理学研究, **78**, 559-566.
- 佐藤有耕 (2010) . 大学新入生の友だちとのつきあい方と満足度の推移 筑波大学心理学研究, **40**, 27-34.
- 澤田匡人・新井邦二郎 (2002) . 妬みの対処方略選択に及ぼす, 妬み傾向, 領域重要度, および獲得可能性の影響 教育心理学研究, **50**, 246-256.
- Selfhout, M., Burk, W., Branje, S., Denissen, J., Aken, M. V., & Meeus, W. (2010). Emerging late adolescent friendship networks and Big Five personality traits : A social network approach. *Journal of Personality*, **78**, 509-538.
- Shaver, P.R., & Mikulincer, M.(2011). Attachment Theory. In P. A. M. Van Lange, Kruglanski, A. W., & Higgins, E. T.(Eds.) *Handbook of Theories of Social Psychology*.(pp.160-179.). London:Glyph Internaltional.
- 柴橋祐子 (2001) . 青年期の友人関係における自己表明と他者の表明を望む気持ち 発達心理学研究, **12**, 123-134.

- 柴橋祐子 (2004) . 青年期の友人関係における「自己表明」と「他者の表明を望む気持ち」の心理的要因 教育心理学研究, **52**, 12-23.
- 嶋信宏 (1991) . 大学生におけるソーシャルサポートの日常生活ストレスに対する効果 社会心理学研究, **7**, 45-53.
- 下田俊介 (2009) . 親密な友人関係における自己評価維持と関係性維持 : 拡張自己評価維持モデルからの検証 社会心理学研究, **25**, 70-76.
- 下斗米淳 (2000) . 友人関係の親密化過程における満足・不満足及び葛藤の顕在化に関する研究—役割期待と遂行のズレからの検討 実験社会心理学研究, **40**, 1-15.
- 庄司正実 (2011) . 心理学系大学新生における大学生活への適応感と満足感に関連する要因 目白大学心理学研究, **7**, 15-27.
- 須藤春佳 (2011) . 親友関係の光と影 神戸女学院大学論集, **58**, 87-102.
- 鈴木有美 (2002) . 自尊感情と主観的ウェルビーイングからみた大学生の精神的健康 名古屋大学大学院教育科学研究紀要, 心理発達科学, **49**, 145-155.
- 鈴木由美・藤生英行・田上不二夫 (1999) . 女子大学生の友人数におよぼす自己効力と性格特性 (社会的内向性・思考的内向性) の影響について 和洋女子大学紀要, **39**, 129-138.
- 総務省 (2011) . 平成 22 年通信利用動向調査 総務省
- 高木浩人 (1992) . 自己開示行動に対する認知と対人魅力に関する研究 - 親密な関係と親密でない関係の比較 実験社会心理学研究, **32**, 60-70.
- 高橋桂子・斎藤英理 (2013) . 大学生のコミュニケーション能力と対人ストレスコーピングが友人関係満足感に与える影響 新潟大学教育学部研究紀要, **5**, 171-179.
- 武田裕子・前田健一・徳岡大・石田弓 (2012) . 大学生の親密度の異なる友人への自己開示と親和動機の関係 広島大学大学院心理臨床教育研究センター紀要, **11**, 97-108.
- 田中麻未 (2006) . パーソナリティ特性およびネガティブ・ライフイベントが思春期の抑うつに及ぼす影響 パーソナリティ研究, **14**, 149-160.
- 谷口淳一・大坊郁夫 (2002) . 同性友人関係におけるパーソナリティの類似性認知が魅力判断に与える影響 対人社会心理学研究, **2**, 51-64.
- 谷口弘一・橋本剛・田中宏二 (2006) . 大学生におけるサポートと対人ストレス 日本心理学会第 70 回大会発表論文集, 276.
- 丹野宏昭 (2007) . 友人との接触別にみた大学生の友人関係機能 パーソナリティ研究, **16**, 110-113.
- 丹野宏昭 (2010) . 高齢者の QOL に果たす友人関係機能の検討 対人社会心理学研究, **10**, 125-129.

- 丹野宏昭・下斗米淳・松井豊 (2005) . 親密化過程における自己開示機能の探索的検討—自己開示に対する願望・義務感の分析から— 対人社会心理学研究, **5**, 67-75.
- Tapscott, D. (2009) . *Grown Up Digital: How the Net Generation is Changing Your World* 栗原潔 (訳) デジタルネイティブが世界を変える 翔泳社
- 遠矢幸子 (1996) . 友人関係の特性と展開 大坊郁夫・奥田秀宇 (編) 親密な対人関係の科学 誠信書房 pp.90-116.
- 内田由紀子・遠藤由美・柴内康文 (2012) . 人間関係スタイルと幸福感：つきあいの数と質からの検討 実験社会心理学研究, **52**, 63-75.
- Veniegas, R. C., & Peplau, L. A. (1997). Power and the quality of same-sex friendships. *Psychology of Women Quarterly*, **21**, 279-297.
- 和田実 (1993) . 同性友人関係：その性および性役割タイプによる差異 社会心理学研究, **8**, 67-75.
- 和田実 (1996) . 同性への友人関係期待と年齢・性・性役割同一性との関連 心理学研究, **67**, 232-253.
- 和田実 (2001) . 性, 物理的距離が新旧の同性友人関係に及ぼす影響 心理学研究, **72**, 186-194.
- Walterman, A. S. (1993). Developmental perspectives on identity formation: From adolescence to adulthood. In J.E. Marcia, A. S. Walterman, D. R. Matterson, S. L. Archer, & L. L. Orlofsky, (Eds) *Ego identity : a handbook for psychosocial research*. New York: Springer-Verlag. 42-68.
- 渡部麻美 (2010) . 高校生の主張性の4要件と友人関係における行動および適応との関連 心理学研究, **81**, 56-62.
- 渡部麻美・松井豊 (2011) . 高校生時と大学生時における主張性の4要件と友人関係満足感との関連 対人社会心理学研究, **11**, 35-42.
- 山本真理子・松井豊・山成由紀子 (1982) . 認知された自己の諸側面の構造 教育心理学研究, **30**, 64-68.
- 山岡もも・松永しのぶ (2013) . 高齢者の友人関係—友人関係機能, 友人関係満足度と主観的幸福感との関連— 学苑・人間社会学部紀要, **868**, 9-19.
- 山田ゆかり (2006) . 大学新生における適応感の検討 名古屋文理大学紀要, **6**, 29-36.
- 山口剛 (2012) . 動機づけの変遷と近年の動向 - 達成目標理論と自己決定理論に注目して - 法政大学大学院紀要, **69**, 21-38.
- 山中一英 (1994) . 対人関係の親密化過程における関係性の初期分化現象に関する検討 実験社会心理学研究, **34**, 105-115.
- 山崎勝之・佐々木恵・内田香奈子 (2013) . トップ・セルフ「いのちと友情」の学校予防教育—教

育方法の特徴— 鳴門教育大学学校教育研究紀要, **27**, 23-30.

八城薫 (2010) . 大学生のセルフ・モニタリング傾向と友人選択および友人関係スタイルとの関係
大妻女子大学人間関係学部紀要人間関係学研究, **12**, 207-219.

吉武尚美 (2010) . 中学生の生活満足度に関連するポジティブ・イベントーイベントの項目収集と
相互影響関係の検討— 教育心理学研究, **58**, 140-150.

Yuki, M., Schug, J., Horikawa, H., Takemura, K., Sato, K., Yokota, K., & Kamaya, K. (2007). Development of
a scale to measure perceptions of relational mobility in society. *CERSS Working Paper 75, Center for
Experimental Research in Social Sciences, Hokkaido University.*

謝辞

本学位論文を作成するにあたり、ご指導いただきました主指導教授の社会学部教授安藤清志先生に心より感謝申し上げます。至らぬ点ばかりの私を修士の頃より根気強く温かな目で見守っていただきました。安藤先生の元でお世話にならなければ、博士論文を仕上げることはできませんでした。心より御礼申し上げます。続いて、副指導教授を引き受けてくださいました社会学部教授堀毛一也先生に感謝申し上げます。大変丁寧に、そして適切なアドバイスをいただきましたこと、心より感謝致します。また、博士論文の審査を引き受けて下さいました社会学部教授黒沢香先生にも感謝致します。そして、博士課程在学中に1年間主指導教授としてご指導くださいました慶応義塾大学文学部教授今井芳昭先生に感謝申し上げます。

次に、神戸学院大学人文学部教授小石寛文先生、並びに、鳴門教育大学大学院人間形成コース教授／鳴門教育大学予防教育科学センターセンター長山崎勝之先生に感謝申し上げます。仕事をしながらの論文執筆の中、遅々として進まない私をいつも大変親身になってサポートしていただきましたこと、本当にうれしく思っております。特に山崎先生には、毎週のように博士論文の草稿を見ていただきました。先生のご指導によって博士論文の形を作ることができたと思います。本当にありがとうございました。

各研究を実施するにあたりご協力いただきました他の大学、専門学校の先生方、調査にご協力いただきました学生の皆様に感謝致します。また、様々な学会や研究会等で有益なコメントをいただきました、他大学等の先生方（特に、神戸女学院大学人間科学部専任講師木村昌紀先生、神戸学院大学人文学部専任講師山本恭子先生、愛知東邦大学人間学部助教藤重育子先生）に御礼申し上げます。先生方のご指摘によって研究の方向性をはっきりとすることができました。

そして、研究だけではなく様々な面においてお世話になった東洋大学の先輩方（特に、永房典之先輩、鈴木公啓先輩、大久保暢俊先輩、石田裕昭先輩）、同期（佐藤史緒さん、結城裕也さん、細川隆史さん、相馬拓朗さん）、後輩（下田俊介さん）の皆様にも心より御礼申し上げます。

最後に、博士後期課程への進学という決断を受け入れ、サポートをしてくれた実家の家族に感謝申し上げます。本当に、ありがとうございました。

2014年3月